新潟県埋蔵文化財調査報告書　第114集

一般国道８号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩　倉　遺　跡

２　０　０　３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩　倉　遺　跡

２　０　０　３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号は新潟市を起点とし、京都市に至る、北陸地方と京阪神地方を結ぶ日本海側の幹線道路であり、新潟県の社会･経済の発展に大きな役割を果たしてきました。

しかし、現在の糸魚川市域の国道８号は、交通渋滞･交通事故･降雪時の交通障害･騒音等の交通環境の悪化が深刻な問題となっています。糸魚川東バイパス建設事業は、このような問題を解決し、幹線道路としての役割や地域の生活道路としての機能を回復させるために計画されました。

糸魚川地区は、古くは縄文時代からの多くの遺跡が密集する地域であり、これまでの発掘調査によっても貴重な成果が得られています。今回調査した岩倉遺跡では、室町時代から江戸時代に至る遺構と遺物が発見されました。

調査の結果、建物跡や水田跡と思われる遺構、多数の土器や陶磁器に加え、多様な木製品、金属製品が出土し、当時の人々の暮らしぶりを考える上で貴重な資料となりました。

今回の報告が、今後の中世史研究に資すると共に、県民の皆様の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大な御協力と御援助を賜りました糸魚川市教育委員会並びに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜った国土交通省北陸地方整備局高田工事事務所に対し、深甚なる敬意を表します。

平成15年３月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は新潟県糸魚川市田伏字岩倉403番地ほかに所在する岩倉遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は国道８号糸魚川東バイパスの建設に伴い、新潟県教育委員会(以下、県教委)が国土交通省から受託して実施したものである。

2　発掘調査は、調査主体である県教委が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)に発掘調査を委託し、平成13年度に実施した。

3　航空写真撮影は、株式会社イビソクに委託した。

4　発掘調査作業及び関連諸工事については、株式会社帆刈組に作業委託した。

5　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成13年度に実施し埋文事業団調査課職員・嘱託員がこれにあたった。

6　出土遺物と調査に関する資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管している。遺物の注記記号は「イワ」とし、出土地点や層位を併記した。

7　本書中の挿図・図版で示す方位は、すべて真北である。

8　引用・参考文献は著者及び発行年(西暦)を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　本書に掲載した遺物の番号は土器・陶磁器、金属製品、石製品・土製品、木製品でそれぞれ通し番号を付け、図面図版・写真図版・観察表の番号は一致している。

10　本書の執筆は山本　肇(埋文事業団調査課主査)、小野塚徹夫(同　主任調査員)、本間克成(同)が担当し、下記のとおり執筆分担した。編集は山本、高橋が行った。執筆の分担は以下のとおりである。

第Ⅱ章２　第Ⅲ章３　第Ⅳ章１～５　第Ⅴ章１Ａ、Ｄ　第Ⅵ章　・・・・山本、高橋
第Ⅰ章　　第Ⅲ章１、２　第Ⅴ章１Ｂ　・・・・・・・・・・・・・・・・小野塚
第Ⅱ章１　第Ⅳ章６　第Ⅴ章１Ｃ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・本間

11　岩倉遺跡の遺構・遺物の概要については『埋文にいがた』『第９回 報告会資料』『年報』に記載があるが、本報告書との間に齟齬がある場合は、本報告をもって正とする。

12　発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から多くの御指導・御助言を賜った。ここに厚くお礼申し上げる。(敬称略　五十音順)

相羽重徳　安藤正美　池田　亨　伊藤敏雄　井上慶隆　金子拓男
木島　勉　小林昌二　斎藤　進　榊　守夫　鈴木郁夫　関根慎二
竹之内　耕　舘野和巳　長　圓美　土田孝雄　鶴巻康志　伴　美津恵
丸山活龍　水澤幸一　宮田進一　山川資郎　山岸洋一　吉原義則
渡辺ますみ　和田　護　糸魚川市教育委員会　糸魚川市都市整備課　梶屋敷区民会館
西日本旅客鉄道株式会社糸魚川駅　大和川公民館

目　　次

第Ⅰ章　序　　説…… 1

1　調査に至る経緯…… 1

2　調査と整理体制…… 2

A　調査体制…… 2

B　整理体制…… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 3

1　地理的環境…… 3

2　歴史的環境…… 6

第Ⅲ章　調査の概要…… 9

1　一次調査…… 9

2　二次調査…… 10

A　調査方法…… 10

B　調査の経過…… 11

3　層序…… 12

第Ⅳ章　遺　　構…… 13

1　礎石建物跡…… 13

2　方形区画遺構…… 13

3　溝…… 14

4　竹管遺構…… 14

5　その他…… 14

6　氾濫原…… 15

第Ⅴ章　遺　　物…… 16

1　中・近世…… 16

A　陶磁器類…… 16

B　木製品…… 17

C　金属製品…… 20

D　土製品、石製品…… 21

2　その他の時代…… 21

第VI章　まとめ……22

1　遺構について…… 22
A　方形区画遺構…… 22
B　礎石建物…… 22
2　遺物について…… 22

《要　約》…… 24
《引用文献》…… 24

挿図目次

第1図　遺跡位置図…… 4
第2図　遺跡周辺の地形…… 5
第3図　周辺の遺跡分布図…… 6
第4図　周辺遺跡出土遺物実測図…… 7
第5図　田伏、梶屋敷地区地籍図…… 8
第6図　一次調査トレンチ設定図…… 9
第7図　グリッド設定図…… 10
第8図　調査地区割図…… 11
第9図　土層柱状図…… 12
第10図　礎石柱穴構築模式図……13
第11図　Vb層（氾濫原）分布図……15
第12図　氾濫原の状況写真……15
第13図　木簡実測図及び写真……18

表　目　次

第1表　焼山火山の活動史…… 3
第2表　方形区画遺構一覧…… 13
別表1　陶磁器類観察表…… 25
別表2　金属製品観察表…… 28
別表3　銭貨一覧表…… 28
別表4　木製品観察表…… 29

図版目次

[図面図版]

図版1　遺構全体図
図版2　遺構分割図 (1)
図版3　遺構分割図 (2)
図版4　遺構断面図
図版5　竹管遺構実測図
図版6　遺物実測図 (1) 陶磁器
図版7　遺物実測図 (2) 陶磁器
図版8　遺物実測図 (3) 陶磁器
図版9　遺物実測図 (4) 陶磁器
図版10　遺物実測図 (5) 木製品
図版11　遺物実測図 (6) 木製品
図版12　遺物実測図 (7) 金属製品
図版13　遺物実測図 (8) 銭貨拓影図
図版14　遺物実測図 (9) 土製品、石製品等

[写真図版]

図版 15　遺跡付近空中写真 (1947)
図版 16　遺跡遠景
図版 17　遺跡遠景、遺跡完掘状況
図版 18　遺跡空中写真
図版 19　方形区画遺構
図版 20　方形区画遺構
図版 21　礎石建物跡 (SB21)
図版 22　竹管遺構
図版 23　土層写真他
図版 24　遺物写真 (陶磁器) (1)
図版 25　遺物写真 (陶磁器) (2)
図版 26　遺物写真 (陶磁器) (3)
図版 27　遺物写真 (木製品) (1)
図版 28　遺物写真 (木製品) (2)
図版 29　遺物写真 (金属製品)
図版 30　遺物写真 (金属製品・土製品・石製品)
図版 31　遺物写真 (銭貨)

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

西頸城の西部地域では、北アルプスから続く山地・丘陵が日本海へ急激に高度を下げるため、その変化にとんだ地形は美しい景観を作り出すと共に、そこに住む人々の生活に大きく影響を与えている。

糸魚川は、古代より北陸道の難所といわれた親不知・子不知がすぐ西に位置し、また「塩の道」として知られる松本街道の日本海側の基点として、古くから交通の要所として栄えてきた。それも周辺の自然地形がもたらした恩恵のひとつであろう。現在でも同地内を通過する国道８号は、北陸自動車道と共に、関西・北陸地方と北越地方を結ぶ主要幹線である。また、地元においては、山地と海岸を結び、南北に延びる道路を東西方向に連結・連絡する、重要な生活道路としての役割を担ってきた。

しかし、近年の自動車交通量の増加は通勤・通学時間帯を中心に糸魚川周辺地域で慢性的な渋滞を引き起こしている。地元でも渋滞の解消や、交通安全の確保を含めた交通環境の改善策を求めていた。建設省（現国土交通省、以下国土交通省）はその状況を踏まえて、糸魚川東地区の交通混雑の解消と幹線ネットワークの充実と強化を目的に、国道８号糸魚川東バイパス建設を平成元年に事業化した。事業区間は、糸魚川市間脇から同市押上に至る6.9㎞である。

国土交通省と新潟県教育委員会（以下、県教委）は計画予定地内において、事前に埋蔵文化財の調査を実施するために協議を重ねた。国土交通省から調査依頼を受けた県教委は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を再委託した。埋文事業団は平成11年10月13・14日に予定法線内を中心に分布調査を実施して、地表の遺物の採集に努めた。その結果、糸魚川市大字梶屋敷字薬師堂ほかの地点で数点の遺物を採集し、遺跡の推定地として県教委に報告した。遺跡推定地での一次調査が必要とされたため、国土交通省から依頼を受けた県教委は再び調査を埋文事業団に委託し、平成12年６月５日～９日、12日～14日の計８日間で一次調査を実施した。調査対象面積は、未買収地11,250㎡ を含めて35,000㎡ である。調査の結果、中世～近世の陶磁器やかわらけなどの土器、硯、用途不明の木製品などが出土し、中世の包含層が確認された。本線部分の5,350㎡が二次調査の対象とされ、取付け道路部分の1,500㎡及び丘陵部分の6,000㎡ については、用地買収後一次調査を実施しその結果を待って判断することになった。遺跡名は岩倉遺跡とし、遺跡の周知化の手続きが執られた。

その後、国土交通省と県教委、埋文事業団は協議を重ね、平成13年度当初から二次調査を実施することになった。調査対象区域は旧ほ場の上に盛土され、住宅、公民館等の建造物があったが、平成12年度中に住宅基礎等の撤去も完了し、更地になっていた。しかし、調査対象区北縁の市道にガス・水道管、老朽工業用水管、光ケーブルが埋設されていたため当初の発掘予定地から除外する部分もあり、調査面積は約4,700㎡ となった。

二次調査は４月に開始した。調査地区の中央を走る南北の市道、及び付帯する電柱、水道管の撤去が遅れたこともあったが、関係各機関や地元の方々の協力により９月末には現場調査を終了した。なお、取り扱いが未確定であった取付け道路部分の1,500㎡ の一次調査も実施し、その結果から二次調査は要しないと判断された。また、調査予定区内ではあったが、西側の丘陵斜面についても再度トレンチを入れて試掘

をした結果、遺跡の延びが認められず、斜面部分の全面発掘は実施しなかった。

2　調査と整理体制

A　調　査　体　制

発掘調査は一次調査を平成12年度に行い、平成13年度に二次調査を実施した。

[一次調査　平成12年度]

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　野本　憲雄）
調　　査　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　須田　益輝(事務局長)
管　　理　長谷川司郎(総務課長)
庶　　務　椎谷　久雄(総務課主任)
調査総括　戸根与八郎(調査課長)
調査指導　高橋　保(調査課建設省担当課長代理)
調査担当　小田由美子(調査課主任調査員)
調査職員　後藤　孝(調査課主任調査員)

[二次調査　平成13年度]

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）
調　　査　財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括　須田　益輝(事務局長)
管　　理　長谷川司郎(総務課長)
庶　　務　椎谷　久雄(総務課主任)
調査総括　岡本　郁栄(調査課長)
調査指導　高橋　保(調査課国土交通省担当課長代理)
調査担当　山本　肇(調査課主査)
調査職員　小野塚徹夫(調査課主任調査員)　　本間　克成(同 主任調査員)

B　整　理　体　制

出土遺物量は土器・陶磁器、木製品、金属製品等がコンテナ浅箱で28箱で、これらの遺物は現地で水洗・注記までを行った。分類・実測以降の整理作業は、埋文事業団において平成13年10月～平成14年３月末まで調査課職員・嘱託員が行った。

[平成13年度]

整理主体、総括、管理、庶務、整理総括、整理指導、担当、職員は平成13年度調査体制と同じ。
作　　業　小山たか子　廣野　澄　田辺恵美子(以上、嘱託員)

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

岩倉遺跡は、新潟県南西部に当たる糸魚川・西頸城地域に位置する。西の富山県、南の長野県との境界には標高2,500m級の飛騨山脈が連なり、その北端は親不知・子不知の断崖で日本海に落ち込んでいる。南東部には焼山をはじめとする標高2,000m級の妙高山地及び西頸城山地がほぼ東西方向に走り、その北部には鉾ヶ岳（1,316m）が位置している。これらの山地から姫川・早川・名立川などの急流河川が北流し、その下流や河口付近には数段の河成段丘や河成・海成低地が形成されている。岩倉遺跡は早川河口左岸、海岸線から約300m内陸に位置し、標高約10mである。

新潟県南西部は、日本列島を大きく二分するフォッサマグナを含む地域で、地質的にみると極めて複雑である。フォッサマグナとは本州中央部を南北に横断する大構造帯であり、これによって東北日本と西南日本とに分けられている。フォッサマグナの西縁を画するのが糸魚川－静岡構造線である。これは新潟県糸魚川市から姫川上流に向かい、長野県松本盆地・諏訪盆地・山梨県甲府盆地西縁を通って静岡県静岡市に達する大断層であり、その大半が活断層である。特に、松本市付近の牛伏寺断層は、近い将来M8.0クラスの直下型大地震の発生が心配されているなど活動度の高い断層である。

糸魚川－静岡構造線以西の西南日本は、日本列島の骨格を構成している古・中生代の堆積岩・変成岩類からなるのに対して、構造線以東の東北日本は地質時代の新しい新生代第三紀・第四紀の堆積岩類・火成岩類から構成されている。岩倉遺跡は構造線の東側に当たり、完新統からなる低地に位置している。遺跡周辺の早川沿いには、新第三系からなる丘陵がある。当然のことながら、構造線以西の黒姫山・明星山は古生代石炭紀～ペルム紀の石灰岩・ヒスイを含有する岩石などから構成されており、石灰岩は採掘対象とされている。近年建設された糸魚川市のフォッサマグナミュージアム、青海町の自然史博物館などは、このような複雑な地質学的背景のもとに設置されたのである。

次に、現在でも活動を続けている焼山（2,400m）について、早津［1994］

		地　層	活動の内容
完新世	第4期	新期火砕堆積物	噴気活動 1974 水蒸気爆発　1962-3 1949
		大谷火砕流堆積物Ⅱ	イオウ噴出(1852) 最新のマグマ噴火(1773) （火山灰・火砕流の噴出）
		ＫＧ-a火山灰層	
	第3期	円頂丘溶岩流	溶岩円頂丘の形成 （中世，1361年）
		大谷火砕流堆積物Ⅰ	火山灰・火砕流の噴出
		ＫＧ-b火山灰層	
	第2期	坊々抱岩溶岩流 一ノ倉溶岩流 前山溶岩流 早川火砕流堆積物	焼山最大規模の火山灰・火砕流・溶岩流の噴出 （平安時代，887年？，989年？）
		ＫＧ-c火山灰層	
	第1期	ＫＧ-d火山灰層 真川溶岩流 焼山川火砕流堆積物	火山灰・火砕流・溶岩流の噴出
		前川土石流堆積物	火山活動の開始（約3,000年前）
		ＫＧ-e火山灰層	

第１表　焼山火山の活動史　＊　早津1994　より抜粋

次に、現在でも活動を続けている焼山（2,400m）について、早津［1994］

第1図　遺跡位置図　〔国土地理院、平成8年発行5万分の1「糸魚川」、昭和63年発行5万分の1「小滝」
平成13年発行5万分の1「高田西部」「妙高山」を使用〕

にしたがって記載する。焼山火山は、基盤の新第三系のつくる西頸城山地の標高約2,000mの浸食平坦面（高位面）の上に噴出したものである。噴出物は、やや粘性度の低い溶岩流と粘性度の高い溶岩、それに火砕流が主体であり、降下テフラは比較的少ないのが特徴である。焼山火山の噴火史は、第１期～第４期までの４つの時期に分けられている（第１表）。

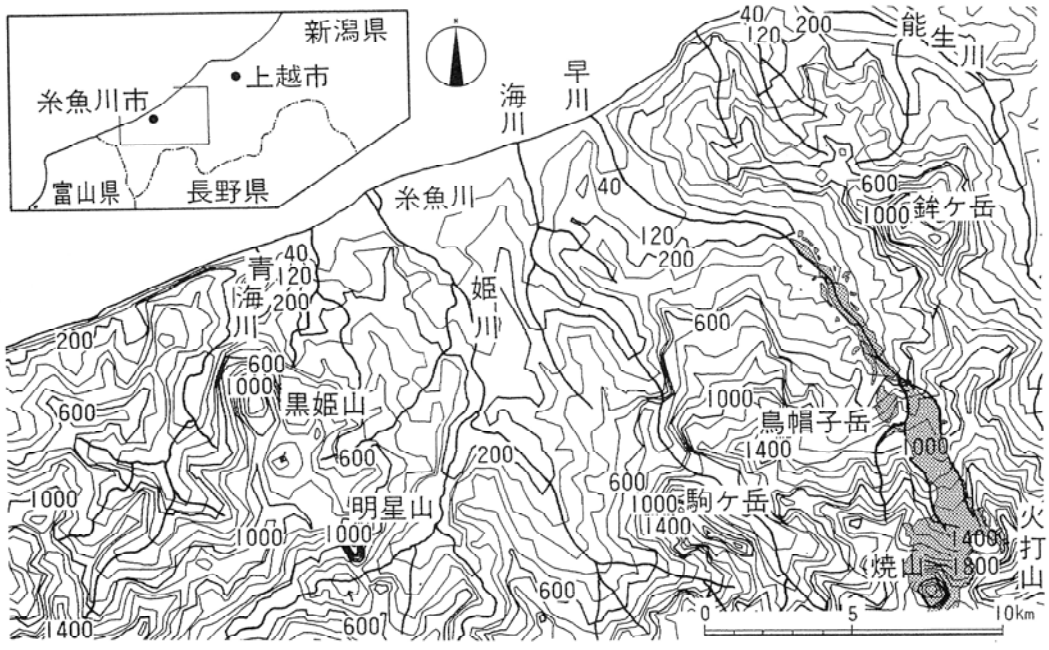
第１期は、焼山火山の最初の活動と言われており、噴出物の最下位の地層である前川土石流に埋積された形で、直径0.1～1.4mの多数のブナの大木が、基盤に根を下ろした状態で発見されている。この埋もれ木の^{14}C年代測定が実施されており、3,060±85y.B.P.［新潟大学研究グループ1976］、3,330±100y.B.P.［Gak-10569］、あるいは2,930±110y.B.P.［Gak-10570］［後２者は、早津1985］などの測定結果が報告されている。したがって、焼山火山の活動は、おおむね約3,000年前頃にはじまったと推定される。なお、前川土石流堆積物の上位にある考古遺物は、岩倉遺跡より約１km南方にある立ノ内遺跡［高橋ほか1988］で出土した縄文時代晩期最末期の土器（浮線文系の深鉢）であり、考古学的にも矛盾しない。

第２期は、約1,000年前の平安時代の活動で、焼山火山最大規模の火砕流・溶岩流を噴出した。早川火砕流、前川溶岩流がこれに相当し、地元に残る『伴家文書』・堀口家の『林蔵文庫』・『往古早川谷之絵図』などから、887年、989年の噴火記録に相当するものと考えられている。

第３期は、現在の溶岩円頂丘の形成がなされた活動で、^{14}C年代値、考古学的資料［高橋ほか1988］や文書などから、1361年の古記録に対応する活動と見なされている。噴出物としては、大谷火砕流堆積物Ⅰ、山頂を形成した溶岩円頂丘である。

第４期は、溶岩円頂丘形成後、現在までの活動を指している。焼山火山最新のマグマ噴火は大谷火砕流堆積物Ⅱであり、これは1773年の噴火記録と対応すると考えられている。このときの激しい噴火によって、山頂火口「御鉢」が形成されたのもと考えられている。

上流にこのような活動的な火山をもつ早川は、岩屑供給量が過剰となるため河口付近でも直径数mの巨礫が見られ、水害による被害も多い。岩倉遺跡周辺の水田には、早川の氾濫洪水によって運ばれたと思わ

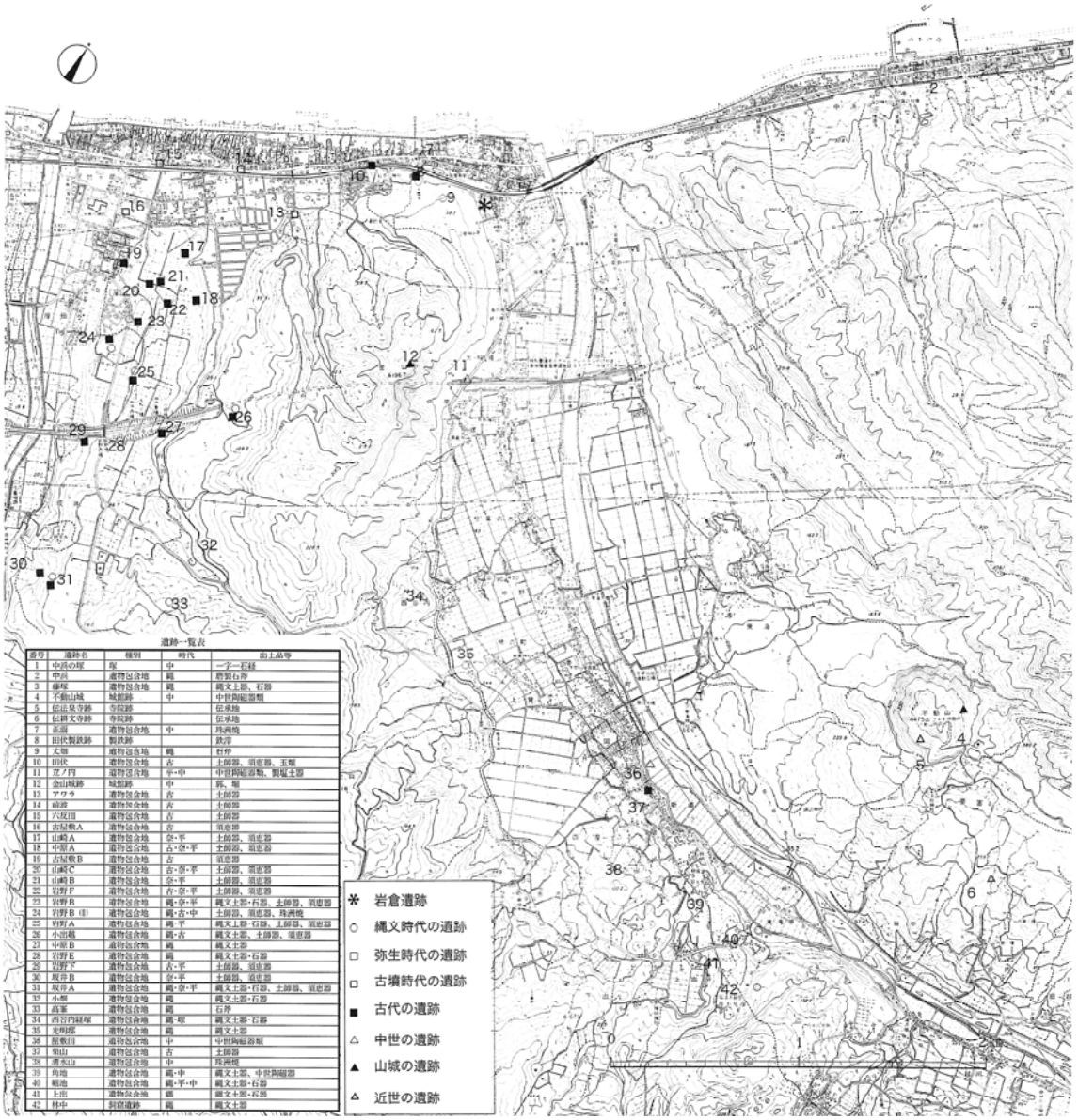


第２図　遺跡周辺の地形　　焼山火山の堆積物　　接峰面図は鈴木（1982）を焼山火山の堆積物の分布は早津（1994）を一部改変して使用

れる巨礫の上に小さな祠が作られ、水神様を祀っている。また、遺跡の中にも現河床にあるような角の取れた砂礫が堆積している。礫は火山起源のものが多く、やはり早川の氾濫洪水によって運ばれてきたものと考えられる。礫のインブリケーションや砂層のラミナ、遺跡地形面の傾きから、南東から北西方向に流下してきたものと推察している。

2　歴史的環境

早川に面した流域では、縄文時代の遺跡は少ないが、岩倉遺跡の上流新町の清水山付近に縄文時代の遺跡が認められる。地形的にもやや高くなっている部分である。その下流域の平野部では、縄文遺跡はほとんど確認されていないが、早川右岸の下早川の丘陵上にはいくつか縄文遺跡がある（39～42）。40の細池遺跡は縄文晩期の遺跡で、昭和47年に市教育委員会によって発掘調査が行われている。ここでは、硬玉製の玉類や工具類が出土している。早川流域は、焼山火山の火砕流流下地域のため、たびたび火砕流により埋



遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	出土品等
1	中房の塚	塚	中	一字一石経
2	甲向	遺物包含地	縄	磨製石斧
3	藤塚	遺物包含地	縄	縄文土器、石器
4	不動山城	城館跡	中	中世陶磁器類
5	伝伝見寺跡	寺院跡		伝承地
6	伝神文寺跡	寺院跡		伝承地
7	茶畑	遺物包含地	中	珠洲焼
8	田代製鉄跡	製鉄跡		鉄滓
9	丈領	遺物包含地	縄	石棒
10	田伏	遺物包含地	古	土師器、須恵器、玉類
11	宮ノ門	遺物包含地	中・中	中世陶磁器類、製塩土器
12	金山城跡	城館跡	中	郭、堀
13	アワラ	遺物包含地	古	土師器
14	前原	遺物包含地	古	土師器
15	六反田	遺物包含地	古	土師器
16	古屋敷A	遺物包含地	古	須恵器
17	山崎A	遺物包含地	奈・平	土師器、須恵器
18	中原A	遺物包含地	古・奈・平	土師器、須恵器
19	古屋敷B	遺物包含地	古	須恵器
20	山崎C	遺物包含地	古・奈・平	土師器、須恵器
21	山崎B	遺物包含地	奈・平	土師器、須恵器
22	岩野F	遺物包含地	古・奈・平	土師器、須恵器
23	岩野B	遺物包含地	縄・奈・平	縄文土器・石器、土師器、須恵器
24	岩野B（上）	遺物包含地	縄・古・中	土師器、須恵器、珠洲焼
25	岩野A	遺物包含地	縄・平	縄文土器・石器、土師器、須恵器
26	小田堀	遺物包含地	縄・古	縄文土器、土師器、須恵器
27	中原B	遺物包含地	縄	縄文土器
28	岩野E	遺物包含地	縄	縄文土器・石器
29	岩野下	遺物包含地	古・平	土師器、須恵器
30	坂井B	遺物包含地	奈・平	土師器、須恵器
31	坂井A	遺物包含地	縄・奈・平	縄文土器・石器、土師器、須恵器
32	小原	遺物包含地	縄	縄文土器・石器
33	高峯	遺物包含地	縄	石斧
34	西谷内経塚	遺物包含地	縄・経	縄文土器・石器
35	光明原	遺物包含地	縄	縄文土器
36	熊倉山	遺物包含地	中	中世陶磁器類
37	菊山	遺物包含地	古	土師器
38	雷名山	遺物包含地	中	珠洲焼
39	角地	遺物包含地	縄・中	縄文土器、中世陶磁器
40	細池	遺物包含地	縄・平・中	縄文土器・石器
41	上出	遺物包含地	縄	縄文土器・石器
42	林中	阿弥陀跡	縄	縄文土器

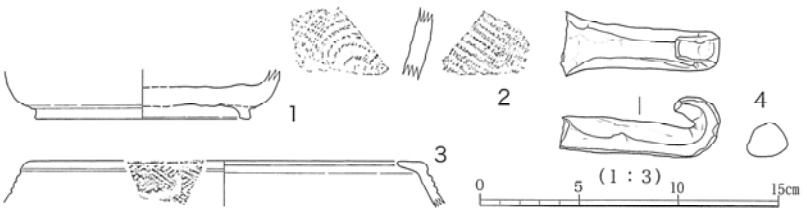
第3図　周辺の遺跡分布図

（糸魚川市役所「糸魚川都市計画図」1:10,000原図 平成7年発行）

没した所で、新しくは江戸時代の1773年にも噴火記録があり、低い部分に存在したであろう縄文時代遺跡は、埋没してしまった可能性がある。ただ、金山城のある丘陵の先端部には丈畑遺跡があり、縄文時代の石斧が採集されている。金山城のある丘陵を隔てた海川流域では、右岸の段丘上にいくつかの縄文遺跡がある。28の岩野Ｅ遺跡は、北陸自動車道建設に伴って県教委が発掘調査した遺跡である。縄文時代早期末の条痕文系土器が出土している。25の岩野Ａ遺跡は、昭和56年に市教育委員会が発掘調査した遺跡で、縄文前期の土器、石器、玦状耳飾りが出土し、また奈良平安時代の土器も出土している。弥生時代の遺跡は、この地域では皆無と言ってよい。立ノ内遺跡(11)では弥生初期の浮線文系土器が出土している。古墳時代の遺跡も明確でないが、岩倉遺跡には当該期と考えられる土器、紡錘車が出土している。また、田伏遺跡(10)は、玉作遺跡として有名である。昭和45年に市教育委員会が発掘調査を行っており、土器のほかに、子持ち勾玉、各種玉類、硬玉原石が出土している。古代になると遺跡数は急増する。特に海川右岸の段丘上に顕著である。県教育委員会が北陸道建設に伴って発掘調査した小出越遺跡(26)、岩野下遺跡(29)等がある。

中世になると、城館跡関連の遺跡が認められる。早川流域で最大規模の不動山城(4)が右岸にある。この早川谷は、他地域に抜けるルートとなっていなかったと見えて、これより上流に城跡は存在しない。この城は独立した円錐形の山塊に築かれた山城で、早川流域一帯を眺望でき、勝山城・根知城等を視界に入れることができる。戦国期の城で、上杉家譜代の家臣として仕えた山本寺氏の居城と伝えられている。付近には城館に関連する地名が多く残っており、「本丸、二の丸、ダイガミネ(代官面)、烽火場、大倉、千人溜、倉屋敷、御殿跡、倉跡、鎧研場、人切場、土蔵屋敷」等がある。南側には要害と呼ばれる集落があり、ここには「御殿屋敷跡」と呼ばれている場所も存在し、井戸跡からは椀・膳の破片が多く出土したと伝えられている。この不動山城の支城とされるのが、市指定史跡金山城(12)である。金山城は、位置的には海岸ルートを見下ろす位置にあり、糸魚川市街地を一望できる。この城の麓にあるのが立ノ内遺跡であり、今回の岩倉遺跡である。立ノ内遺跡では、大規模な掘立柱建物が整然と見つかっており、堀等はないものの多分に居館跡的であるが、寺院跡ではないかとの意見もある。また、７の正面遺跡では、珠洲焼が採集されているが、中世の屋敷や集落跡は立ノ内遺跡を除いて明確でない。

第４図は、周辺遺跡出土遺物である。１・２は大和川の山崎Ａ遺跡採集の須恵器である。１は高台杯である。２は甕体部で、いずれも平安時代に当たる。３・４は、東海の居村で採集した土器である。３は瓦質土器の口縁部である。全面黒色で、外面に型押しの文様がある。火鉢であろう。４は把手または脚部と考えられる。３・４ともに近世であろう。 第５図は、明治４・５年頃作成された地籍図をつないだものである。図面上が日本海、右側に早川が北流し、日本海に注いでいる。スクリントーンは、山地・畑地・水田を表しているが、水田部分は早川・姥川の氾濫原であったことが、水田・道・水路等の方向から想定できる。調査した地区は、字岩倉であるが、山裾には字棚田があり、現在も山裾に残っている段々水田と一致する。

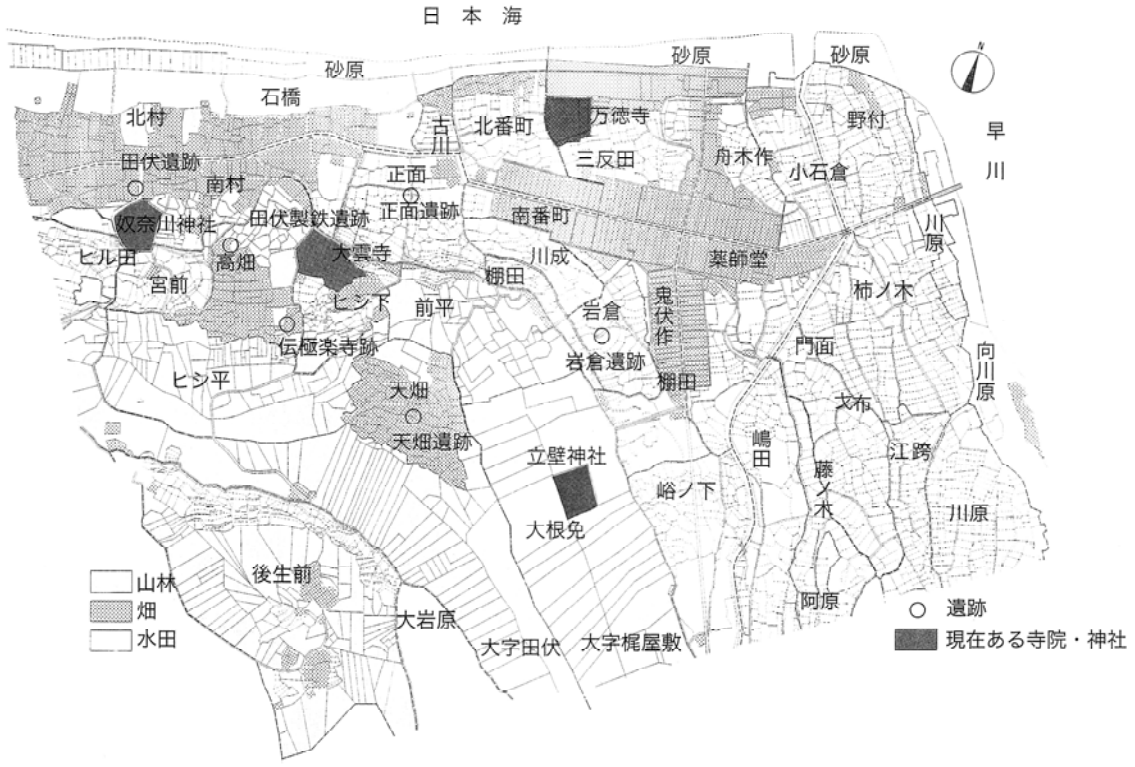


第４図　周辺の遺跡出土遺物実測図

発掘調査区の岩倉も氾濫原であったと考えられるが、調査結果でも近世以降の氾濫による礫層が確認されている。また、岩倉の北西隣には字川成の地名も残る。

現在の梶屋敷地区は、小口を道路に向けた町屋が整然と並んでいる。近世北陸道が通っていた所で、梶屋敷には駅があり、宿駅として本陣も存在した。特に加賀藩の参勤交代においては、重要な位置を占めていたと考えられる。

さて、当地の寺社としては、大雲寺・万徳寺・奴奈川神社・立壁神社がある。大雲寺は、現在の田伏地区にある。過去帳から、開山は慶長年間から元和年間（17世紀初め）で、現在の東頸城郡浦川原村にある顕聖寺の末寺として建立されたことがわかる。寺の南側には伝極楽寺跡があり、そこからは東頸城郡に分布する板碑と同様なものが出土しており、寺は当初から現在地にあった可能性が高い。一方梶屋敷地区で最も古いとされる万徳寺は、明応２年（1493）に加賀国から移り、当初は堂のみの寺であった。その後、天文６年（1567）に東本願寺から寺号を授かり、別の地に移ったと伝えられている。現在も万徳寺には東本願寺からの慶長年間の書状が残されており、「いといがわ　かじやしき　万徳寺」の記載がある。したがって、寺号を授かってからは、地籍図にある現在地に存在したと考えられる。



第５図　田伏、梶屋敷地区地籍図

第Ⅲ章　調査の概要

1　一　次　調　査

平成11年に実施した分布調査の結果、遺物が地表で採集され、遺跡の推定地とされた道路予定法線内について一次調査を実施した。調査期間は平成12年６月５日～９日、12日～14日の計８日間である。調査対象面積は35,000㎡で、その内実際にトレンチで掘削した実質調査面積は410㎡である。

調査対象地区内の任意の位置に試掘トレンチを設定し、バックホーを使って徐々に掘り下げ、遺構と遺物の検出、発見に努めた。なお、調査地区は旧住宅地であり、建造物の上屋はすでに撤去されていたが、基礎が残っていた。そのため試掘トレンチの設定箇所が制限されることがあり、小型の重機での対応となった。また、人力による発掘となったところもあった。掘削したトレンチは総数で56か所である。

調査の結果、調査区西側の丘陵裾部に接する平坦地において、中世から近世初頭までの時期の遺物が出土し、遺物包含層も確認された。遺構が確認できなかったため、遺跡の性格を特定するに至らなかったが、石硯・火鉢・青磁などが出土し、付近に在地領主居館、寺院跡等の存在の可能性をうかがわせた。ちなみに調査地の南約１㎞には中世の立ノ内遺跡があり、近隣の大運寺には中世の板碑がある。遺物、包含層が確認された西側約5,350㎡は「岩倉遺跡」として県教委の遺跡台帳に登録し、また二次調査が必要とされた。用地買収が未了のためトレンチが設定できなかった取付け道路部分の1,500㎡、及び西側丘陵斜面部については後日一次調査を実施し、その結果を待って取り扱いを判断することにした。この調査結果は、平成12年６月に報告した。

なお、二次調査期間内に、取り扱いの未定であっ

第６図　一次調査トレンチ設定図

た取付け道路部分と西側丘陵斜面部に一次調査を実施したが、遺跡の存在は確認できず、同地区では二次調査を実施しなかった。

2　二　次　調　査

A　調　査　方　法

グリッドの設定（第７図）

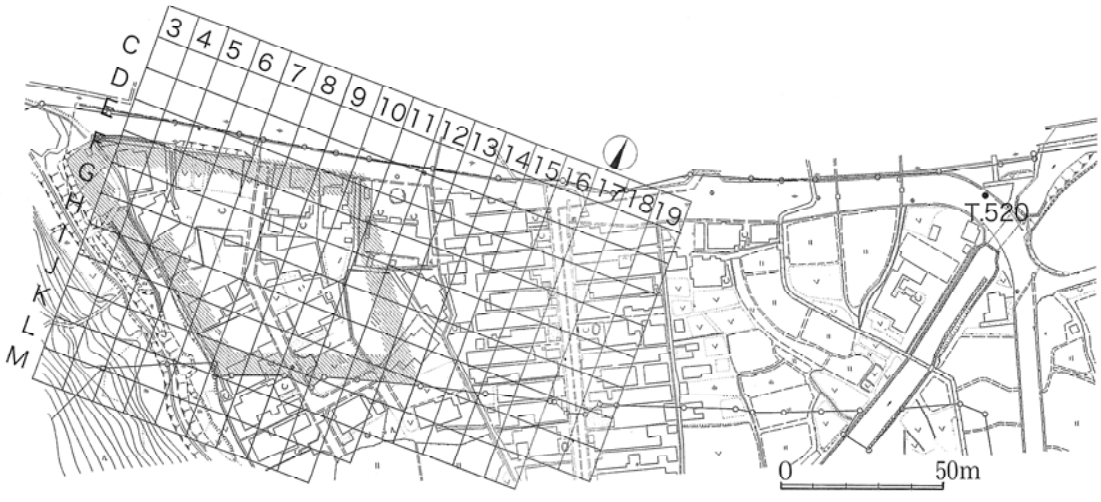
グリッドの設定においては、国土交通省作成の『糸魚川東バイパス基準点網図』他計画図に表記のあるT520（旧座標X:117123.165・Y:－52047.206・H:10.034）を基準点とした。基準点を基に国土座標の方向にあわせたX座標1171,100、Y座標-52,320.000のラインを基線として設定し、その交点をグリッドの基点とした。グリッドは10m四方を単位とした大グリッドと、大グリッドを２m四方に25等分した小グリッドの二種類ある。大グリッドの名称は、グリッド基点から東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットを用いて表した。また小グリッドは大グリッドの北西隅を１、南東隅を25として１～25の算用数字で表した。グリッドは「６H25」のように大グリッドの後ろに小グリッドをつけて呼称している。

なお、調査区内では大グリッドの南西隅の杭に、各大グリッド名を表記して調査に利用した。

掘　削　作　業

表土から近世の遺物包含層まではバックホーによる掘削を行った。遺物包含層は基本的に移植ゴテ・ミニジョレンにより人力で掘削したが、遺物の希薄な地点は、ホソ・スコップなども用いた。ただし、Ⅲ区の北側では遺物包含層が深く、また江戸時代以降の水田が深いため、中世、古代の遺物包含層までバックホーで掘削した地点がある。

またⅠ区北側はわずかに遺物は出土するが、包含層は確認できず、人頭大の川原石や粗砂の層が存在した。そのため土層確認を目的に、表土除去の最中にバックホーで深さ約２mほどの深堀りを行った。その結果、該当区域は河川の氾濫原であることが確認された。さらに該当区域内に南北方向の2本のトレンチ設定し試掘を行ったが、遺構は確認できなかった。



第７図　グリット設定図

排水溝掘削作業

調査区には礫層が数メートル下に存在したため、矢板の打設に不適であり、安全勾配で調査区周囲を掘削した。しかし、南側や西側の丘陵からの出水などが予想され、全周に暗渠排水を設定することとした。各排水溝の接合隅には集水枡を設け、電気配線により24時間稼動可能な排水ポンプを設置した。なお暗渠排水はドレン管を用いず、川砂利のみを排水溝に入れるものとした。

遺　構　番　号

遺構は検出順に一連の番号を付し、番号の前にＳＫ・ＳＤ・ＳＸの種別記号を付して表した。ＳＫは土坑、ＳＤは溝、ＳＸは不明遺構を表す。ピットについては番号の前に「Ｐ」をつけた。なお、礎石建物については、全体に遺構名（ＳＢ）と遺構番号を付して記録している。

Ｂ　調　査　の　経　過

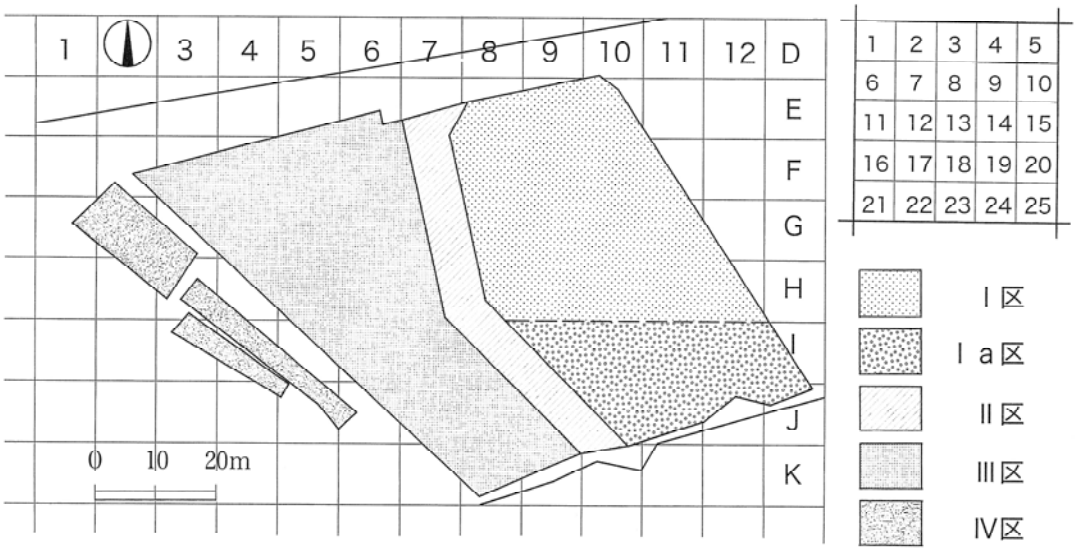
平成12年度の一次調査の結果を踏まえて、関係諸機関内で協議調整を行った結果、二次調査は平成13年度当初から実施することになった。調査期間は平成13年４月16日～10月３日である。二次調査必要面積は5,350㎡ であったが、老朽水道管や光ケーブル等の埋設された調査区北縁の市道や、西側丘陵斜面が最終的に調査から除外されたため、実質調査面積は約4,700㎡ となった。

平成13年３月には関係諸機関、地元関係者との打合せを行いながら調査の準備に入った。３月19日～28日にかけて国土交通省によって調査地区内の宅地造成時の盛土が除去された。

４月９日にはプレハブに器材を搬入し、暗渠排水工事を開始した。４月19日からバックホーによる表土掘削を開始し、４月23日には作業員による本格的な発掘を始めた。

調査区は便宜的に、全体を４地区に分割（第８図）して調査を進めた。調査区中央の市道下のⅡ区、市道東側のⅠ区、市道西側のⅢ区、西側丘陵斜面のⅣ区である。Ⅰ区の南側は、市道切り回し道路の建設のために先行調査になり６月９日に国土交通省に引渡しを行った。その後Ⅰ・Ⅲ区の調査を平行して進めた。Ⅱ区については、市道の切り回し道路完成後に調査を実施するため、やや調査開始が遅れたが、関係諸機関の協力により８月中旬から発掘を開始できた。

９月初旬には最後まで残っていたⅢ区周辺の遺構処理もほぼ完了し、19日には県教委が調査終了の確認



第８図　調査地区割図

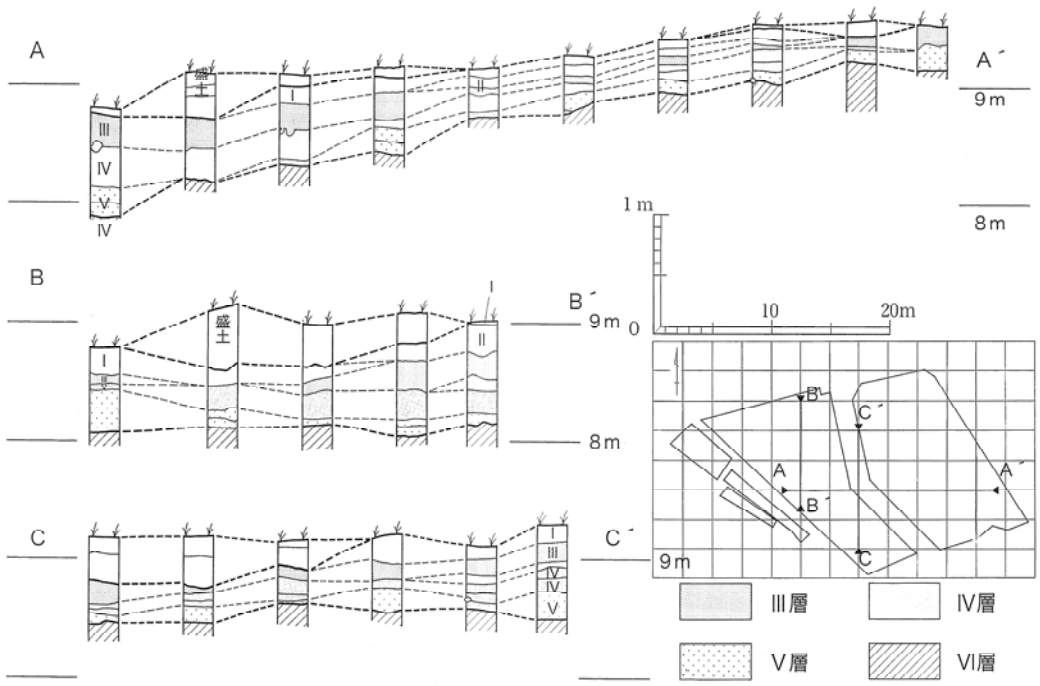
を行った。22日には空撮を実施した。翌23日には、地元を対象に現地説明会を行い約110名の参加があった。その後、残っていた礎石建物の記録や遺構実測を完了した。同時にプレハブ周辺の片付け、関係諸機関と地元関係者への挨拶を済ませ、９月27日には現場調査を終了した。

その後、12月に現地で周辺の寺院などの補足調査を行った。

3　層　　序

岩倉遺跡は15世紀から17世紀まで断続的に営まれた遺跡である。遺跡からは、古墳時代後期（６世紀）・古代（９～10世紀）・中世（13～16世紀）の遺物が同一の層位から出土した。地形的には、山裾部分にあたる西側に向かってなだらかに傾斜し、また上流部に当たる南側から北に向かったなだらかな傾斜となる。基本層序は、以下のとおりである。

Ⅰ層：旧表土　水田耕作土である。
Ⅱ層：灰黄褐色土　水田床土である。鉄分をやや多く含む。
Ⅲ層：灰黄褐色シルト（遺物包含層）　しまり、粘性ともに強く、炭化物を多く含む。
Ⅳ層：褐灰色シルト（遺物包含層）　やや砂を含む。しまり、粘性ともに強く、炭化物を多く含む。
Ⅴ層：灰色砂層（洪水堆積土）３層に分層される。Ⅴａ層：粘質土層、Ⅴｂ層：小礫層、Ⅴｃ層：砂層
Ⅵ層：青灰色シルト（地山）



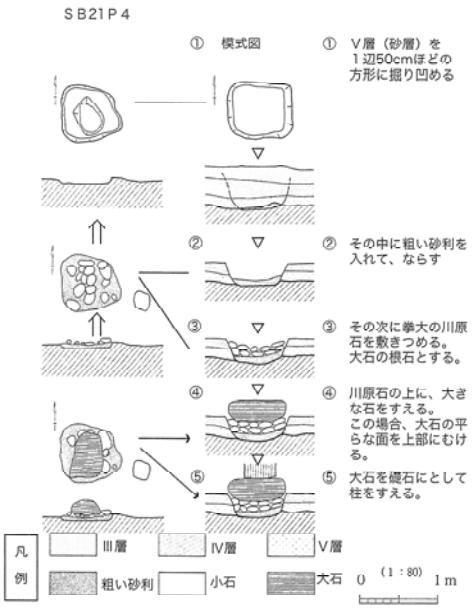
第９図　土層柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

検出された遺構は、中世から近世にかけての礎石建物・方形区画遺構が主なもので、他に溝・土坑・ピット等がある。

1　礎石建物跡（ＳＢ21）

調査区の一番南側、８・９－Ｊ・Ｋ区に位置する２×３間の総柱の建物である（図版３・21）。方形区画遺構と重複するが、方形区画遺構の埋土の上に建物が構築されていることから、建物の方が新しいことがわかる。ほぼ南北方向を示すが、やや西に傾く。南北桁行き約8.6m、東西梁間約７ｍとなる。面積は約60㎡（36畳）である。柱間間隔はＰ１－Ｐ２、Ｐ３－Ｐ４で約３ｍであるが、Ｐ２－Ｐ３では、約2.8mと狭い。東西の柱間は、Ｐ４－Ｐ５等で約４ｍであるが、Ｐ９－Ｐ10、Ｐ５－Ｐ6のみやや狭く約3.5mとなる。礎石が残存しているのは、Ｐ３・４のみで、他は存在しない。Ｐ３の礎石は、長さ75㎝、幅50㎝、厚さ30㎝の河原石で、加工は施されていない。建物の長軸方向に、石の軸も合わせている。礎石穴の掘形は方形で、１×1.5mと大きい。下には10～20㎝前後の川原石が根石として敷き詰められている。Ｐ４の礎石は長さ60㎝、幅40㎝、厚さ20㎝の川原石である。やはり長い方を建物の長軸に合わせている。掘形は70㎝の方形である。下部には根石が敷かれる。第10図模式図にあるように、根石の下には、粗い砂が敷かれている。他の柱穴には、根石が一部残存しているのみである。掘形はまちまちである。



第10図　礎石柱穴構築模式図

2　方形区画遺構

方形区画遺構は、調査区の西側山裾に沿って、２から３列整然と検出された（図版２・３・18～20）。調査区の中では、検出面が、最も深かった部分である。山裾の後背湿地に当たる部分で、現在の土地利用も水田や荒地になっている部分である。近くを流れる姥川が、この山裾を通っていたことも考えられる。

番　号	形　態	規　模（cm）			備　　考
		長　軸	短　軸	深　さ	
ＳＸ09	（方形）	973	(1003)	24	
ＳＸ19	（方形）	917	(858)	27	
ＳＸ22	不整形	804	874	21	
ＳＸ23	不整形	958	870	23	
ＳＸ24	（長方形）	(885)	(1042)	13	
ＳＸ25	（長方形）	1038	(772)	14	
ＳＸ26	長方形	740	1062	31	
ＳＸ28	（方形）	(868)	(913)	28	
ＳＸ29	（長方形）	713	(425)	18	
ＳＸ30	不整形	(752)	(1648)	32	鉄鏃（図版12　16）出土
ＳＸ31	（長方形）	(376)	(867)	38	鉄鍋（図版12　22）出土
ＳＸ71	不整形	1357	645	不明	

第２表　方形区画遺構一覧

今回検出された方形区画遺構は、当遺跡最下層であり、出土している遺物から15世紀代が考えられる。地形的には、地形にそって南東側から南西側に

なだらかに傾斜しており、方形区画も段々となっている。そのため、上流側の方が彫り込みが大きくなっている。また、東西方向でも東側が高く、西側が低くなっている。区画は傾斜方向に直交するように区画されている。規模はＳＸ23で9.6m×8.7mで、山側の列の方が、やや大きい区画となっている。深さは20～30cmと浅い。上流側は２列であるが、下流側ＳＸ29では３列、その下はＳＸ30で１列である。しかし、東西幅は同じで、規制があったことがうかがえる。

覆土はＶ層の灰色砂層（洪水堆積土）である。区画と区画との間には30cmほどの間隔があり、畦や道として機能していたと考えられる。ＳＸ09・ＳＸ19・ＳＸ17・ＳＸ28では、南側（上流側）掘り込み部に径５cmほどの自然木の杭が30cm間隔で打ち込まれている。上流側にのみ認められることから、土留めの機能を果たしたと理解される。ＳＸ17東側では、掘り込み部に沿って浅い穴が認められた。杭の痕跡であろうか。

3　溝

ＳＤ27（図版２・18）

ＳＸ26の北側に沿って走る溝でＳＸ17南東角に接続している。長さ約10m、幅２～2.5mで、東側で細くなって立ち上がる。断面浅い皿状で深さは約20cmである。覆土はＶｂ層。ＳＸ17に向かって緩く傾斜しており、ＳＸ17と何らかの関連のある溝かもしれない。

ＳＤ56（図版２・18）

ＳＤ27と交差する溝である。長さ7.7m、幅1.5mで北側で細くなって立ち上がる。方形区画と方向を同じくする。断面はＵ字状を呈し、深さは約20cm、覆土は褐色土である。性格不明。

ＳＤ34（図版１・22）

４Ｇ区で検出した溝。Ｖｂ層上面で確認された。幅20cm、長さは2.7mで、ほぼ東西に走る。断面Ｕ字状で、覆土は暗褐色土。図版14-21の砥石が出土している。

4　竹　管　遺　構

Ⅲ区の中央金山丘陵の際から北に向って、直線で検出された（図版５・22）。南側の延長方向には現在山際に横井戸があり、北側は梶屋敷の集落に向って延びている。遺構の掘り込みは盛り土除去後のⅡ層である。

直径10cmほどの孟宗竹を使用しており、節の内側は丁寧に削られている。地元の吉原義則氏（梶屋敷在住）の話では、以前は竹を水道管などに利用したとのことである。節は、ある程度節をくりぬいた竹の中に水を入れ、高いところで竹を垂直に持ち、大きく上下に振ると中の水の重さで残っていた節もきれいに抜けたという。ジョイント部分は杉の角材を四半分に裁断し、それを竹の径に合わせて、刳りぬき、そこに竹の管を差し込んでいる。ジョイント間の長さは約９ｍである。地面には竹の管よりやや広めに溝を掘り、ジョイント部分には、特に粘質土を入れ、水が竹管から漏れないように工夫している。

5　そ　の　他

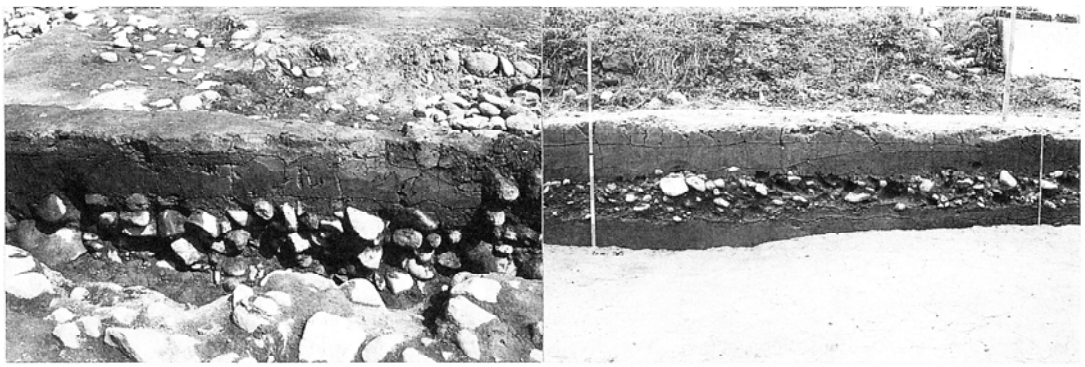
不整形の土坑（ＳＸ44・ＳＸ55・ＳＸ66）があるが、人為的なものかどうか判断がつかない。また、石の詰まったピットもいくつかあるが、礎石のピットの可能性もある。（図版23）

6　氾　濫　原

遺跡の中には、現河床で見られるような角の取れた砂礫（Ｖｂ層）が広く帯状に分布している（第11・12図）。礫は火山起源のものが多く、長径10～20㎝を中心に長径50～80㎝を含み、人頭大のものも多く含まれている。これは地理的環境でも前述したように、早川の洪水氾濫により南東から北西方向に流下し堆積したものと推察している。

砂礫層の多くは、Ⅳ層包含層直下のＶ層として堆積している。場所によっては包含層がなく、盛土やⅡ層の下に堆積しているところもある。特に調査区北・東側では包含層がなく、この砂礫層が厚く堆積し遺構は認められなかった。調査区西側にある方形区画遺構も、この砂礫層で埋め尽くされていた。砂礫層は場所によって、砂質分の多い区域と礫の多い区域がある。洪水の本流が流れた区域には粒径の大きな礫（Ｖｂ層）が、水をかぶった程度で滞水した区域には砂（Ｖｃ層）または泥（Ｖａ層）が堆積したのではないかと考えている。

第11図　Ｖｂ層（氾濫原）分布図



第12図　氾濫原の状況写真（左Ⅰ区北側、右Ⅲ区北側）

第Ⅴ章　遺　　物

出土遺物は、中近世陶磁器類を中心として、木製品・金属製品等が出土している。また、古墳時代、古代の土器も若干出土している。ほとんどが包含層からの出土である。

1　中・近世

A　陶磁器類

青　　磁（図版６　１～13）

碗（１～７）　１・２は外面に鎬ぎ連弁を持つ。１は連弁が断面三角形状を呈するが、２は深い沈線によっている。また内面にも文様が見られる。４は連弁が細かく、形骸化している。３は内面に文様が認められる。５～７は無文である。

皿（８・９）　９は波状口縁になると考えられる。内面に波状の文様がある。８は底部である。

盤（10～12）　10は大形である。内面には波状の文様がある。11・12はともに口縁部にくびれのあるものである。11では内外面に文様がある。

香炉（13）　蓋のつく香炉と考えられる。

白　　磁（図版６　14～16）

いずれも小型の皿であろう。

朝鮮雑釉（図版６　17～21）

いずれも小型の皿である。底部４㎝前後と小さく、中心が少し窪むのが特徴である。全面にやや白味がかった釉がかかる。荒いハケが目立つ。

青　　花（図版６　22～31）

碗（22・23・31）　22・23は端反りの口縁で、外面に唐草文、内面に雷文が配される。31は胎土、文様ともに異なり、福建省方面の産である。

皿（24～30）　いずれも薄手のつくりの細片である。28・29は見込みに十字花文。30は碁笥底で見込み、外面ともに文様がある。

染　　付（図版６　32～35）

波佐見系の碗、皿であろう。

珠洲焼（図版６　36～43、図版７　44～65、図版８　66～76）

壺（36～40）　36は短頸壺。37・38は大型である。39・40は叩目。

甕（41～46）　41～43が口縁部破片である。41・42は大型。43は薄手である。

底部（47～51）　47・48が壺、49～51が甕の可能性がある。

すり鉢（52～76）　口縁部端面が外方にくるもの（52）、ほぼ水平となるもの（55・56）、水平よりやや内面にくるもの（53・54）、断面が細長い三角形となるもの（57～62）、端部が丸くなるもの（63～68）がある。断面三角形となるものと、丸くなるものは口縁内面に波状文がつくが、68については波状文が認められない。

越　　前（図版８　77～80）

壺（77・78）　77は、一応越前としたが、不明。78は信楽にも類似する。

すり鉢（79・80）　79は外面に錆釉がかかり、越中瀬戸の可能性もある。

美　濃　瀬　戸（図版８　81～85）

皿　81は小型の皿である。内外面灰釉。82は口縁やや外反する。高台がつく。

瓶　84は花瓶口縁部である。灰釉

天目（85）　黒色の釉で底部欠損。

越　中　瀬　戸（図版８　86～103、図版９　104～106）

碗（86～90）　いずれも鉄釉がかかる。86・87は体部が直立に近い。88はやや開き。89は厚手で浅い。90は天目の底部であろうか。

皿（91～100）　91は灰釉、92は鉄釉である。93～95は浅い皿で93はひだ皿。96、97は体部直立する。98～100は見込み部に菊印のあるものである。上半不明。

水差し（101）　小型の水差しであろうか。内外面鉄釉。注ぎ口部は短い。

壺（102・103）　102は錆釉。103鉄釉である。

匣鉢（104）　口縁やや内傾する。

底部（105・106）　器種は明確でない。

肥　前　系（図版９　107～121）

鉢（107・108）　肥前としたが、明確でない。いずれも、折り返し口縁。107は鉄釉、108は灰白色の釉である。

火入れ（111・112）　いずれも口縁が直に内傾する。体部にやや膨らみ。鉄釉。

碗（113）　口縁部直に立ち上がる。灰釉。

皿（114～120）　114・115は口縁が大きく開く。116～120は、口縁緩やかに立ち上がる。120は見込み胎土目。

瓶（121）　上半部の破片である。内面に絞りの跡がある。

産地等不明（図版９　109・122～127）

109は口縁外反しする。体部にやや膨らみ。近代以降の可能性もある。122は珠洲焼に類似した胎土である。器種不明。123は皿である。肥前系とも考えられるが、被熱のため不明。124は薄手の皿で青磁のようでもある。125は赤い焼きで底部糸切。126は硬い焼きの底部。127は瓦質のすり鉢である。

土師質土器（図版９　128～141）

底部糸切のもの（128～134）と、手づくねのもの（135～141）とに分類される。

瓦　質　土　器（図版９　142～144）

142・143は大型の火鉢である。144は脚部である。

瓦質土製品（図版９　145）

人形もしくは把手の一部と考えられる。

Ｂ　木　製　品

木製品は調査区西側、方形区画遺構が連なる部分を中心に、包含層、遺構覆土から多く出土している。特に、後述する木簡・鳥形・人形・下駄等の遺物は６Ｉグリッド周辺に出土が集中している。その他の調

査区東部から北部にかけては、包含層内から散在するように出土している状況である。

種類では、挽物などの容器、食事具の箸、服飾具の下駄・櫛、遊戯具の独楽、祭祀具の人形・鳥形、墨書木簡、木簡様木札が出土しているが、その他製品の部材や用途不明の小品も非常に多く、多種多様な構成である。

近世以降の包含層から出土する木製品は、廃棄されたと思われる用途不明の小型木片が多く、挽物の椀等が多少含まれる程度である。その他の木製品のほとんどが中世の包含層、遺構から出土したものと見てよい。また、方形区画遺構のいくつかは周縁に杭列を伴っている。調査区南東部でも杭列が検出されているが、宅地造成以前の水田耕作に伴う比較的新しいものと考えられる。

木器・木製品の形態・技法については『木器集成図録　近畿古代編』・『木器集成図録　近畿原始編』[奈良国立文化財研究所 1985・1993]、『日本民具辞典』[日本民具学会 1997]を参考にしている。

(1/1)

第13図　木簡実測図及び写真（図版11　42）

木　　簡（第13図、図版11　42）　上部山形形状。下部欠損。墨書文字の記載はあるが、詳細は不明。

木簡状木札（図版11　40・41、43～46）　幅２～３㎝、厚さ0.4～0.7㎜の木札である。細部の加工はそれぞれ異っている部分があるが、44を除いて基本的に下部を三角形に削り出している。上部は欠損しているものが多く、遺存部に墨書の痕跡はない。

鳥　　形（図版11　35・36）　両端を細く加工した36と尾部の欠損した35の２点が出土した。

人　　形（図版11　33・34）　34は頭部のみ遺存しており、頸部抉りと頭部削り出しがやや粗野である。33は頭部の後背に残っている薄板が欠損している。胸部の加工状況から女性の可能性がある。

独　　楽（図版11　37・38）　２点の出土である。38は縦長のものである。鉄製の心棒が欠落し、中心の穴付近には鉄錆が付着している。37は扁平な形状の独楽であり、中心軸を含む約2/3が欠損している。上面には浅い溝が巡っている。

下　　駄（図版10　30～32）　30・31は連歯下駄であり、前緒穴が中央に位置するタイプである。30は前緒穴が斜めに穿孔されている。32は歯をつけていないものであり、一見すると「浜下駄」のようであ

るが確定はできない。また、長さが12.7cmと小さく、一般的に実際の使用に適する大きさではない。儀礼用のものか、履物ではなく全く別用途のものであった可能性がある。

横　　櫛（図版10　10）　1/2が欠損しているが、黒漆塗の良品である。浅葱色を使い、手書きで中央に家紋と、表裏の櫛歯上部に細い飾り線を入れている。

挽　　物（図版10　1～5）　1・5は椀である。3は内外面に赤漆を塗った皿で、一部口唇に下塗りの漆が露出している。1は削り出しの高台がついていたが、欠損している。5も同様に削り出し高台付のものであったが、体部と高台のほとんどは欠落し、椀底部のみ遺存している。椀外側は黒漆、内側は赤漆塗である。残っている高台の付根に、一部錐で穿孔された孔がある。4は高台付の合子である。器厚が他に比べて厚く、内外面赤漆塗、高台内側に下塗の黒漆が見える。2は、内面に段を有する。皿であろう。黒漆の上に朱（赤）が塗られている。

箸状木製品（図版10　7・9）　実測図に挙げたものは2点である。ともに赤漆塗りの箸である。他にも漆は塗られていないが、細長い棒状木片の角を簡易に削り取って箸としたものも多く出土している。

鉄　鏃　矢　柄（図版10　6）　全面黒漆が塗られている。柄の外側部分の漆がついた部分のみ、1.5mmほどの厚さで管状に残っていた。中心部は腐食して残っていない。図版12　16の鉄鏃が装着されてい出土した。(図版22)

箆状木製品（図版10　21）　先端部はやや幅が広く、厚さも薄くなり箆状になっている。持ち手部分は断面楕円形に成形されている。

木　　札（図版10　28･図版11　39）　39は方形状で、錐による穿孔が端部になされ、数条の直線からなる刻印がなされている。紐を孔に通して木札として用いたと考えられる。28は四角形の両端に抉りが入れられている。糸巻きに用いられたものと考えられるが、詳細は不明である。

板状木製品（図版10　11～14・17・19・22～27)

いずれも薄い板状のものであるが、他の製品の部材も含まれていると考えられ、また用途が推定できるものも少ない。25～27は穿孔されていない板で、他のものは1ヵ所または数ヵ所の穿孔が施されている。

26は膳の脚部の可能性がある。19は両端が破損し詳細は不明だが、木口に2ヵ所、木釘が打ち込まれていた。17は一端が三角形状に削られ、他端は凹状に抉りこまれている。中央に1ヵ所、孔が開けられているが、周縁部が磨り減っている。紐を通して用いられていたと考えられるが詳細は不明である。29は2つの孔が並んで開けられ、現在もある紐の長さの調整具と非常によく似ている。24は両端が細く削られ、中央付近に桜樹皮を用いた綴じと錐で開けられた孔が2ヵ所見られる。金具の留孔と考えられ、曲物側板の一部とも考えられる。14は楕円状の薄板で径6mmほどの孔が2ヵ所開けられている。

棒状木製品（図版10　8・15・16・18）　8は部材と考えられ、先端部が薄く削り出された楔状の角材である。黒漆が部分的に塗布され、先端部は欠損している。18も同様に先端部を薄く加工し、3ヵ所穿孔してある。15は丸めた端部に1ヵ所の穴があり、両端が欠損している。16は両端に偏り2ヵ所ずつ計4ヵ所に錐で孔が開けられている。一端は欠損している。

杭（図版11　47～60）　数箇所の方形区画遺構の周縁から、列状になって発見された打込み杭の一部を掲載している。48～61の平均の長さは49.6cm、最大径3.5cm、最小径2.6cmである。直径が約2～5cmほどの、杭に適当な枝を選び、先端を簡易な削りで、鋭利に加工している。杭に用いるため、まっすぐの部分を選んで用いてはいるが、中には彎曲したものを使用しているものもある。50･55･61など桜を使用したものは、樹皮が付着したまま残っている。桜のほかにも、比較的年輪のはっきりした杉や、その他の木材も

使われている。杭の上部は破損したり、腐食によって失われている。

C　金　属　製　品

鑿（図版12　1）　先端部は幅が広く、薄く尖らせて刃としている。断面は長方形で、茎は刃部より長く8.5cmある。

小刀（図版12　2・3・10・17・18・19）　2は刃部が途中で折れているが、ほぼ完存している。刃渡り12.0cm、茎5.7cmで目釘穴はない。18は刃部・茎ともに先端部を欠損してるが、断面が三角形で刃部・峰部ともに明瞭である。茎に直径2mmの目釘穴を有する。3・10・17・19は腐食や錆により詳細は不明であるが、形状から小刀に分類した。

鞘状金属製品（図版12　5）　小刀の鞘状で中が空洞になっている。用途不明。

銅板（図版12　6）　銅板であるが使途不明。

鉄鏃（図版12　7・16）　2つとも有茎の鉄鏃である。7の鏃身部の平面形は、鏃先が広く角の取れた四辺形である。断面は腐食や錆で判別しづらい。縦断面は三角形で、形状から鑿根式と考えられる。16は茎部が木製品の矢柄（図版10　6）に入った状態で出土し、ほぼ完存している。断面形は腐食や錆により判別しづらいが、先端部と茎部は方形で角根式を考えられる。

小札（図版12　23）　黒色漆が施された鉄製の小札で、残存状態はかなり良い。3～4mmの円形穴が2×4個穿たれている。

鉛玉（図版12　24・25・34・35）　35には直径1.5mm、深さ4mmの穴が開いている。

釘（図版12　8・11・12・14・15）　11・14・15は頭部を折り曲げ、皿部を有する角釘である。8・12は頭部が折損しているが、折り曲げた形状であろう。断面は8・11・12は方形、14、15は長方形である。

楔（図版12　4・9・13）　13は先端部に向かって細くなっているが、頭部に皿部が認められず分類上楔とした。

馬鍬の歯先（図版12　20）　頭部幅2.4cmで頭部から胴部にかけての約9cmは、断面が長方形で角がしっかりと残っている。それ以下刃先に向け次第に細くなり、断面は楕円形で角は摩耗により丸くなっている。

轡（図版12　21）　喰が一部欠損している他は、ほぼ完存している。鏡は杏葉形に作り二重に透かしを入れ、中央には座金を入れている。小鏡は小刻の座を入れ鋲で止めている。立聞壺は四角形で面取りされている。喰・引き手は太く作られ、断面形は喰が面取りした四角形、引き手は円形である。

鉄鍋（図版12　22）　底部に3本の足を有する内耳付きの鉄鍋である。ほぼ半分が欠損している。口縁部が有段で広がっている。湯口は欠損していて不明。

装飾金具（図版12　26・36・39）　26・39は銅製品であるが、品名は不明。36は12枚の花弁をもつ菊花状装飾金具で、中央に四角い穴が空いている。

煙管（図版12　27～33）　27・28・30・31は雁首である。27は刻煙草を詰める火皿部分のみの出土で、金箔が施されている。28は火皿が楕円形で、側面に直径1mmの穴が空いている。29・32は吸口で、33は捻じられている。

斧・鐎（図版12　37・38）　37は斧である。柄には唐草状模様が施されており、下端は折損している。38は二股の脚を有する鐎で、上端が耳掻き状に成形されている。

銭貨（図版13）　銭貨は一覧表のとおり30枚出土している。まとまって出土したものはなく、Ⅲ・Ⅳ層

からばらばらに出土している。初鋳年の古いものは開元通宝（841年　唐）から寛永通宝まである。圧倒的に多いのが北宋銭である。

鉄滓（図版14　23～31）　　十数点出土した。23から27は椀形滓である。29～31は流出滓であろう。28はふいご羽口片である。上部に光沢のある鉄滓が付着する。

D　土製品、石製品

土錘（図版14　1～16）　　1・3は長さ4cm前後、直径5cmとずんぐりした形。2・4～8・11～13は長さ5～6cm、直径4cm前後のものである。8・9はやや小さく長さ4cm前後、直径3cm前後となるものである。14は小さく、また15は6cmと長い。16は外面に釉がかかる。内径が大きく、厚味がなく、他とは区別される。

硯（図版14　18）　　長さ10.5cm、幅3.5、2.6cm、厚さ1.5cmであるが、表、裏面ともに、剝落が見られる。磨面部分は陸、海を含めて幅2cm、長さ約8cmである。石質は粘板岩である。

茶臼（図版14　19）　　破片である。筋目の間隔は約0.7cm前後である。砂岩岩。

砥石（図版14　20・21）　　20は、長さ5.7cm、幅2cm、厚さ1.5cmの角柱状で、3面が磨面として使われている。安山岩。全面に炭化物付着。21も3面が磨面として使われている。長さ7.5cm、中央で約2cm角である。部分的に筋跡が認められる。凝灰岩。SD34出土。

2　その他の時代

古　墳　時　代（図版9　146～148）

土器　　146は小型坩の口縁部と思われる。147は小型壺。148は平瓶と考えられる。

紡　錘　車（図版14　17）　　滑石製。円形、断面半円錐形。直径5.1cm、厚さ1.9cm、中央に直径約1cmの穴が穿たれる。左側にも同径の穴がある。粗い仕上げで、面取りが見られる。

古　　代（図版9　149～154）

須恵器　　149は甕胴部。

製塩土器（150～154）　　いずれもバケツ状平底の体部破片である。輪積痕が認められ赤化している。

硬　　玉（図版14　22）　　ひすい原石である。

第VI章　ま　と　め

1　遺構について

A　方形区画遺構

山裾最も深い部分で確認された遺構である。この遺跡としては、古い遺構である。整然と区画されており、水田跡の可能性がもっとも高い。覆土は砂質または砂礫で、水田としては若干の問題点もある。出土遺物の中に、鉄製の轡や馬鍬の歯先と考えられるもの、人形・鳥形などの祭祀具もあり、水田耕作に関連のある遺物と考えられる。このような山裾の谷筋を水田として利用することは、現在でも山間部では見られることであり、第５図の地籍図をみても、谷筋はほとんど水田となっている。区画内覆土は、砂質で水田耕作には適していないが、立地、区画規模、形態等から水田跡と考えるのが妥当であろう。

B　礎　石　建　物

礎石建物は、中世までは一般的な建物建築形態ではない。今回の建物も一般的な集落における建物形態とは考えにくい。検出された規模は２×３間と規模は小さい。このような規模で可能性として考えられるのは、神社・寺院であろう。付近には奴奈川神社・立壁神社・大雲寺・万徳寺がある。万徳寺は、言い伝えに当初堂のみの寺であったとされ、その後、現在地に移転したとされる。このことから、可能性としては、文献に記載のない寺院・神社・または奴奈川神社・立壁神社・万徳寺の前身等が考えられる。しかし、発掘調査資料からは、断定は困難であり、可能性の段階に留めておく。

2　遺物について

出土した遺物はほとんど包含層のⅢ・Ⅳ層が圧倒的に多く、遺構から出土したものは少ない。

土器類－青磁碗では鎬ぎ連弁の大きいもの（１・２）、内面に文様のあるもの（３）、連弁の小さいもの（４）等があり、上田編年 [上田1982] によれば、15から16世紀代の年代が与えられる。白磁もその年代であろうか。青花は、小野編年 [小野1982] によれば、23は染付碗Ｂ群にあたると考えられる。15世紀代である。皿は24から29が皿Ｂ1群、30がＣ群と思われる。年代はＢ1がやや古いものの、15世紀後半から16世紀前半である。31は福建省方面の産で、16世紀末から17世紀である。染付（32～35）は、波佐見で17世紀後半から18世紀であろう [中野2000]。珠洲焼は、すり鉢の口縁部形態から言えば14世紀から15世紀（Ⅳ期～Ⅵ期）である。

越中瀬戸は93のひだ皿の形態、95、96の皿口縁部の特徴から、宮田氏の分類 [宮田1997] でおよそ17世紀前半に位置付けられるのではないかと考えられる。

瀬戸美濃は、81、82の皿がその形状から、大窯のⅠ期 [藤沢1993] で15世紀後半から16世紀前半に位置付けられよう。85の天目も同期であろう。

肥前系陶器の120の皿には胎土目が見られ、Ⅰ期17世紀前半 [船井2000] にあたる。111、112の火入の口縁部形態は、Ⅲ期17世紀後半の特徴を備えている。

このように出土土器を見ると、15世紀後半～16世紀前半と17世紀前半の大きく２時期を設定することができる。検出遺構と対比すると、下層の方形区画遺構が遺物包含層の下部で確認されていることからこの方形区画遺構が15世紀後半～16世紀前半またはそれ以前、礎石建物跡が17世紀前半とすることができよう。

金属製品のうち、鍋は新潟県内でも出土例が少ない。内耳鍋は、吉川町寺町遺跡 [吉川町教委1995]、上越市子安遺跡 [笹沢1998] で出土している。寺町出土の鍋は形状が岩倉出土とほぼ同形であるが、時期は明確でない。子安では井戸から２個体まとまって出土している。Ⅳ期 (14世紀後半) の珠洲焼と共伴している。一つは内耳鍋であるが、脚がつかないものである。胴部と底部の間には稜が認められ、岩倉、寺町とやや形態を異にする。

武具も轡、小札、鉄鏃とそろって出土している。これらはいずれも、方形区画遺構の覆土及びその上層から出土している。轡の形態は、栃木県二荒山神社にあるものと同形 [日本中央競馬会1991] である。年代は、14世紀となっている。当遺跡には、中世の建物等が確認されていないことからすれば、上流部からの流れ込みと考えられる。

要　約

1　岩倉遺跡は、新潟県の西部、糸魚川市田伏403番地ほかに所在する。早川の左岸、海岸から約300m、標高約10mに所在する。

2　調査は、糸魚川東バイパスの建設に先立って、平成13年度に実施した。調査面積は4,700㎡である。

3　調査の結果、15世紀から17世紀の遺物が検出された。土器は、青磁・白磁・朝鮮雑釉・染付け・珠洲焼・土師質土器等である。金属製品では、轡等。木製品では、木簡・鳥形・人形・下駄等がある。

4　遺構としては、一辺10m前後の水田跡と考えられる方形区画遺構がある。下層で確認されていることから15世紀前後の遺構と考えられる。礎石建物は、２×３間で小さい。性格としては、寺院や神社跡の可能性がある。

引　用　文　献

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO. 2

小野正敏　1982　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO. 2

笹沢正史　1998　「子安遺跡」『北陸中世の金属器』北陸中世考古学研究会

鈴木郁夫　1982　「地形分類図」『新潟県上越地域　土地分類基本調査　糸魚川』新潟県

高橋　保ほか　1988　『北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅲ　立ノ内遺跡』新潟県教育委員会

中野雄二　2000　「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

新潟大学研究グループ　1976　「地の生いたち」『糸魚川市史１』

日本中央競馬会　1991　『日本馬具大観　第二巻古代下』日本馬具大観編集委員会

早津賢二　1985　『妙高火山群－その地質と活動史－』　第一法規出版

早津賢二　1994　『新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として－』　地学雑誌103（2），149-165

藤沢良祐　1993　「大窯期の瀬戸窯業」『瀬戸市史　陶磁史篇四』　愛知県瀬戸市

船井向洋　2000　「陶器の編年　３、火入・瓶」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

宮田進一　1997　「越中瀬戸」・「越中瀬戸の変遷と分布」『中世の北陸』桂書房

吉川町教育委員会　1995　『寺町遺跡第二次発掘調査報告書』

別表１　陶磁器類観察表

No	出土グリッドと層位	種別	器種	遺存部位	残存率(X/16)	法量（cm）			備考（手法等）
						口径	底径	器高	
1	11Ｈ17　Ⅳ	青磁	碗	体部				(3)	外面鏑ぎの連弁
2	６Ｉ３　Ⅳ	青磁	碗	体部				(3.3)	内外面深い鏑ぎ文様
3	７Ｊ11　Ⅳ	青磁	碗	体部					内面花文
4	７Ｊ２　Ⅳ	青磁	碗	口縁部	1	16		(4.2)	被熱、細い蓮弁
5	10Ｊ５	青磁	碗	口縁部	2	19		(2.6)	口縁部に細い沈線
6	10Ｉ23　Ⅳ	青磁	碗	口縁部	2	19.2		(3.25)	口縁部沈線、断面漆継ぎ
7	６Ｇ３　Ⅳ	青磁	碗	体部下半					
8	７Ｊ17　Ⅳ	青磁	皿	底部	16		4.7	(2.3)	被熱、底部タール痕、高台部にも釉
9	10Ｈ２　Ⅳ	青磁	皿	口縁部	2	12.2		(2.4)	内面波状文
10	９Ｉ１　Ⅲ	青磁	盤	底部			14	(2.7)	内面文様
11	８Ｈ15　Ⅳ	青磁	盤	口縁部					外面蓮弁、内面花文
12	９Ｉ４	青磁	盤	口縁部	2	20		(2.7)	被熱、無紋
13	10Ｈ12　Ⅳ	青磁	香炉？	口縁部	3	8.8		(2.3)	蓋がつく（受け口口縁）
14	７Ｊ20　Ⅳ	白磁	皿	口縁部	2	8.2		(2.4)	
15	９Ｉ１　Ⅳ	白磁	皿	口縁部	2	10.6		(1.6)	外面釉なし部に炭
16	７Ｉ９　Ⅳ	白磁	皿	底部			5.2	(1.2)	見込み部釉なし
17	８Ｊ17　Ⅳ	朝鮮雑釉	皿	半分	8	10	3.9	2.8	
18	７Ｉ24　Ⅳ	朝鮮雑釉	皿	口縁部	3	10		(2)	
19	８Ｈ24　Ⅳ	朝鮮雑釉	皿	底部			4	(3.8)	見込み胎止
20	６Ｈ４　Ⅳ	朝鮮雑釉	皿	体部			5	(2.4)	
21	８Ｇ24　Ⅳ	朝鮮雑釉	皿	底部				(2.7)	見込み胎止
22	９Ｊ22　Ⅳ	青花	碗	口縁部	1	12.8		(2.2)	端反口縁。外面唐草文、内面口縁部雷文
23	７Ｉ24　Ⅳ	青花	碗	口縁部	2	14		(4.4)	端反口縁。外面唐草文、内面口縁部雷文
24	７Ｉ４　Ⅳ	青花	皿	８分の１	2	12.4	7	4	外面及び見込み部文様。
25	10Ｊ８　Ⅳ	青花	皿	口縁部	2	13		(2.2)	端反口縁。外面唐草文
26	９Ｊ１　Ⅳ	青花	皿	口縁部	1	12.8		(1.6)	
27	７Ｋ５　Ⅳ	青花	皿	底部				(1.5)	外面渦状の蜜唐草。
28	７Ｊ15　Ⅳ	青花	皿	底部			6.8	1	外面牡丹唐草、見込み十字花文
29	９Ｈ11　Ⅳ	青花	皿	底部				(1)	見込み十字花文
30	８Ｋ１　Ⅳ	青花	皿	底部			3	(1.7)	底部断面漆継ぎ、碁笥底、外面芭蕉葉文
31	５Ｇ15、25　Ⅳ	青花	碗	口縁部	1	14.8		(3.9)	福建省、16c 末から 17c 前
32	10Ｊ25　Ⅳ	染付	碗	半分	5	9.6	4.8	4.9	外面及び底部に文様
33	10Ｊ４　Ⅳ	染付	皿	口縁部	1	14.2		(2.3)	内面二重斜格子
34	８Ｇ21　Ⅳ	染付	皿	口縁部	2	12.4		(2.1)	内面二重斜格子
35	６Ｉ３　Ⅳ	染付	皿	口縁部	3	12		(2.4)	見込み文様
36	７Ｉ２　Ⅳ	珠洲？	壺	口縁部	4	11.2		(2.9)	
37	10Ｈ１　Ⅳ	珠洲？	壺	口縁部	3	22		(3.4)	
38	７Ｉ２　Ⅳ	珠洲	壺	口縁部	3	15.8		(4.6)	
39	６Ｈ25　Ⅳ	珠洲	壺	体部					八の字状叩き
40	７Ｉ23　Ⅳ	珠洲	壺	体部					
41	８Ｈ21　Ⅳ	珠洲	甕	口縁部	1	24		(5.4)	
42	10Ｈ22　Ⅳ	珠洲	甕	口縁部				(6)	
43	11Ｇ７　Ⅳ	珠洲	甕	口縁部				(4)	
44	10Ｇ23　Ⅳ	珠洲	甕	体部					
45	８Ｇ18　Ⅳ	珠洲	甕	体部					
46	12Ｈ21　Ⅳ	珠洲	甕	体部					
47	８Ｇ19　Ⅳ	珠洲	壺	底部			11		
48	９Ｈ19　Ⅳ	珠洲	甕	底部			13.2	(2)	
49	９Ｉ18　Ⅳ	珠洲	甕	底部			16		
50	11Ｈ16　Ⅳ	珠洲	甕	底部			12.4	(4.5)	
51	11Ｊ５　Ⅳ	珠洲	甕	底部			7.2	(3.1)	
52	９Ｈ18　Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部	3	32.4		(6.4)	

No	出土グリッドと層位	種別	器種	遺存部位	残存率(X/16)	法量（cm）			備考（手法等）
						口径	底径	器高	
53	5G25 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部	1	32.8		(5)	
54	7J15 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部	1	17		(3.9)	
55	9G9 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部	1	20.2		(6.2)	
56	10H20 Ⅴ	珠洲	すり鉢	口縁部					片口
57	9H4 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
58	7J9 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
59	7I17 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
60	10J2 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
61	6G21 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
62	6I1 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
63	9G15 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
64	6G23 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
65	10I16 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
66	9G17 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
67	10H21 Ⅳ	珠洲	すり鉢	口縁部					口縁部内面波状文
68	11I14 Ⅲ	珠洲	すり鉢	口縁部					
69	6I3 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
70	8H5 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
71	9H17 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
72	9G11 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
73	5G24 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
74	10I8 Ⅳ	珠洲	すり鉢	体部					
75	10I12 Ⅳ	珠洲	すり鉢	底部					
76	7I17 Ⅲ	珠洲	すり鉢	底部			14	(5.1)	
77	11J6 Ⅲ	越前？	甕	口縁部	2	18.4		(5.5)	よくわからない。14から15？
78	10H20 Ⅳ	越前？	甕	体部					信楽？
79	8G14 Ⅳ	越前？	すり鉢	体部					外面錆釉？、越中瀬戸？
80	7J18 Ⅳ	越前？	すり鉢	体部					？
81	9G24 Ⅳ	瀬戸美濃	皿	完形	14	9.3	4.5	3.5	灰釉
82	8H20 Ⅳ	瀬戸美濃	皿	口縁部	2	13.2		(2.1)	灰釉、瀬戸？
83	6I20 Ⅳ	瀬戸美濃	皿？	口縁部	2	14.8		(2)	灰釉、瀬戸？
84	6G1 Ⅳ	瀬戸美濃	瓶	口縁部	6	11.8		(8)	灰釉、瀬戸？
85	6H24 Ⅳ	瀬戸美濃	天目碗	口縁部	1	9.8		(6.2)	黒色鉄釉、瀬戸？
86	9H12 Ⅳ	越中瀬戸	碗	口縁部	2	8.8		(4.1)	鉄釉
87	6I1 Ⅳ	越中瀬戸	碗	口縁部	2	11		(5.6)	鉄釉
88	10I8 Ⅳ	越中瀬戸	碗	口縁部	1	12		(4.9)	鉄釉
89	8H15 Ⅳ	越中瀬戸	碗	口縁部	1	13		(4.5)	鉄釉
90	6H10 Ⅳ	越中瀬戸	天目碗？	底部			4.4		内面鉄釉（茶、黒色まだら）
91	10I17 Ⅳ	越中瀬戸	皿	底部			5.5	2	灰釉、見込み釉なし
92	8J24 Ⅲ	越中瀬戸	皿	半分	5	10.2	4.4	2.7	錆釉？
93	10E7 Ⅳ	越中瀬戸	皿	4分の1	2	11.8	5.2	2.5	錆釉、波口縁、ひだ皿
94	5F	越中瀬戸	皿	底部			5.4	(2.2)	錆釉つけがけ
95	9J24 Ⅳ	越中瀬戸	皿	口縁部	2	13.4		(2.4)	錆釉
96	7I9 Ⅳ	越中瀬戸	皿	半分	1	10.6	5	3.2	灰釉、碁笥底、外面炭
97	8K1 Ⅲ	越中瀬戸	皿	半分	7	11	4.6	3.2	錆釉つけがけ
98	6I20 Ⅳ	越中瀬戸	皿	底部			5.5	(1)	見込み菊スタンプ、灰釉
99	9I1 Ⅲ	越中瀬戸	皿	底部			4.6	(1.2)	灰釉、見込み釉なし、菊印刻、すす被熱
100	10I23 Ⅳ	越中瀬戸	皿	底部			5.4	(1.2)	見込み菊スタンプ
101	9I2 Ⅳ	越中瀬戸	水差？	体部					ない外面鉄釉
102	8K14 Ⅲ	越中瀬戸	壺	口縁部	3	11.6		(4.3)	錆釉
103	6I23 Ⅳ	越中瀬戸	壺	口縁部	1	11.8		(7.6)	鉄釉まだら
104	5H20 Ⅲ	越中瀬戸	？	口縁部	2	10		(5)	錆釉
105	9G22 Ⅳ	越中瀬戸	壺	底部			12	(4.5)	回転糸切、錆釉

No	出土グリッドと層位	種別	器種	遺存部位	残存率 (X/16)	法量 (cm)			備考（手法等）
						口径	底径	器高	
106	5G24 Ⅳ	越中瀬戸	壺	底部			14		回転糸切、錆釉
107	4H10 Ⅳ	肥前系	鉢？	口縁部	2	25.6			上部鉄釉
108	5H24 Ⅳ	肥前系？	鉢？	口縁部	2	19.2		(3.2)	灰白色釉
109	9E25 Ⅳ	肥前系	甕	口縁部	3	9		(5.5)	内外面鉄釉
110	9E1 Ⅲ	肥前系	甕	口縁部	2	13.4		(3.2)	鉄釉
111	10I12 Ⅳ	肥前系	火入	体部				(4.7)	上部鉄釉
112	8K2 Ⅳ	肥前系	火入	体部				(28)	上部鉄釉
113	9I25 Ⅳ	肥前系	碗	口縁部	2	10.2		(3.4)	内外面灰釉
114	5G7 Ⅲ	肥前系	Ⅲ	口縁部	2	13		(2.1)	被熱、灰白色
115	5I14 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	口縁部	4	11.4		(1.3)	灰釉
116	10J24 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	底部			4.8	(2)	見込みドーナッツ釉剥ぎ
117	9I8 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	口縁部	2	11.8		(3.1)	灰釉
118	9I18 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	底部			4.6	(2.6)	灰釉
118	5G10 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	底部			4.4	(2)	被熱、灰釉
120	8H17 Ⅳ	肥前系	Ⅲ	底部			4	(2.1)	胎土目、灰釉
121	10H20 Ⅲ	肥前系	壺	頚部					内外面灰釉
122	8J16 Ⅳ	不明	？	口縁部	1	18.4		(2.4)	須恵器？
123	5G5 Ⅳ	不明	Ⅲ	口縁部	2	12		(3.2)	被熱、灰白色
124	10E7 Ⅳ	不明	碗	口縁部	1	10		(2.8)	内外面釉、青磁？
125	5H13 Ⅲ	不明	？	底部			5.6	(2.6)	赤褐色
126	6I6 Ⅳ	不明	Ⅲ	底部			4.2	(0.9)	
127	5H12 Ⅳ	不明	すり鉢	口縁部					軟質、瓦質すり鉢
128	9H7 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	底部					糸切、全面タール付着
129	6G12 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	1	12.8	8	2.7	糸切？、内外面タール
130	9I9 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	2	15		2.6	糸切、内外面タール
131	9J3 Ⅲ	土師質土器	Ⅲ	底部					糸切
132	8H4 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	半分			5.4	(1.6)	回転糸切、全面タール
133	9J25 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	底部			5	(1)	糸切
134	11H19 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	2	8.8	5.6	2.2	口縁部タール（灯明皿）
135	8K8 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	2	12.2	7	(2.1)	てづくね
136	6I118 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	3	12.2		(3.6)	てづくね
137	7J25 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	半分以上	12	10.2	4.1	2.1	てづくね、口縁部タール
138	8G7 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	半分	6	10		2	てづくね
139	6H11 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	2	11.6		1.8	てづくね、内外面タール
140	12J22 Ⅲ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	2	10.8		(2)	てづくね
141	4G8 Ⅳ	土師質土器	Ⅲ	口縁部	4	9.4		(1.8)	てづくね、口縁部タール
142	6H25 Ⅳ	瓦器	火鉢	口縁部		46.5			黒色
143	6I3 Ⅳ	瓦器	火鉢	口縁部					
144	6I9 Ⅳ	瓦器	火鉢	脚部					151と同一個体か
145	10K3 Ⅳ	人形？							
146	8H20 Ⅳ	土師器	小型坩	口縁部	2	10.8		(3.5)	古墳時代
147	11H21 Ⅳ	土師器	小型壺	口縁部	1	10		(4.1)	古墳時代
148	10I16 Ⅲ	須恵器	平瓶	口縁部	5	7.4		(5.3)	古墳時代
149	10I3 Ⅳ	須恵器	甕	体部					格子、同心円叩き
150	11H18 Ⅳ	製塩土器	平底バケツ	体部					
151	11I1 Ⅲ	製塩土器	平底バケツ	体部					
152	11H18 Ⅳ	製塩土器	平底バケツ	体部					
153	12H23 Ⅲ	製塩土器	平底バケツ	体部					
154	9H24 Ⅳ	製塩土器	平底バケツ	体部					

別表２　金属製品観察表

Ｎｏ	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	遺構	層位	器種	現存長 cm	現存幅 cm	現存厚 cm	重量 g	材質	備考
1	6I14		Ⅳ	鑿	14.0	4.9	0.9	106.3	鉄	刃 5.2 × 4.9
2	8K27		Ⅳ	小刀	17.7	2.4	0.3	19.0	鉄	刃渡り 12.0cm　茎 5.7cm
3	9J22		Ⅳ	小刀	8.9	2.3	0.4	16.6	鉄	
4	8J21		Ⅲ	楔	6.5	1.5	0.6	23.2	鉄	
5	6H14		Ⅱ	鞘	8.6	1.4	0.5	17.8	銅？	小刀の鞘状で中が空洞
6	10E21		Ⅳ	銅板	9.9	1.6	0.1	4.9	銅	
7	7J9		Ⅳ	鉄鏃	10.2	1.2	1.0	15.2	鉄	刃 3.0 × 1.2
8	6I8		Ⅳ	釘	5.5	0.5	0.4	1.5	鉄	
9	8J17		Ⅳ	楔	5.2	1.7	0.4	5.5	鉄	
10	11J16		Ⅳ	小刀	7.4	1.4	0.3	5.1	鉄	刃先が曲がっている　残存状況悪い
11	6I25		Ⅳ	釘	8.3	0.6	0.5	12.3	鉄	頭 1.6 × 0.85　角釘　少し曲がっている
12	4H10		Ⅴ	釘	6.5	0.9	0.5	4.0	鉄	頭なし　曲がっている　角釘
13	8J13		Ⅳ	楔	7.8	1.2	0.9	28.0	鉄	曲がっている
14	8K7		Ⅴb	釘	4.3	0.3	0.5	3.2	鉄	頭 1.2 × ？　曲がっている　角釘
15	7I18		Ⅳ	釘	5.2	1.0	0.4	6.8	鉄	頭は折り曲げ状で　0.7 × 1.0
16	5H	SX030	Ⅴb	鉄鏃	15.7	1.2	1.1	28.8	鉄	木製品の矢柄に入った状態で出土　刃 8.6 × 1.2
17	5H1		Ⅴ	小刀	8.1	1.7	0.4	12.0	鉄	真ん中が凹状に細くなっている
18	11J13		Ⅴb	小刀	18.5	1.9	0.4	35.8	鉄	刃渡り 11.0cm　柄に穴が一つあいている　茎 7.5cm
19	5H5		Ⅴb	小刀	6.3	1.7	0.6	7.2	鉄	
20	4G25		Ⅳ	馬鍬の歯	21.1	2.4	1.0	147.0	鉄	
21	4G18		Ⅴb	轡				441.0	鉄	
22	4G18	SX031	Ⅴb	鉄鍋	16.1	30.0	0.3		鉄	内耳付き　脚３ヶ
23	8K5		Ⅳ	小札	4.3	2.0	0.2	1.8	鉄	黒色漆　２×４個の円形穴
24	6I3		Ⅳ	鉛玉	1.3	1.4	1.3	11.9	鉛	
25	6J4		Ⅳ	鉛玉	1.2	1.3	1.2	10.2	鉛	
26	9I5		Ⅲ	装飾金具	4.9	2.8	0.0	2.7	銅	
27	8H15		Ⅱ	煙管	1.8			2.3	銅	雁首　径 1.5cm　　金箔
28	10H12		Ⅳ	煙管	7.2			4.2	銅	雁首　径 1.5cm　火皿が楕円形で側面に径 0.1cm の穴あり
29	5H17		Ⅳ	煙管	4.8			1.6	不明	吸口
30	10J24		Ⅳ	煙管	6.2			7.8	銅	雁首　径 1.6cm
31	6I1		Ⅳ	煙管	6.1			7.5	銅	雁首　径 1.7cm
32	10H22		Ⅲ	煙管	6.9			4.2	銅	吸口　広径 1.4cm　狭径 0.4cm
33	6H5		Ⅳ	煙管	5.7			3.2	銅	吸口　広径 1.2cm　狭径 0.5cm　ねじれている
34	8J1		Ⅲ	鉛玉	1.3	1.4	1.3	11.4	鉛	
35	8J14		Ⅲ	鉛玉	1.2	1.3	1.3	10.4	鉛	穴（径 0.15cm、深さ 0.4）があいている
36	5H10		Ⅰ	装飾金具	1.6	1.6	0.1	0.3	不明	花弁状
37	7I8		Ⅳ	笄	12.5	1.3	0.3	24.8	銅？	模様あり　先端破損
38	9D20		Ⅱ・Ⅲ	簪	16.7	1.2	0.2	12.5	銅	微妙に面取りしてある
39	9K1		Ⅳ	装飾金具	3.0	1.8	0.3	4.0	銅	

別表３　銭貨一覧表

No.	銭貨名	グリッド	層位	書体	初鋳年	重量	備考
1	開元通寶	10H13	Ⅳ層		841（唐）	2.11	背宣なし　上月
2	祥符元寶	7J17	Ⅳ層		1009（北宋）	3.69	
3	祥符通寶	7I24	Ⅳ層		1009（北宋）		
4	祥符通寶	9I13	Ⅳ層	篆書	1009（北宋）	2.22	
5	天聖通寶	10I18	Ⅳ層	篆書	1023（北宋）	3.04	
6	皇宗通寶	7J18	Ⅳ層	真書	1038（北宋）	3.15	
7	嘉祐通寶	11H21	Ⅳ層	篆書	1056（北宋）	2.99	
8	治平通寶	6I14	Ⅳ層	真書	1068（北宋）		
9	熙寧元寶	6G11	Ⅳ層	真書	1068（北宋）		
10	熙寧元寶	7I25	Ⅳ層	真書	1068（北宋）		

No.	銭貨名	グリッド	層位	書体	初鋳年	重量	備考
11	熙寧元寶	7I25	Ⅳ層	篆書	1068（北宋）	2.70	
12	熙寧元寶	10J4	Ⅳ層	篆書	1068（北宋）		
13	元豊通寶	7J21	Ⅳ層	篆書	1078（北宋）	2.87	
14	元豊通寶	8J10	Ⅳ層	行書	1078（北宋）	2.64	
15	元祐通寶	8G10	Ⅳ層	行書	1078（北宋）	2.59	
16	元祐通寶	7I21	Ⅳ層	行書	1086（北宋）	2.68	
17	元祐通寶	6I9	Ⅳ層	篆書	1086（北宋）	2.55	
18	紹聖元寶	6H1	Ⅳ層	篆書	1094（北宋）	2.60	
19	元符通寶	7J24	Ⅳ層	行書	1101（北宋）	3.68	
20	聖宋元寶	5G10	Ⅳ層	篆書	1101（北宋）		
21	慶元通寶	7I25	Ⅳ層		1205（南宋）	3.29	背六
22	洪武通寶	9I13	Ⅳ層		1368（明）		
23	洪武通寶	7J18	Ⅳ層		1368（明）	3.93	背一銭
24	永楽通寶	7J11	Ⅲ層		1408（明）	2.38	
25	永楽通寶	7J5	Ⅲ層		1408（明）	3.15	
26	寛永通寶	5I5	Ⅲ層				背文　文錢 古寛永
27	寛永通寶	6I1	Ⅲ層				背文＋波 古寛永
28	寛永通寶	9J22	Ⅲ層				新寛永
29	寛永通寶	5H15	Ⅲ層				背文　背元　新寛永
30	寛永通寶	5G25	Ⅲ層				新寛永

別表４　木製品観察表

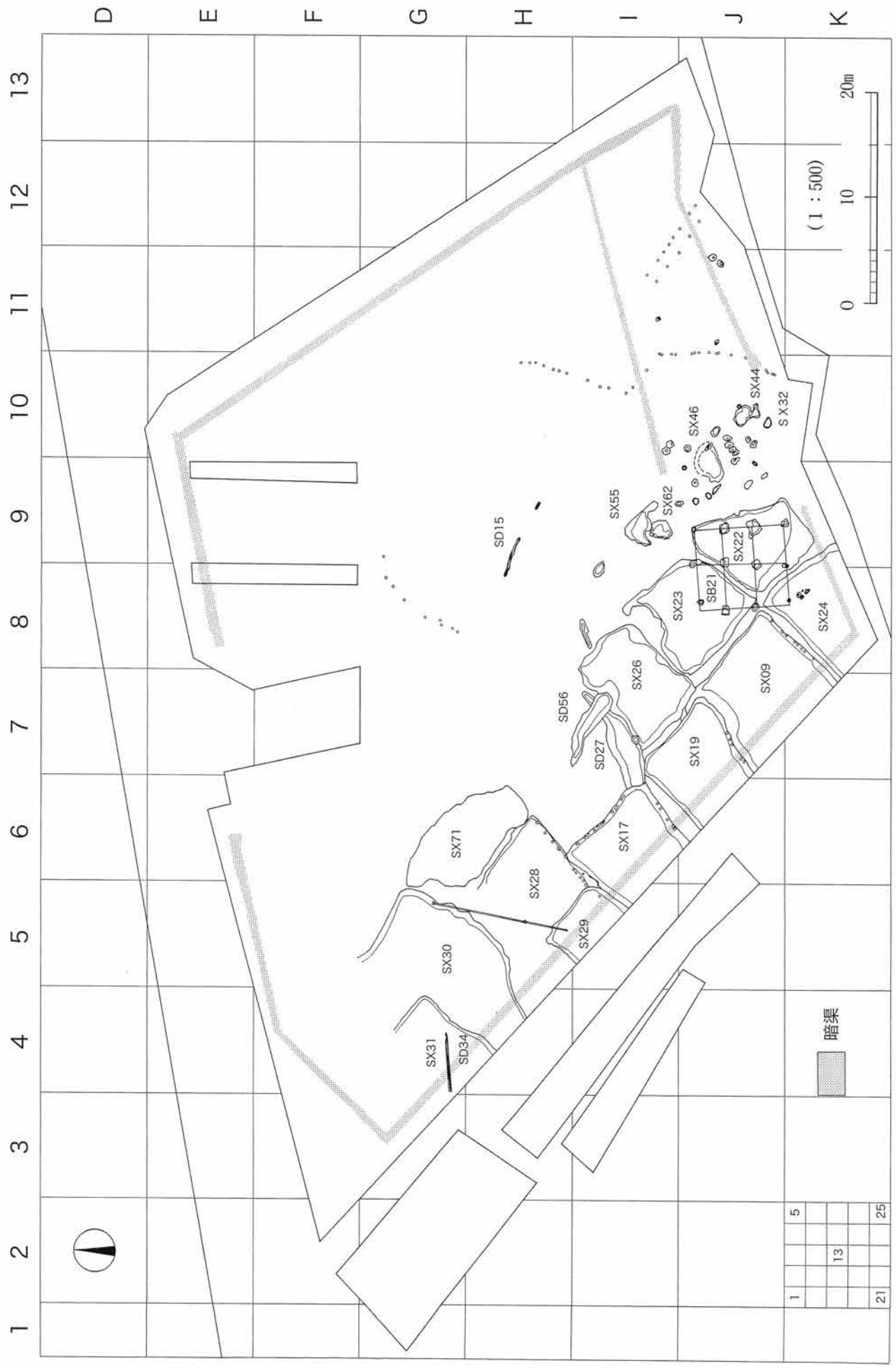
No	製品	グリッド	層位	法量（cm）				木取り	備考（成形等）
				長さ	幅	厚さ	直径		
1	挽物（椀）	8K5	Ⅲ層				(10.4)	横木	器高2.2cm、挽物、口縁部残存率2/16、削り出しの高台が欠損している
2	挽物（Ⅲ）	6I17						横木	底径6.8cm、現高1.5cm。内面段を有する。黒を下地に朱（赤）を塗る。底部黒。
3	挽物（Ⅲ）	9I1	Ⅲ層					横木	口径14cm、底径6cm、器高2.9cm、全面黒漆の上に赤漆の２層塗り
4	挽物（椀脚）	10H21	Ⅲ層					横木	内外面赤漆、削り出し高台、内側は黒漆。口径7.6cm、底径7.0cm、器高2.0cm。
5	挽物（椀）	6I18	Ⅳ層					横木	底径6.5cm、内側に赤漆、外側に黒漆。脚部に径約1.5mmの孔。削り出し高台
6	鉄鏃矢柄	5H(SX30)	Ⅴb層	8.1	1.2		1.2	不明	管状、表面は前面黒漆塗り、管壁の厚さは約1.5mm
7	箸状	8J21	Ⅲ層	6.7			0.5	縦木	塗箸、赤漆、竹漆
8	棒状	8H22	Ⅲ層	7.4	1.2	0.7		板目	側面黒漆、木口と片側面、先端削り出し部は接着に利用した漆が薄く塗られている。先端部は楔状。
9	箸状	3F	排土	7.1			0.4	縦木	塗箸、赤漆
10	横櫛	8J9	Ⅳ層	3.4	4.9	0.4		不明	全面に黒漆塗布、やや浅葱色の顔料で中央部に家紋（　　）を描き、表両面の櫛歯の付根に細い飾り線を入れている。推定長約8cm。歯部の長さ3.4cmほど。1/2欠損。
11	板状	6H25	Ⅳ層	4.8	1.6	0.5		板目	径約4mmの孔一ヶ所があけられ連続して溝が続く
12	板状	7I14	Ⅳ層	5.1	1.2	0.6		板目	径約4mmの孔一ヶ所が端部にあり
13	板状	7I16	Ⅳ層	7.1	2.1	0.7		板柾目	長方形板状の木版、端部付近に径約2mmの孔と抉り。両端は切断加工。
14	板状	7I2	Ⅳ層	15.4	4.4	1.0		板目	径6mmの孔が２ヶ所、長方形の角が取れた楕円状、
15	棒状	3F	排土	13.8	1.7	1.0		板目	径２mmの孔が先端を丸めた端部に１ヶ所穿孔、両端欠損
16	棒状	8I23	Ⅲ層	14.5	1.2	0.7		板目	棒状の板、両端に径１ミリほどの孔が２ヶ所ずつ計４ヶ所、錐で穿孔。一端は破損。
17	板状	5H18	Ⅳ層	10.9	3.1	0.9		板目	中央に径5mmほどの穿孔１ヶ所あり、先端部は三角形に削り出し。他端部は凹状に加工されている。杼（緯打具）？
18	棒状	5H23	不明	9.0	1.2	1.1		板目	角棒状、先端楔状に薄くなる。3mm径の孔３ヶ所。図面上部の端に一部削り。
19	板状	7I8	Ⅳ層	8.6	2.8	1.0		柾目	用途不明・側縁２箇所に留めくぎの木釘。径は約3mm。
20	板状	6I2	Ⅲ層	10.4	2.6	2.0			角柱で先端楔状に尖る
21	箆状	5H20	Ⅳ層	11.7	2.0	1.1		板目	持手部分は断面楕円状、端部は薄く削り込み箆状にし、両端は丸。
22	板状	7I22	Ⅳ層	10.5	3.5	0.6		柾目	長方形板状の木版、端部付近に径約5mmの孔。図面下部端破損
23	板状	4H18	Ⅲ層	10.5	3.7	0.7		板柾目	径４mmほどの孔が端部に３ヶ所、長方形、両端欠損？
24	板状	8K1	Ⅳ層	13.5	2.8	0.4		柾目	桜皮？綴、錐穴２ヶ所
25	板状	10J21	Ⅱ層	13.8	2.9	0.7		柾目	細い板状、全面黒漆塗、長縁片側は直線状でもう一方は破損して詳細不明。

No	製品	グリッド	層位	法量（cm）				木取り	備考（成形等）
				長さ	幅	厚さ	直径		
26	板状	7I7	IV層	7.5	5.1	1.0		板目	膳脚部？端部欠損、用途不明
27	板状	6H25	IV層	6.5	3.1	0.5		柾目	用途は不明
28	糸巻？	8K2	IV層	5.3	4.0	0.9		板目	両端に抉りが入り、糸巻き？
29	板状	10J5	III層	5.9	3.3	0.9		板目	8角形形状、径約5mmの孔が並んで二つ穿孔。
30	下駄	6I20	IV層	18.8	8.6	1.0		縦	大、歯部厚さ3.1cm、連歯下駄、一部を欠損、板の前後裏側を薄くしている。楕円に近い隅丸長方形。
31	下駄	7I6	IV層	16.6	6.6	1.4		縦木	中、歯部厚さ2.6cm、足跡痕あり。前緒穴は表面から斜め前に向かって穿孔、横緒穴はまっすぐに開けられている。連歯下駄。楕円に近い隅丸長方形。
32	下駄？	9J3	III層	12.7	6.5	0.9		柾目	小、歯がない、前緒穴は中央、横緒穴の外側縁部に結束した跡であろう紐の圧痕がある。隅丸長方形。
33	人形	6I25	IV層	16.0	2.4	0.9		板目	全身、女性？、頭部後背部欠損
34	人形	6I6	IV層	5.8	2.6	0.9		板目	頭部のみ、頸部の抉りと頭部がやや粗野に削りだし
35	鳥形	7I8	IV層	5.1	6.3	1.0		板目	尾部欠損
36	鳥形	8J6	IV層	8.0	1.8	0.5		板目	両端細く加工
37	独楽	4H5	III・IV層			2.1	(5.0)	縦木	扁平な形状の独楽。上面に幅2mm、深さ1mmの溝が周る。約2／3が欠損
38	独楽	7H7	表土			6.7	(4.1)	縦木	縦長。削りだしによって比較的粗く成形。上面縁部面取り。中心に鉄製心棒の入っていた穴があり、鉄錆が付着。
39	木札	9J2	I層	4.5	3.7	1.0		柾目	刻印・錐であけた径約0.5mmの孔1ヶ所
40	木簡？	10I6	III層	7.3	2.5	0.4		柾目	上部欠損、下部は三角形状に削り、先端は平坦
41	木簡？	8J17	IV層	12.2	2.1	0.4		板目	下部先端は三角形
42	木簡	6I13	IV層	14.6	1.9	0.4		柾目	墨書木簡、上部山型、下部欠損
43	木簡？	11J4	III層	13.3	2.7	0.4		板目	先端部の幅を細く削り出し、先端一部欠損
44	木簡？	6I23	IV層	11.1	2.6	0.5		板目	下部の切断縁に斜めの削りと段差あり
45	木簡？	9I1	III層	9.1	2.2	0.4		柾目	上部欠損、下部は幅が狭くなるが先端は丸まっている、墨書無し
46	木簡？	7I16	IV層	8.5	1.9	0.7		柾目	上部欠損、下部三角形に削り

図　　版

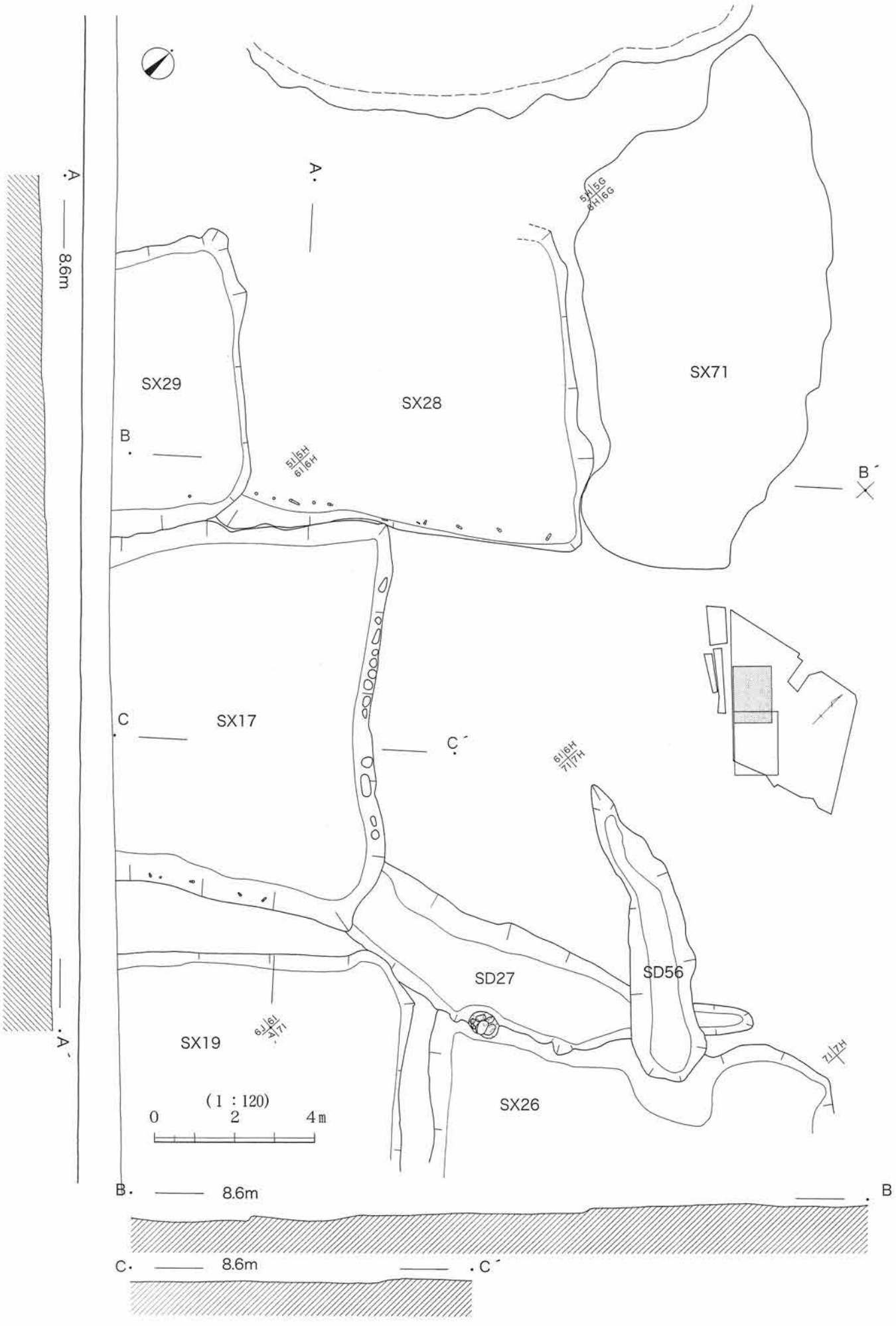
遺構全体図

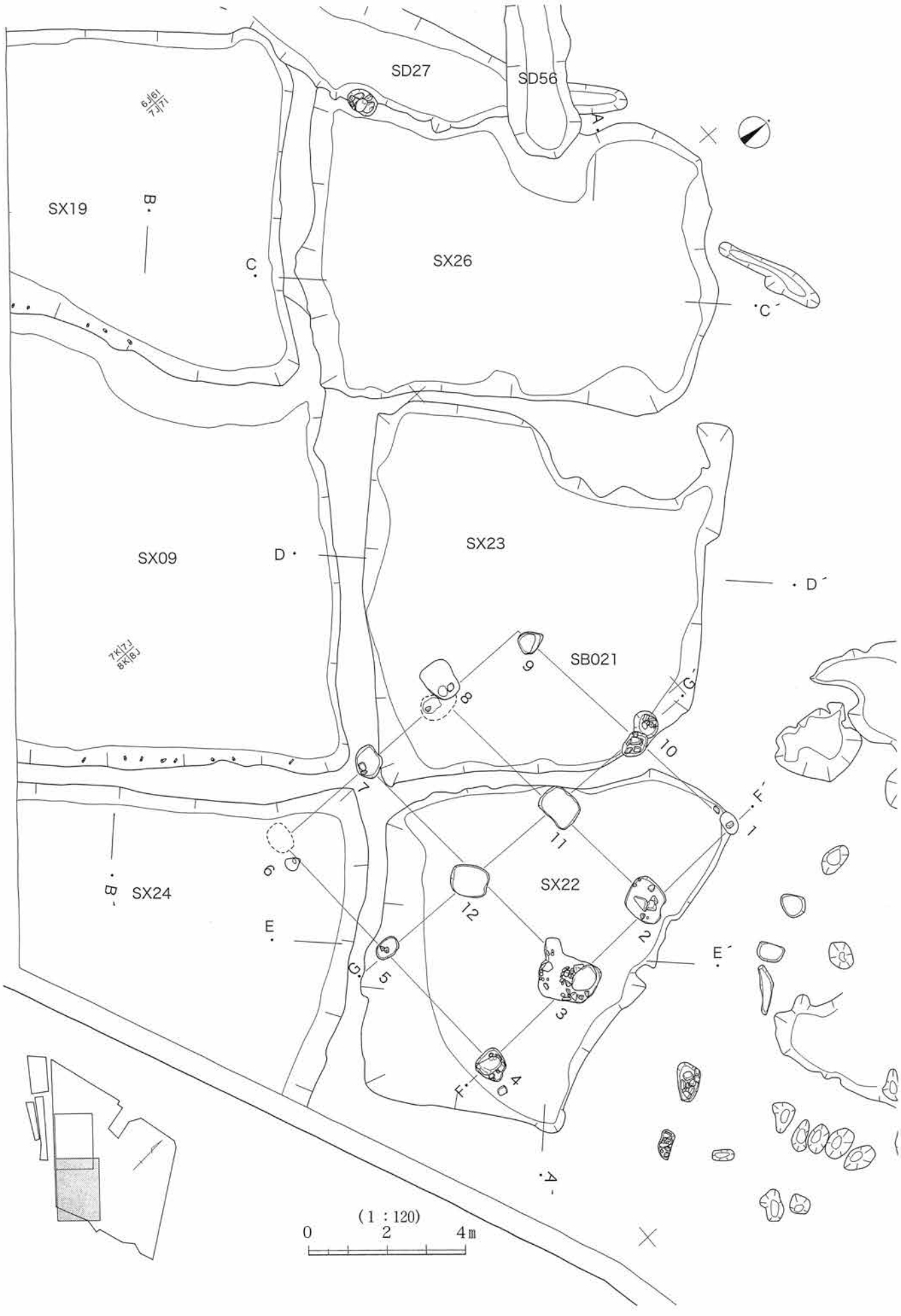
図 版 1

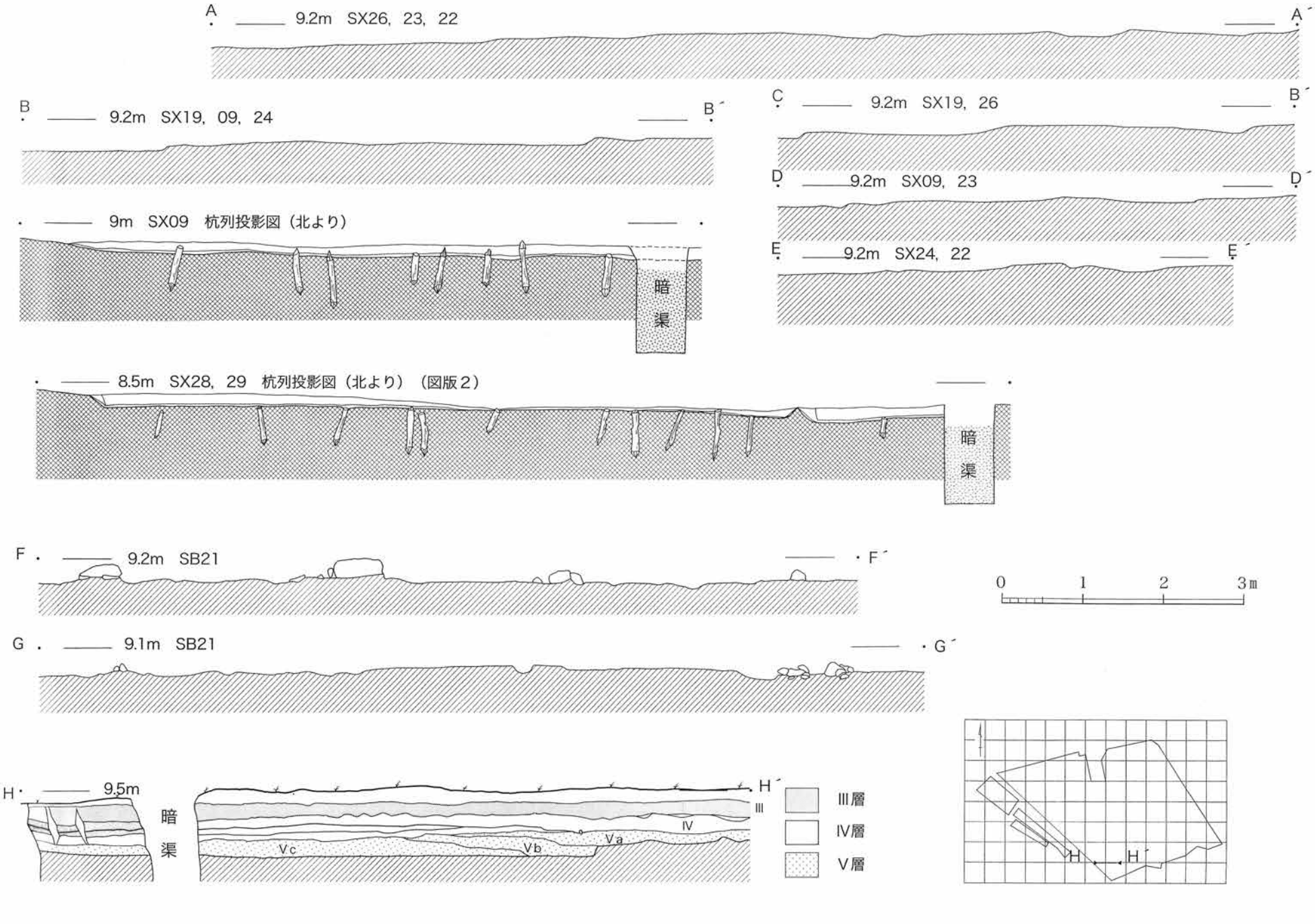


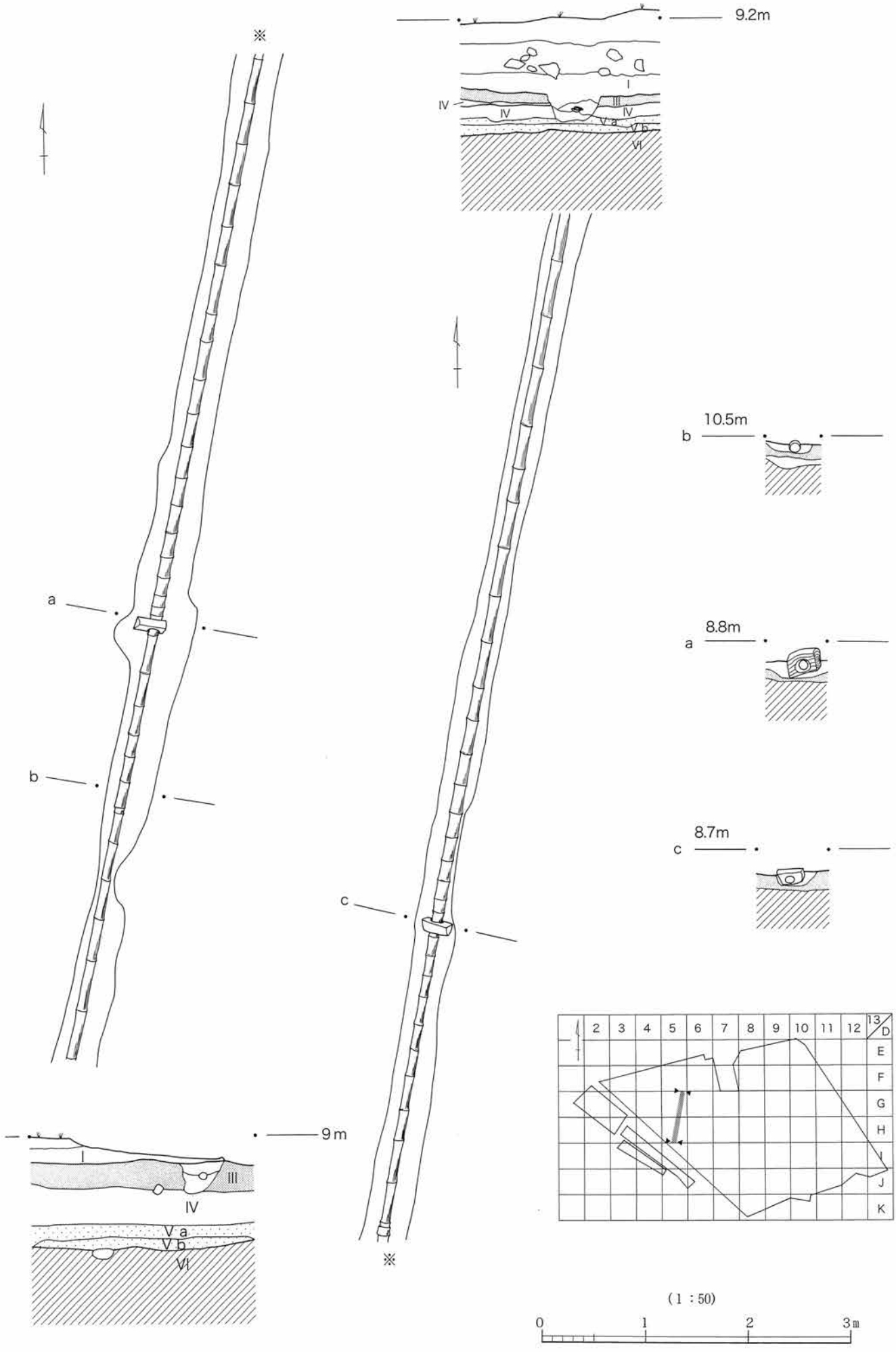
D
E
F
G
H
I
J
K
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
(1：500)
0
10
20m
SX44
SX32
SX46
SX55
SX62
SD15
SX22
SB21
SX23
SX24
SX26
SX09
SD56
SD27
SX19
SX17
SX71
SX28
SX29
SX30
SX31
SD34
暗渠
1
5
13
21
25

遺構分割図 (1)

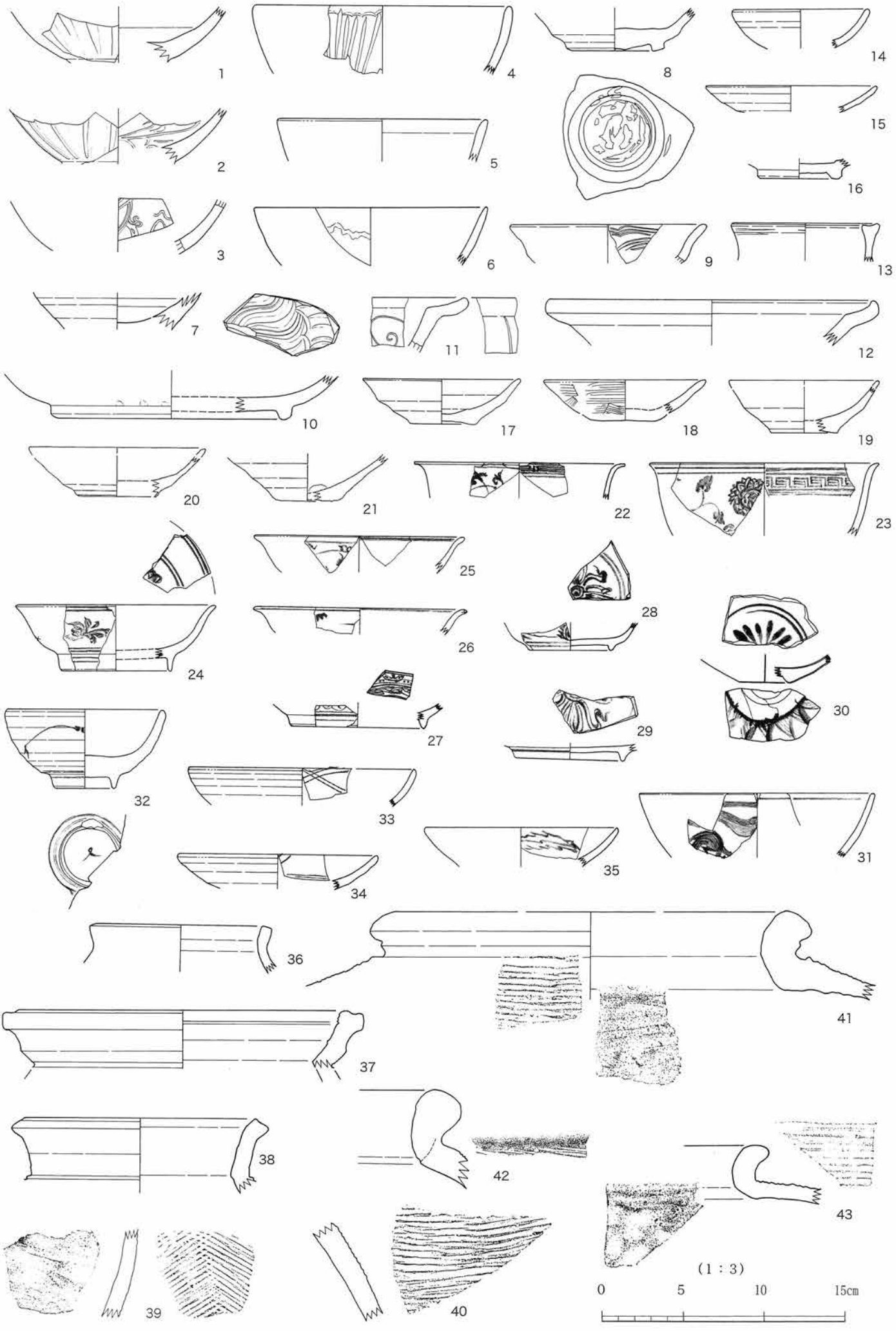

A
8.6m
A´
SX29
SX28
SX71
B
B´
SX17
C
C´
SD27
SD56
SX19
SX26
(1 : 120)
0 2 4m
B
8.6m
B´
C
8.6m
C´

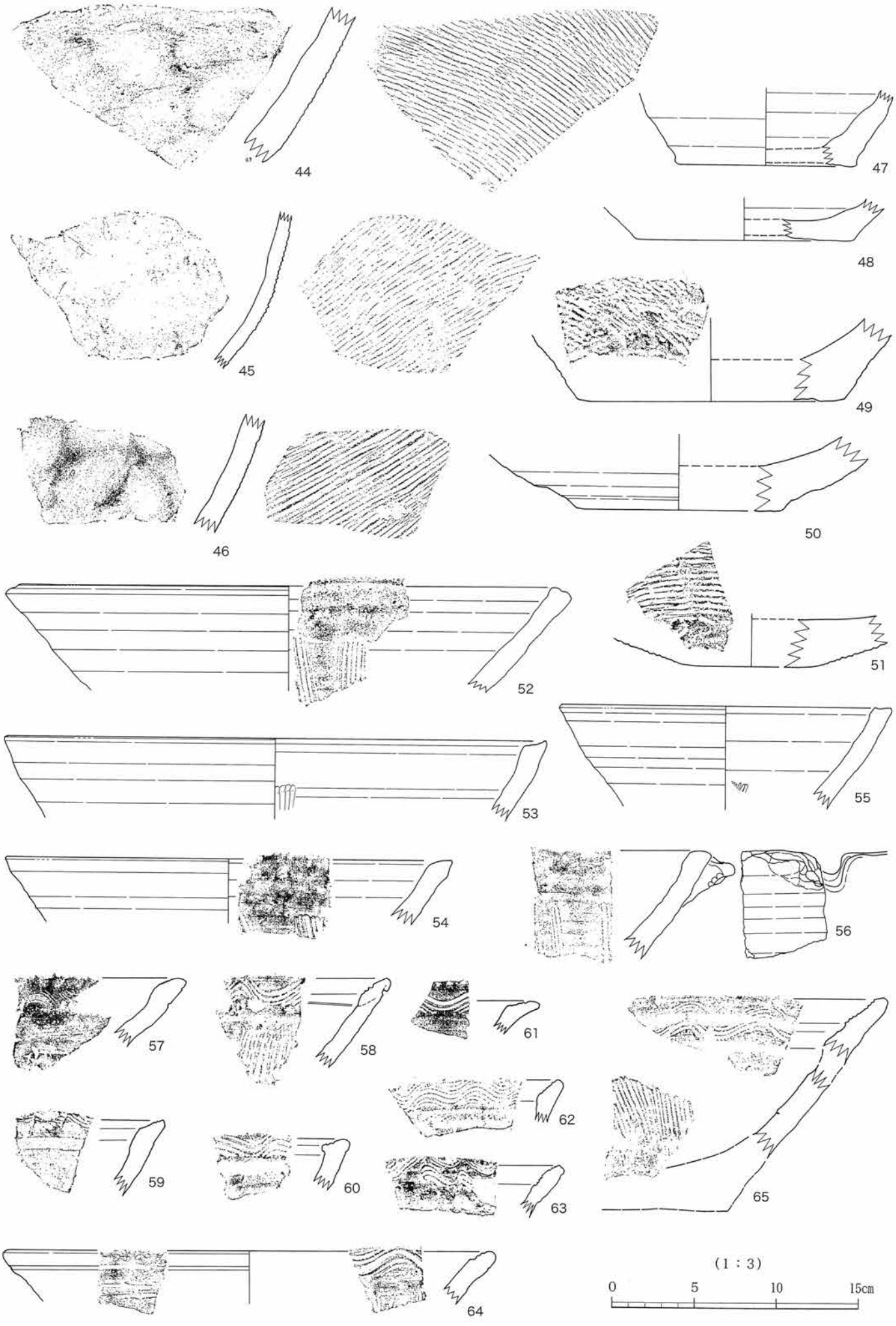

SD27
SD56
SX19
SX26
SX09
SX23
SX24
SX22
SB021
A
A´
B
B´
C
C´
D
D´
E
E´
F
F´
G
G´
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
(1 : 120)
0
2
4m

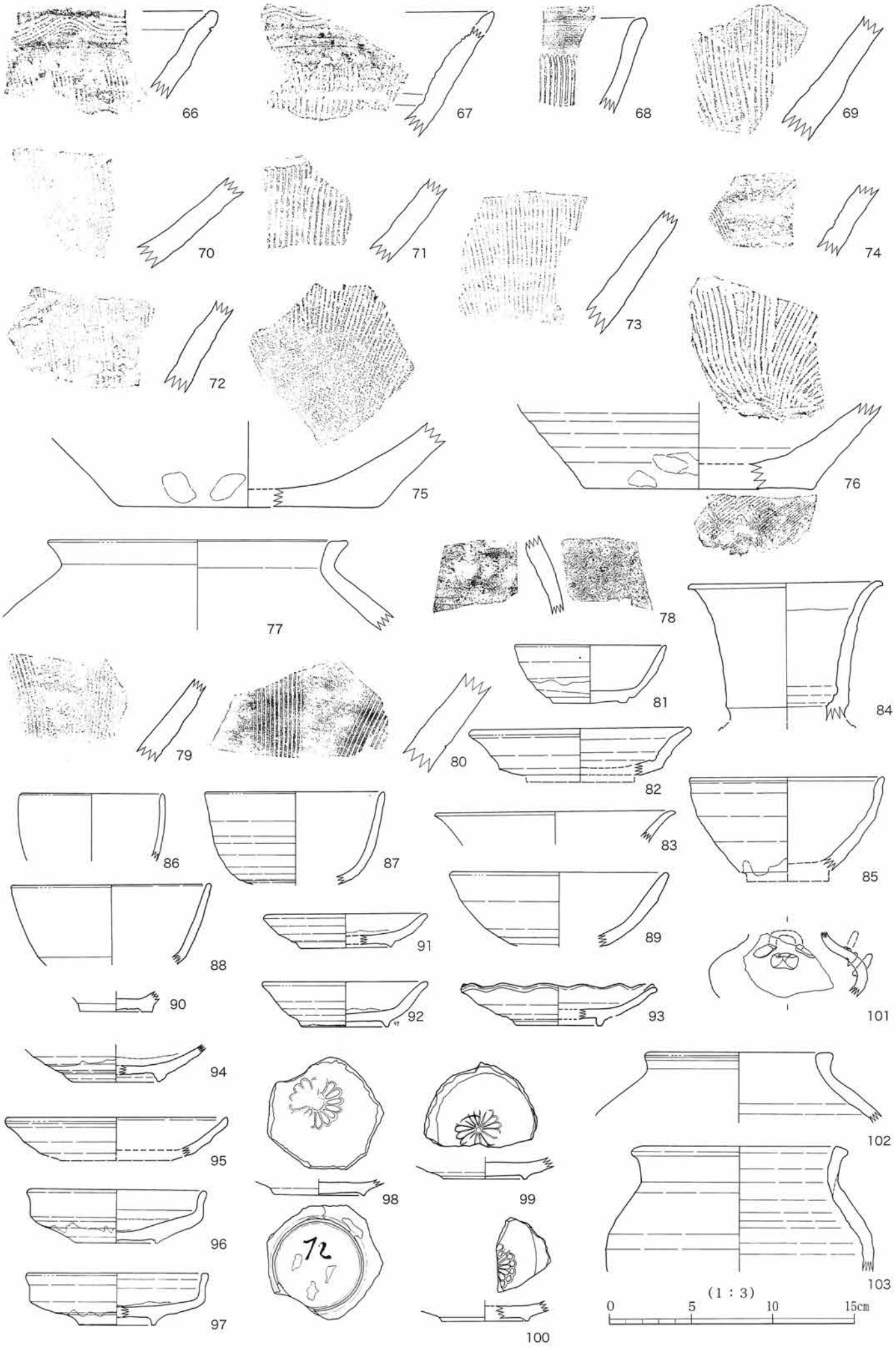

A
9.2m SX26, 23, 22
A´
B
9.2m SX19, 09, 24
B´
C
9.2m SX19, 26
B´
D
9.2m SX09, 23
D´
E
9.2m SX24, 22
E´
9m SX09 杭列投影図（北より）
暗渠
8.5m SX28, 29 杭列投影図（北より）（図版2）
暗渠
F
9.2m SB21
F´
0 1 2 3m
G
9.1m SB21
G´
H
9.5m
暗渠
H´
III
IV
Va
Vb
Vc
III層
IV層
V層
H
H´

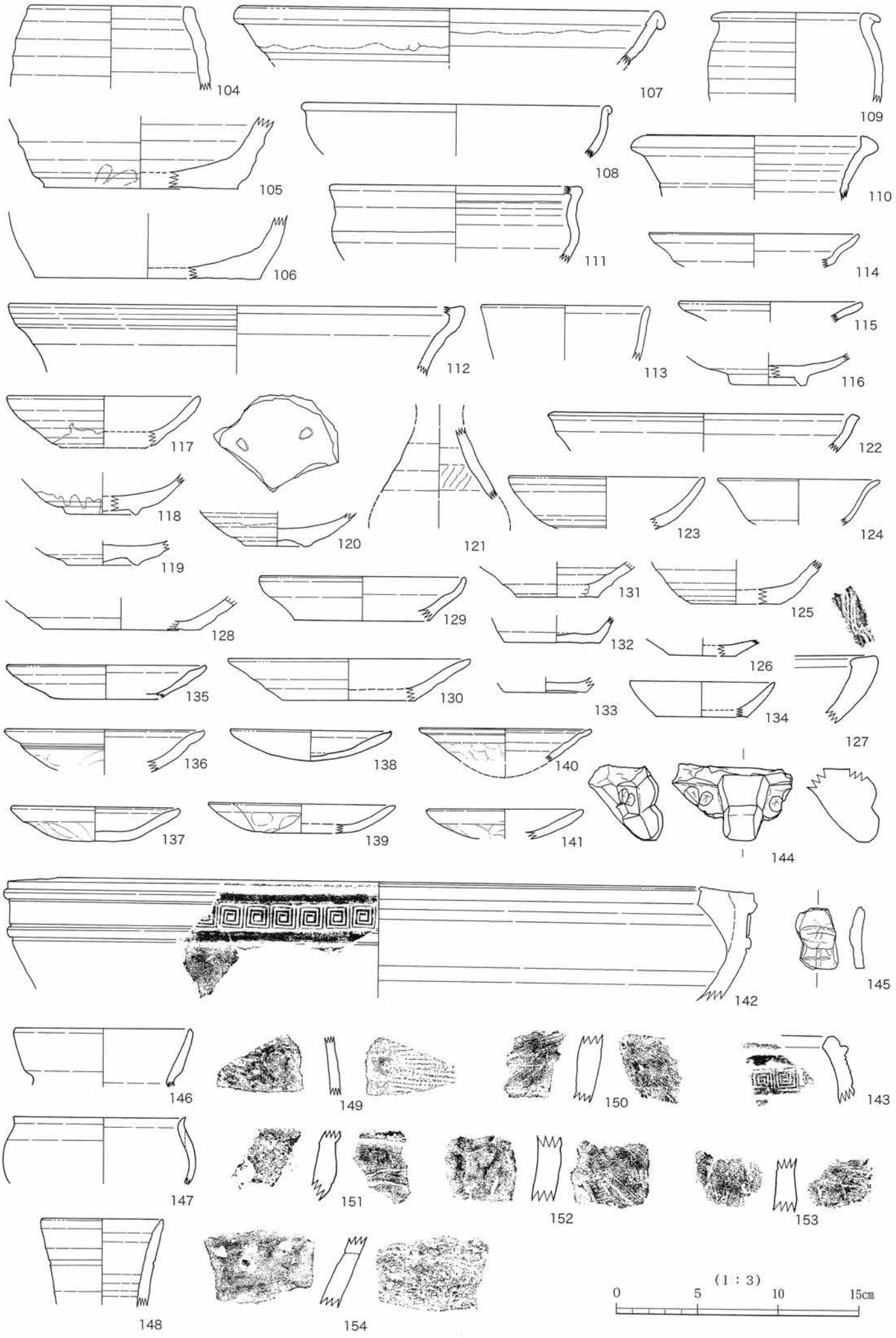

※
a
b
c
9.2m
I
III
IV
V a
V b
VI
10.5m
8.8m
8.7m
9m
2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13
D E F G H I J K
(1 : 50)
0 1 2 3m

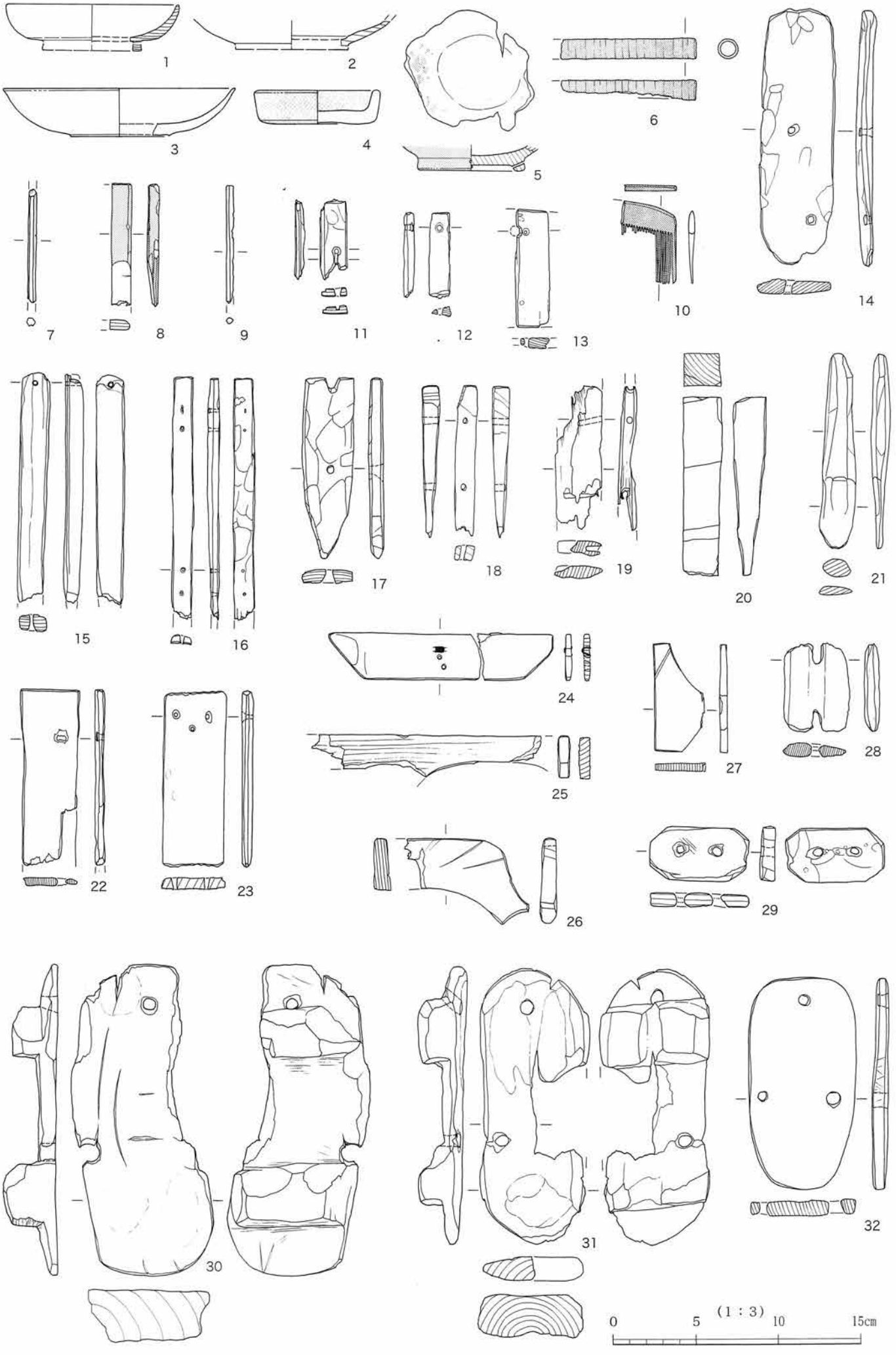
遺物実測図 (1) 陶磁器

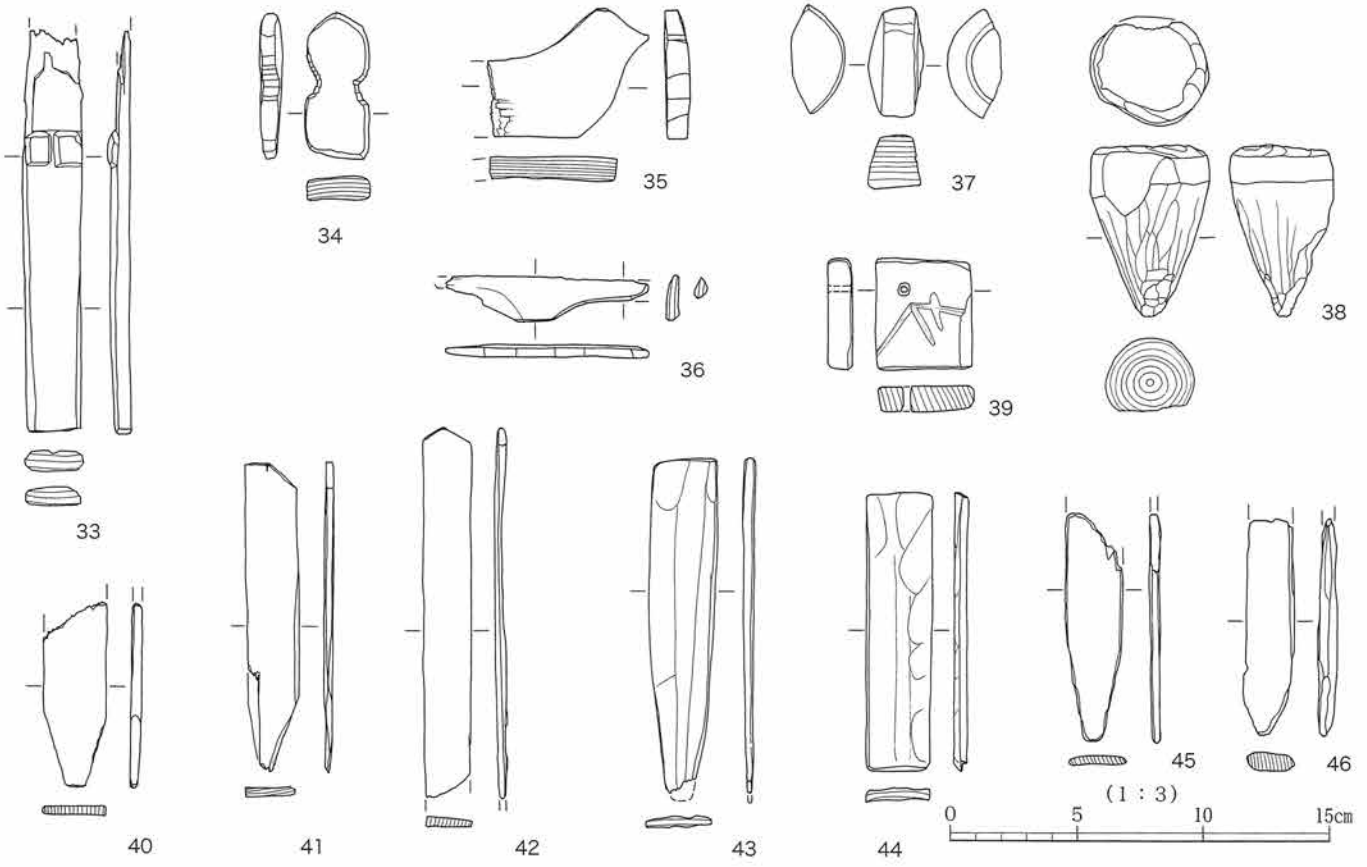

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
(1 : 3)
0
5
10
15cm

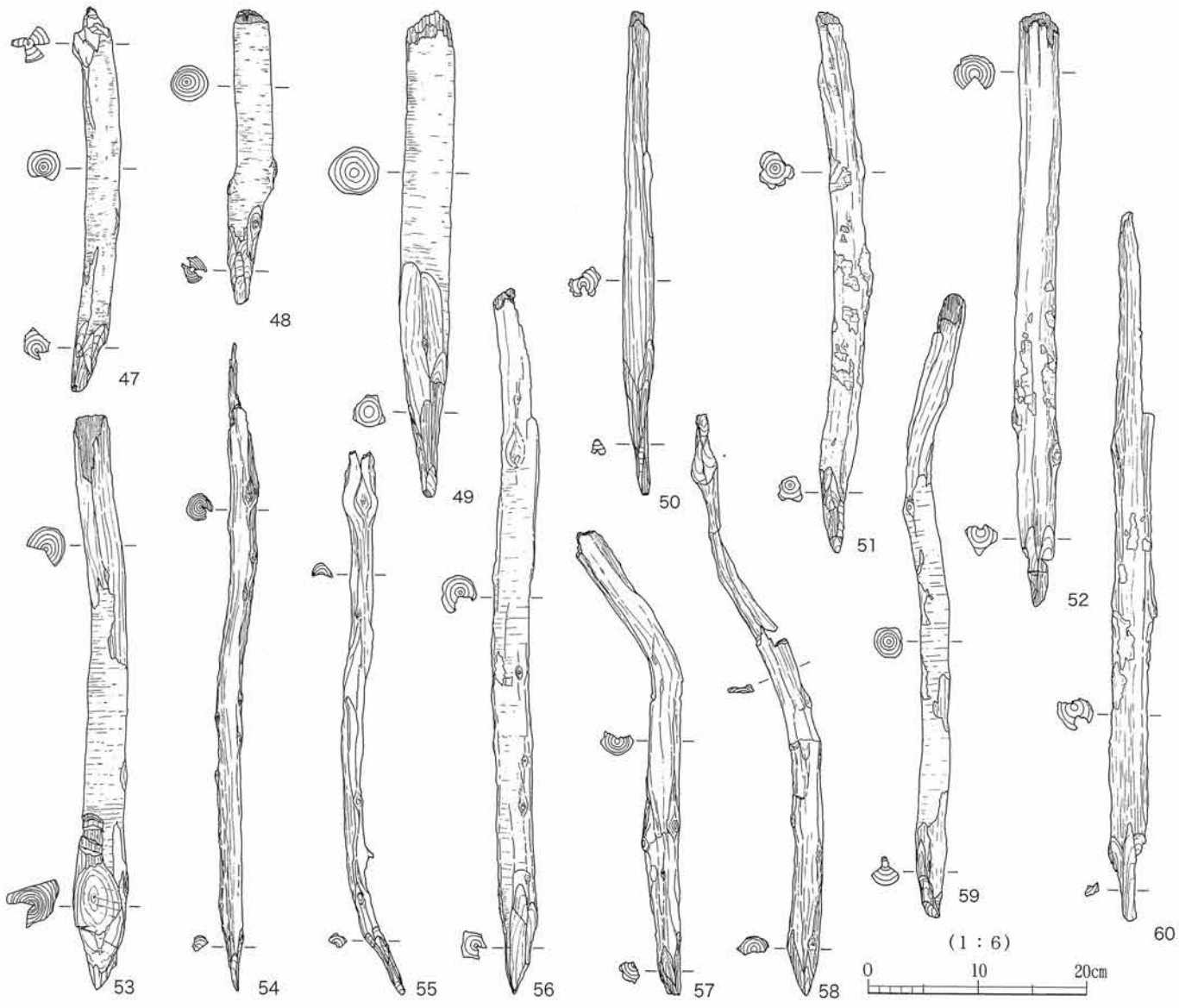

44
47
48
45
49
46
50
52
51
53
55
54
56
57
58
61
62
59
60
63
65
64
(1 : 3)
0
5
10
15cm

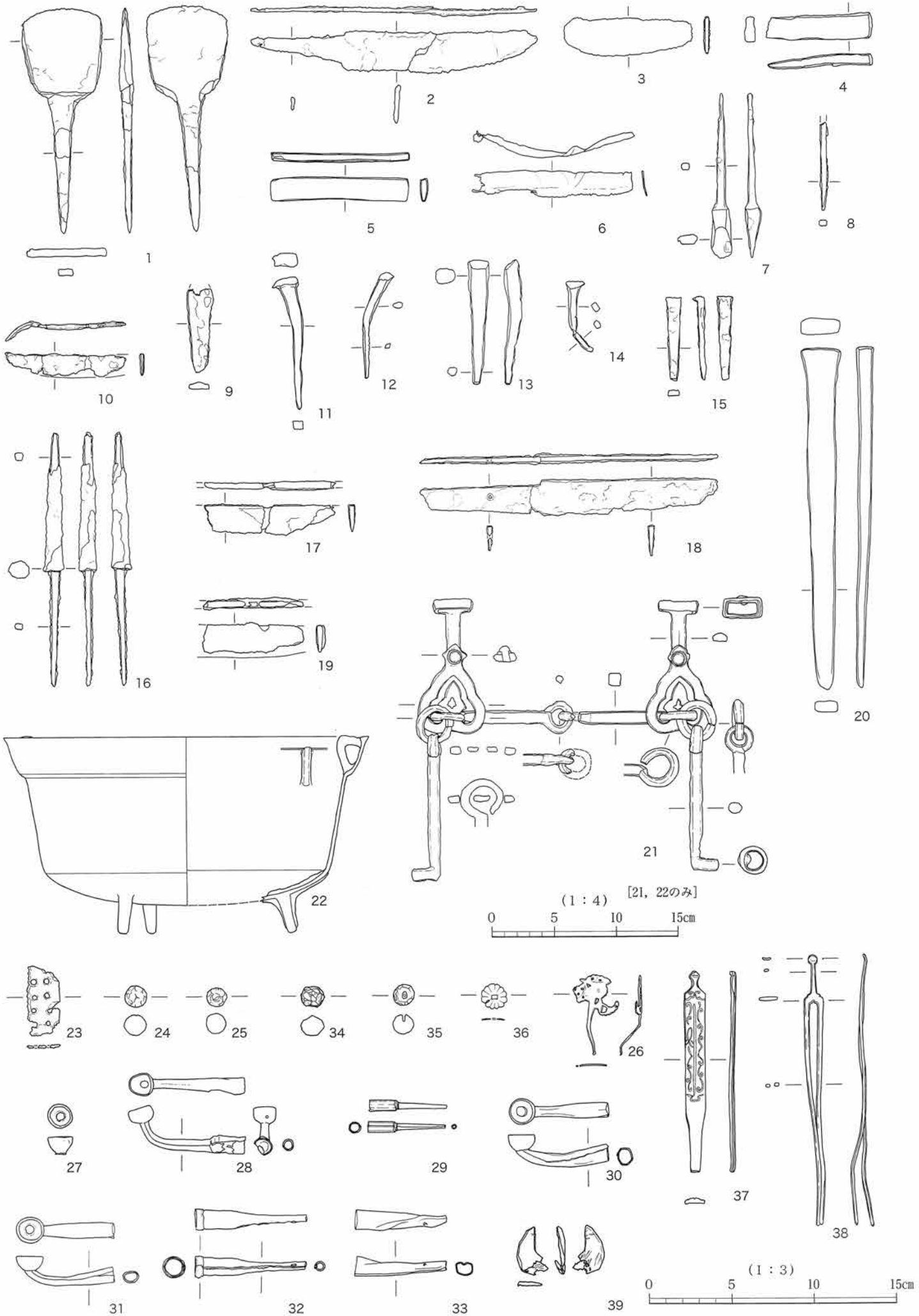

66
67
68
69
70
71
73
74
72
75
76
77
78
79
80
81
84
82
86
87
83
85
88
91
89
90
92
93
101
94
95
96
97
98
99
100
102
103
(1 : 3)
0
5
10
15cm

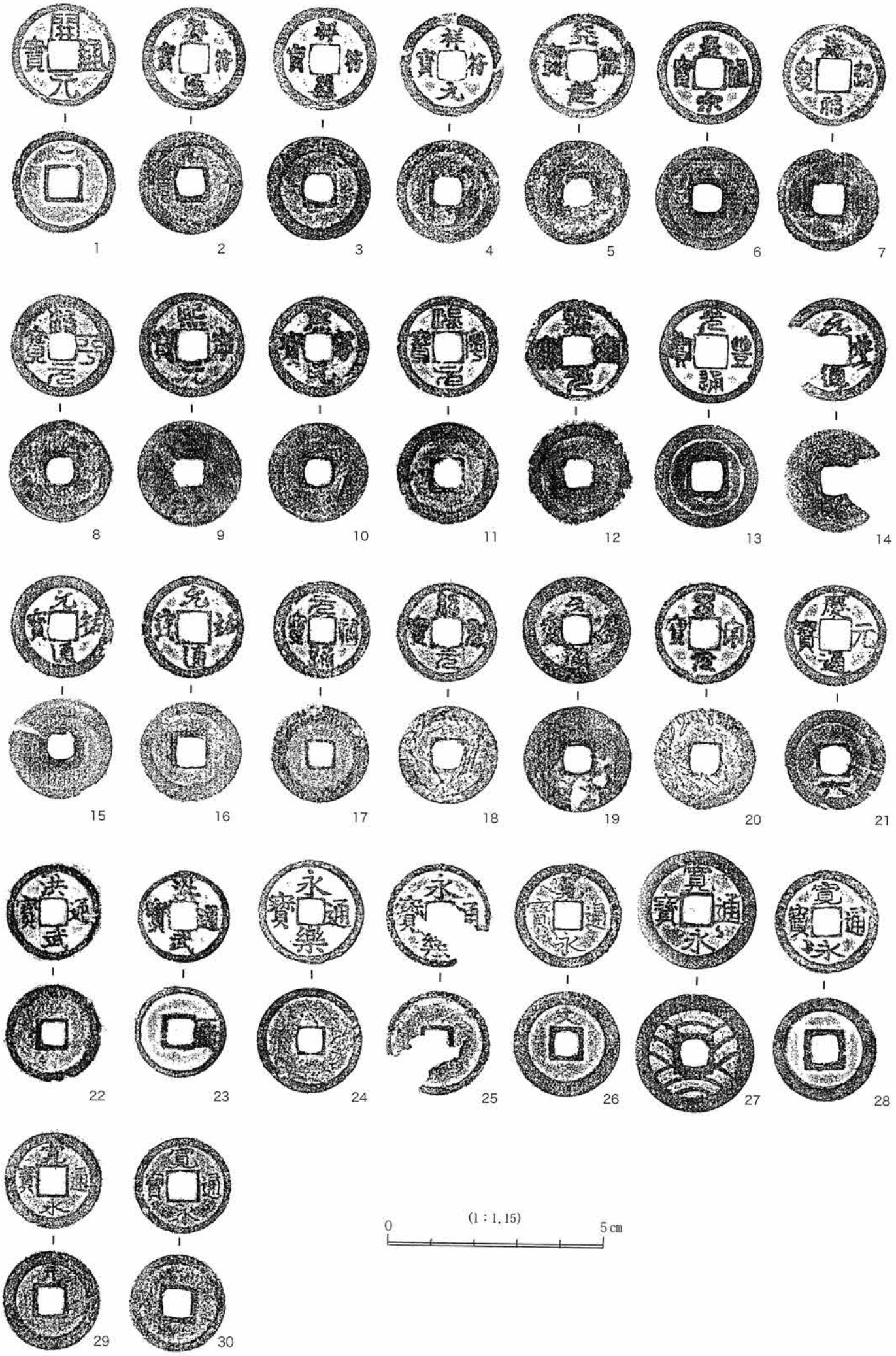

104
107
109
105
108
110
106
111
114
112
113
115
116
117
122
118
120
121
123
124
119
131
125
129
128
132
126
135
130
133
134
127
136
138
140
137
139
141
144
142
145
146
149
150
143
147
151
152
153
148
154
(1 : 3)
0
5
10
15cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
5
(1 : 3)
10
15cm

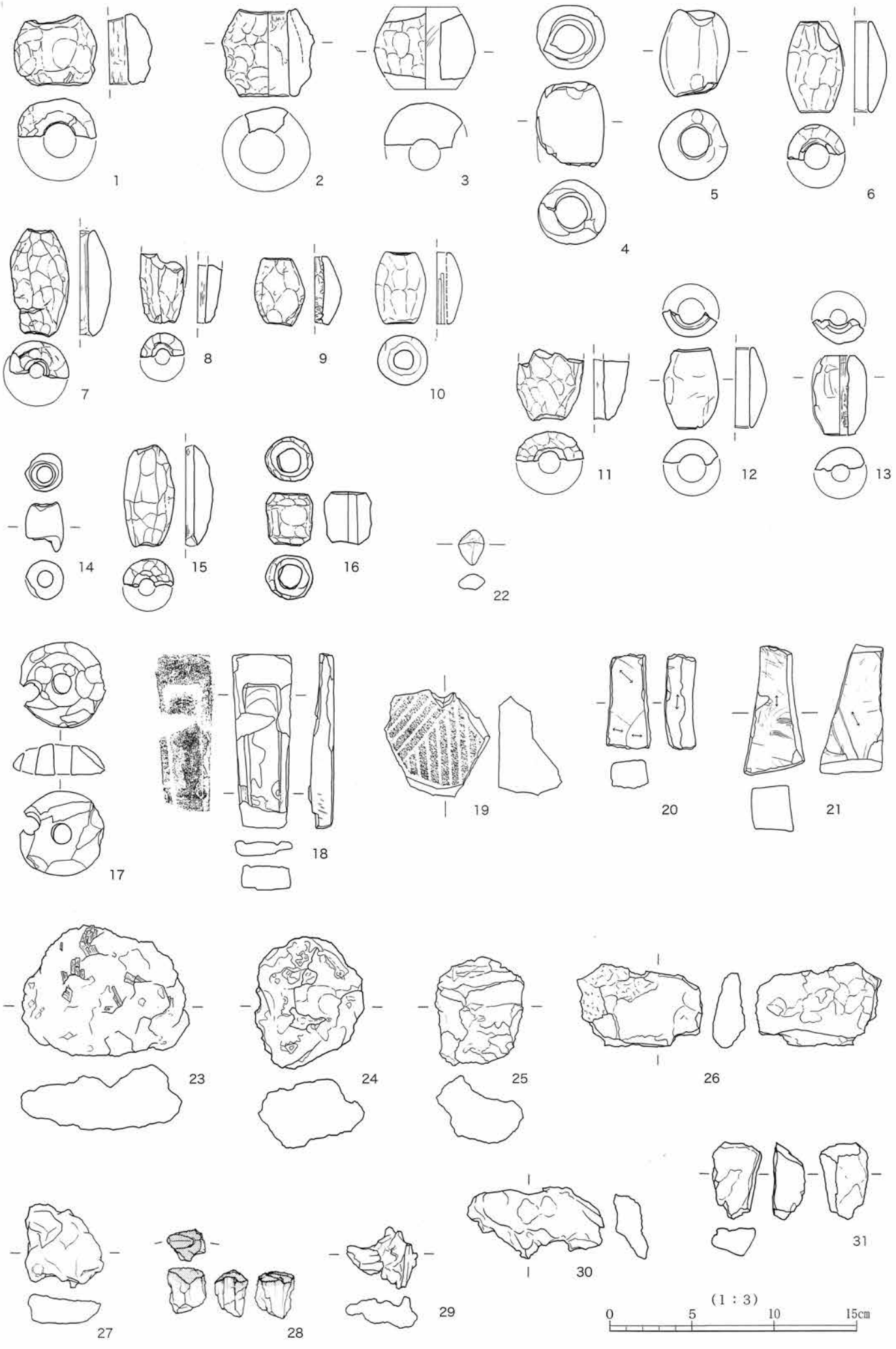

33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
(1 : 3)
0
5
10
15cm

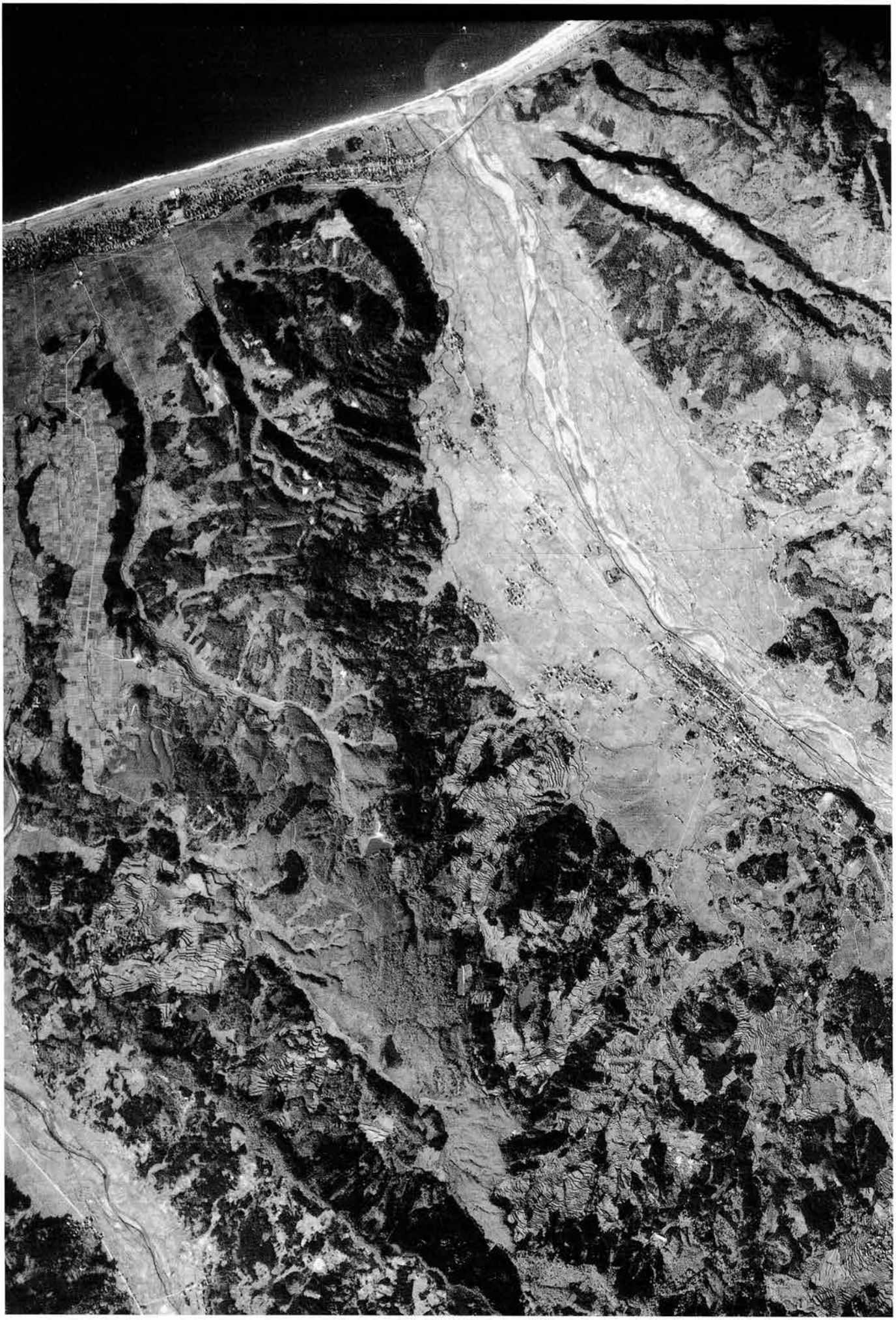

47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
(1 : 6)
0
10
20cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
[21, 22のみ]
(1 : 4)
0 5 10 15cm
23
24
25
34
35
36
26
27
28
29
30
37
38
31
32
33
39
(1 : 3)
0 5 10 15cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
(1 : 1.15)
0
5 cm

遺物実測図 (9) 土製品、石製品等





遺跡付近空中写真（1947）　（米軍撮影）

遺跡遠景（南より）

遺跡遠景（西より）

遺跡遠景（北より）

遺跡完堀状況

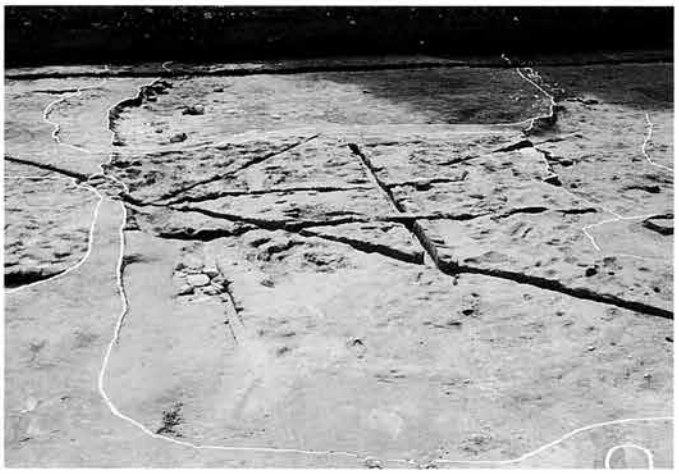
図 版 18

遺跡空中写真

方形区画遺構

方形区画遺構

方形区画遺構（南側）



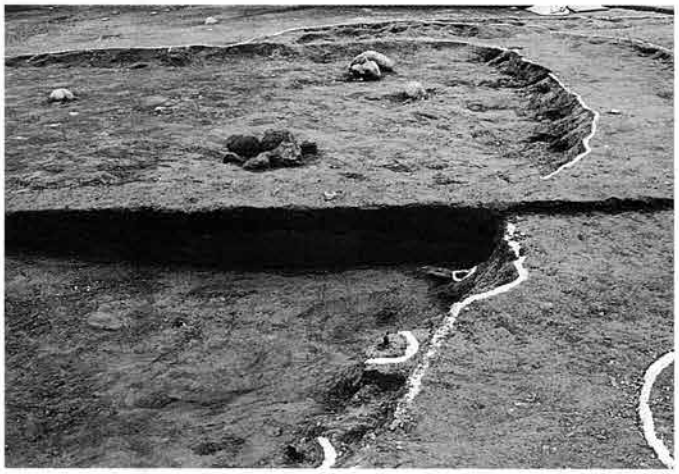
同（SX19、26）

同　上

同（SX71、28、29）

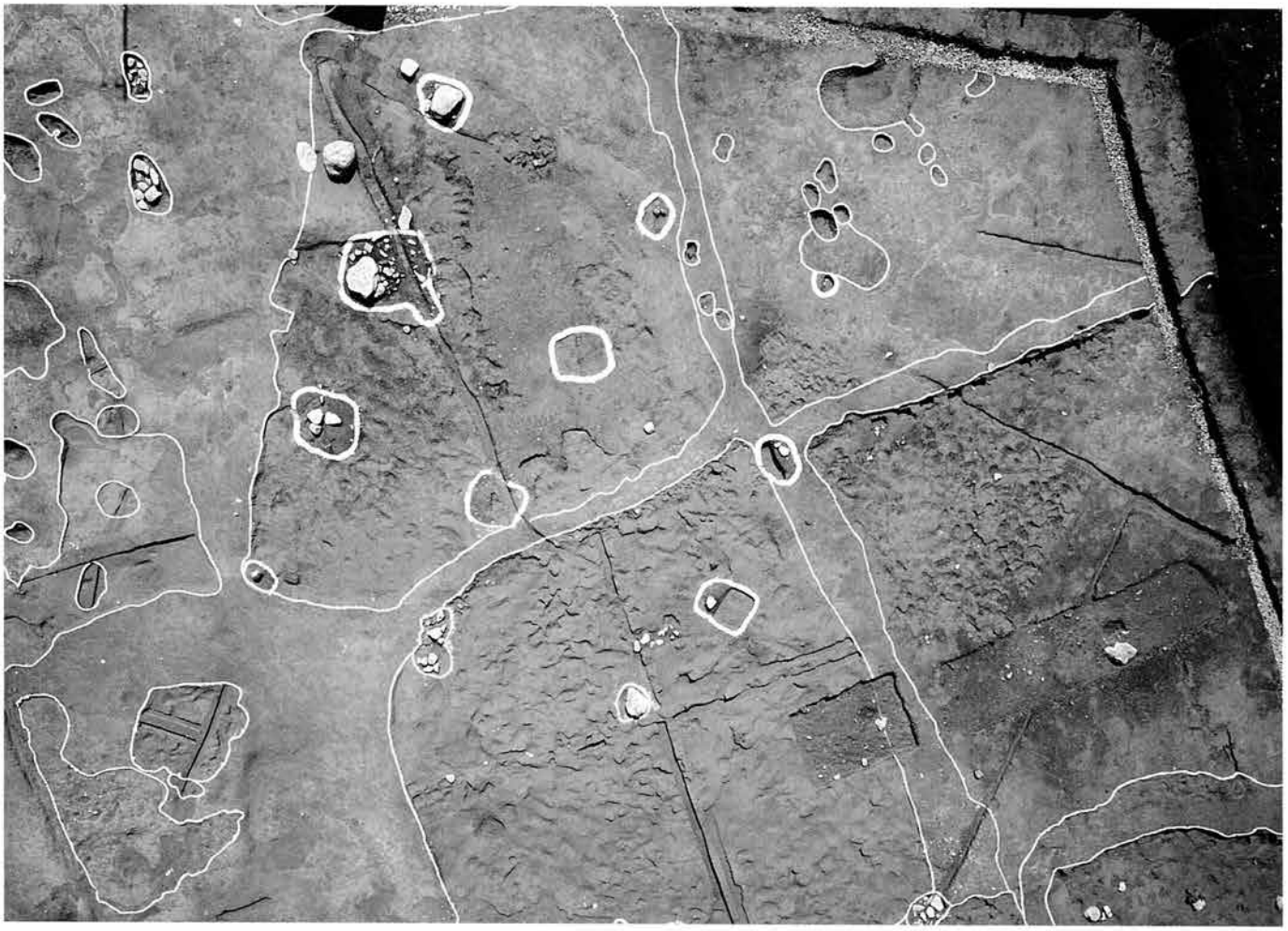
同（SX31 土層断面）

同（SX26）



同（SX19 土層断面）

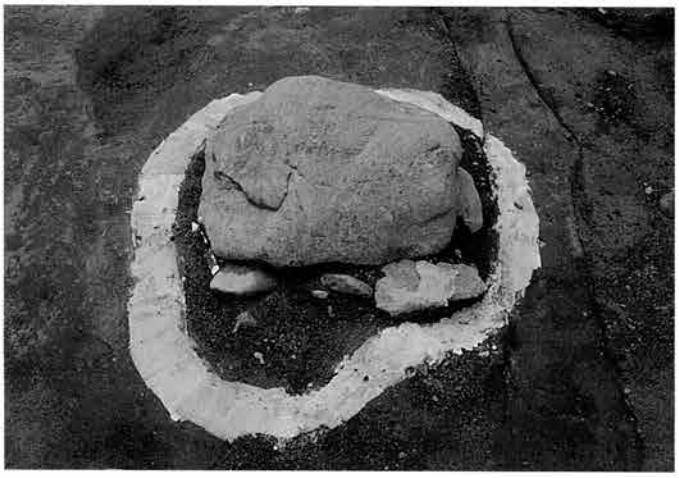
同（SX19）



礎石建物跡（SB21）

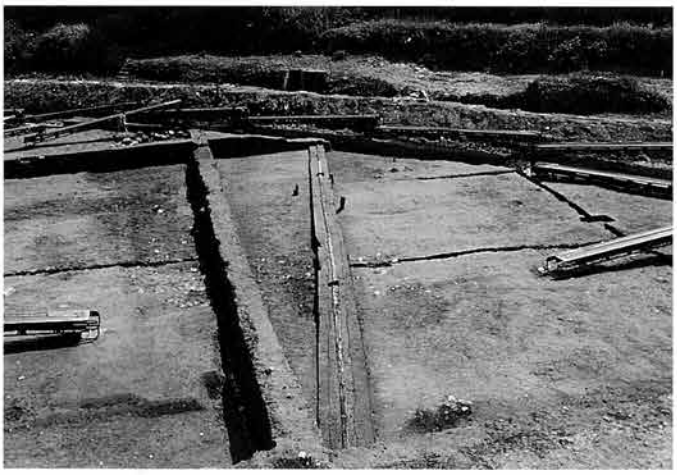
同（SB21）

同（SB21）

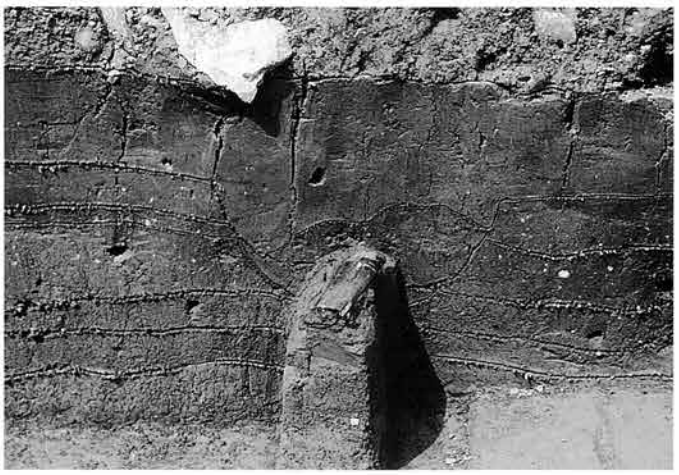


SB21－4

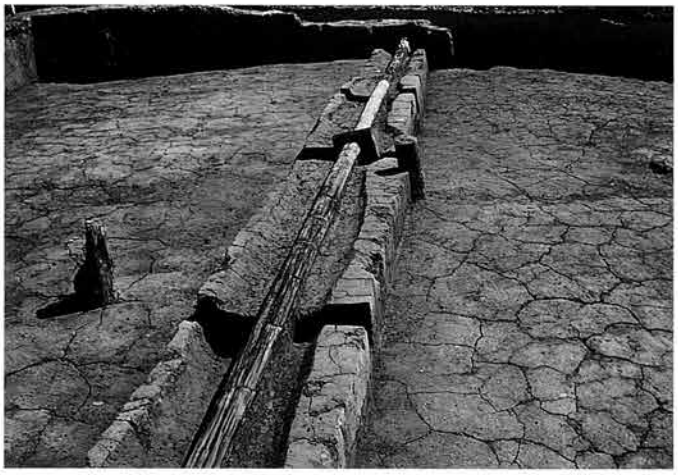
同　左



竹管遺構



同　左

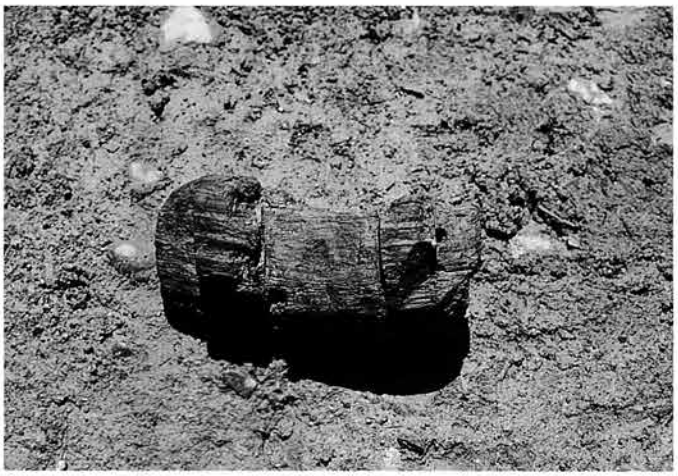


竹管遺構

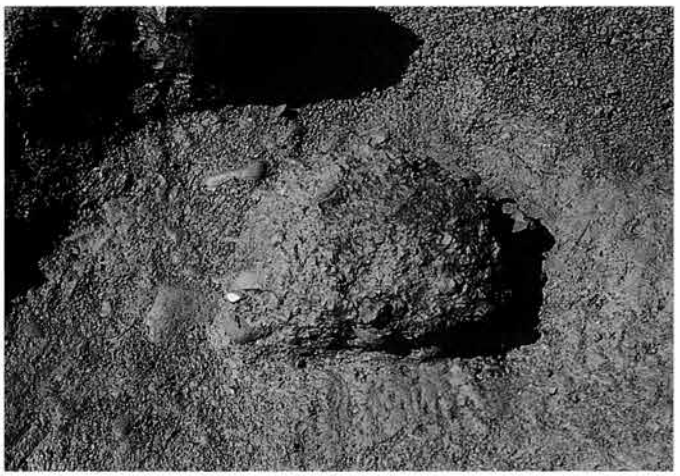
SX34

木簡出土状況

鉄鏃及び矢柄出土状況



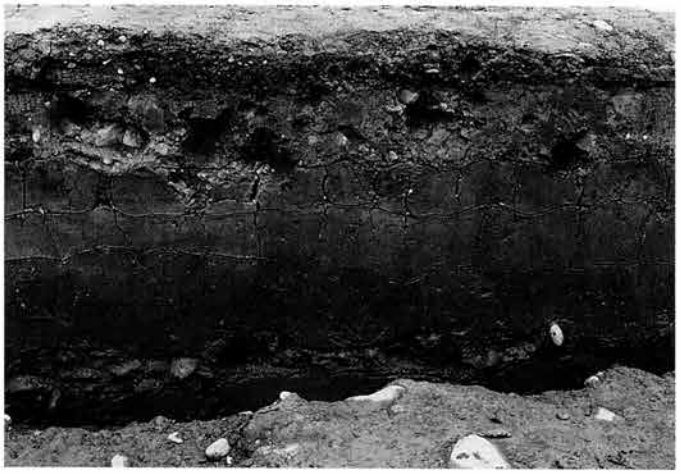
下駄出土状況



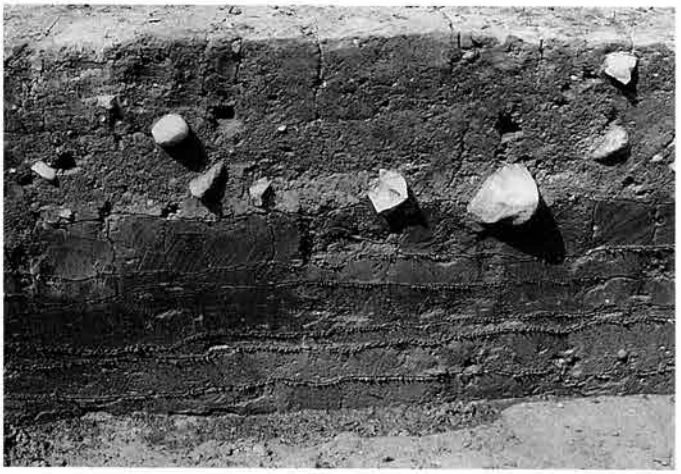
鉄鍋出土状況

土層断面

土層断面



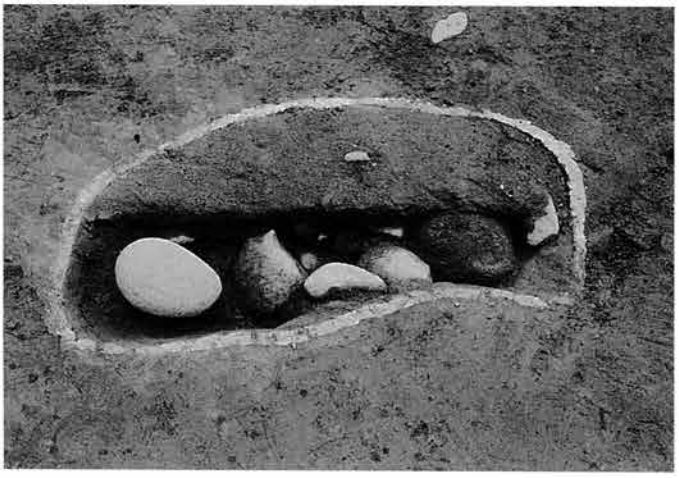
土層断面（6 H東から）



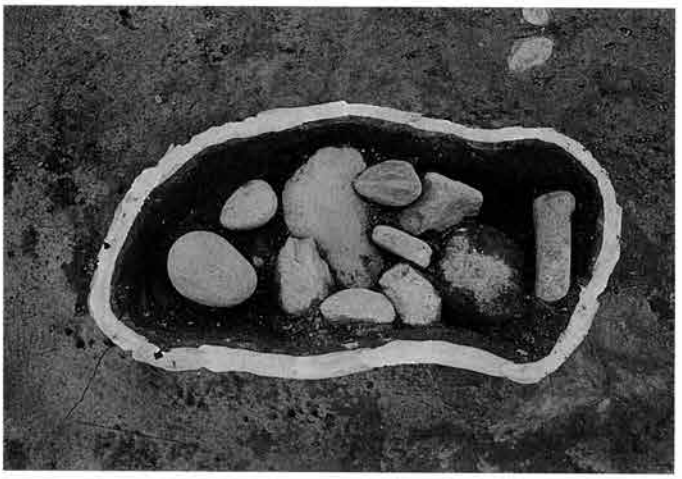
土層断面（6 G東から）

9、10、J、K付近

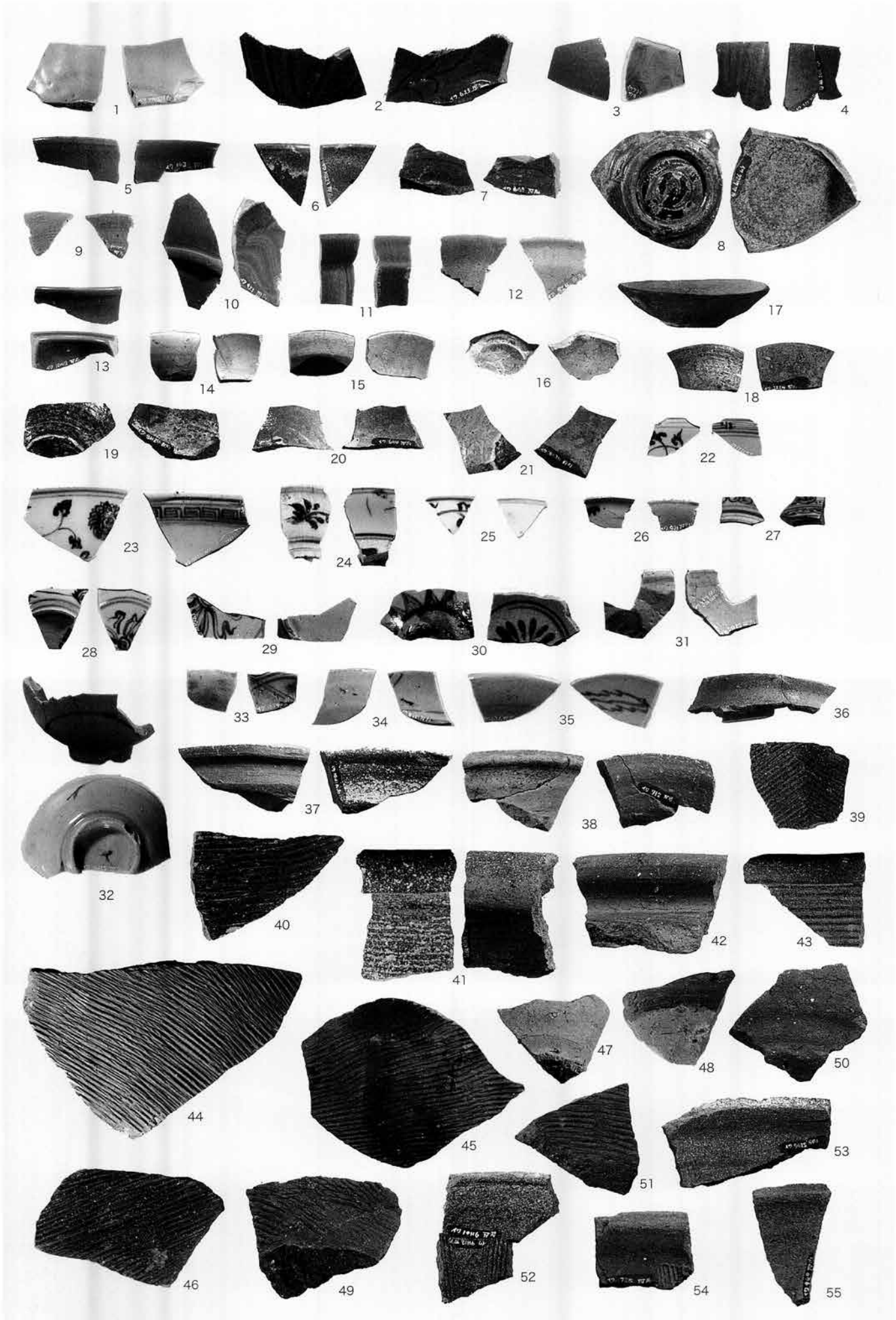
10、J付近

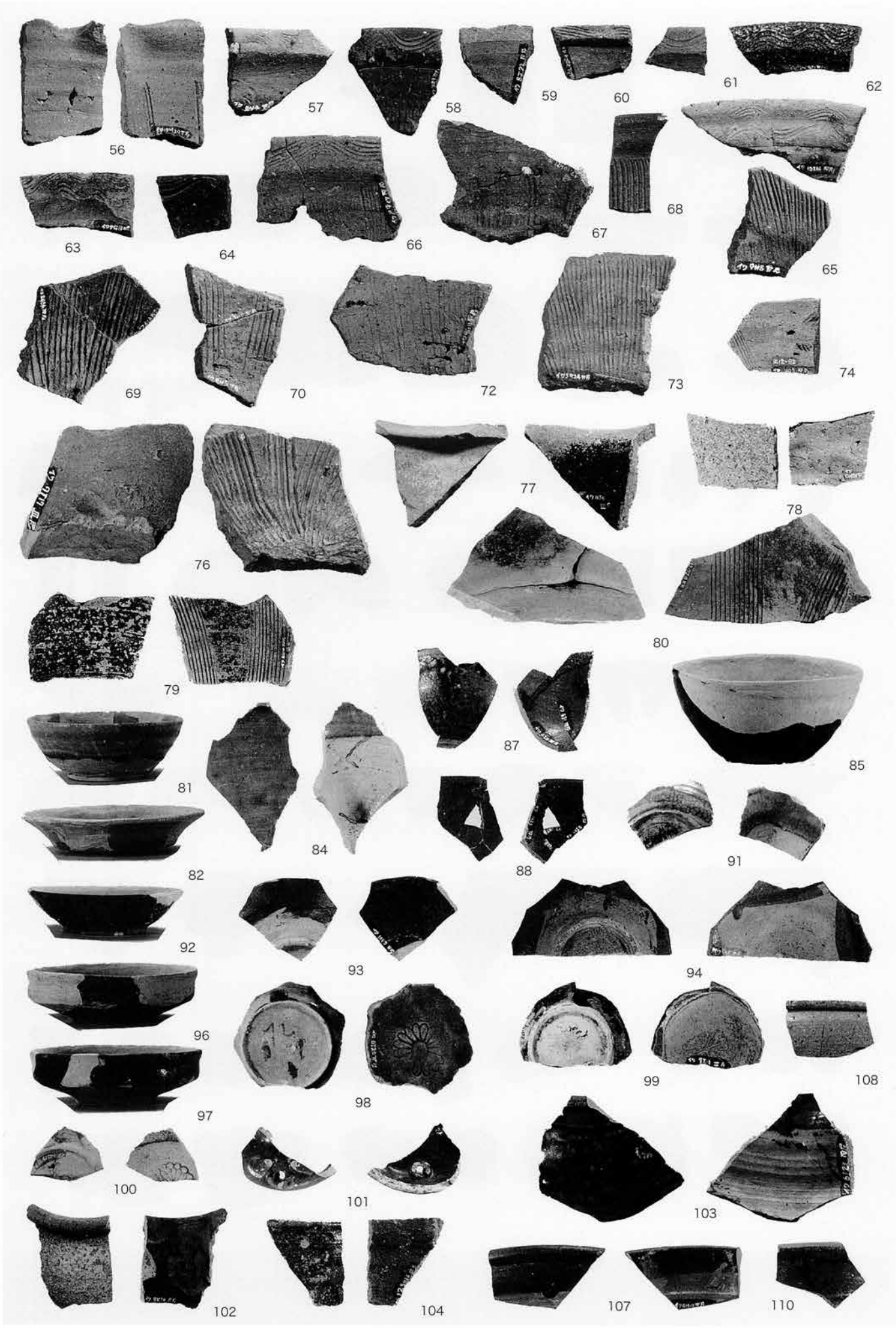


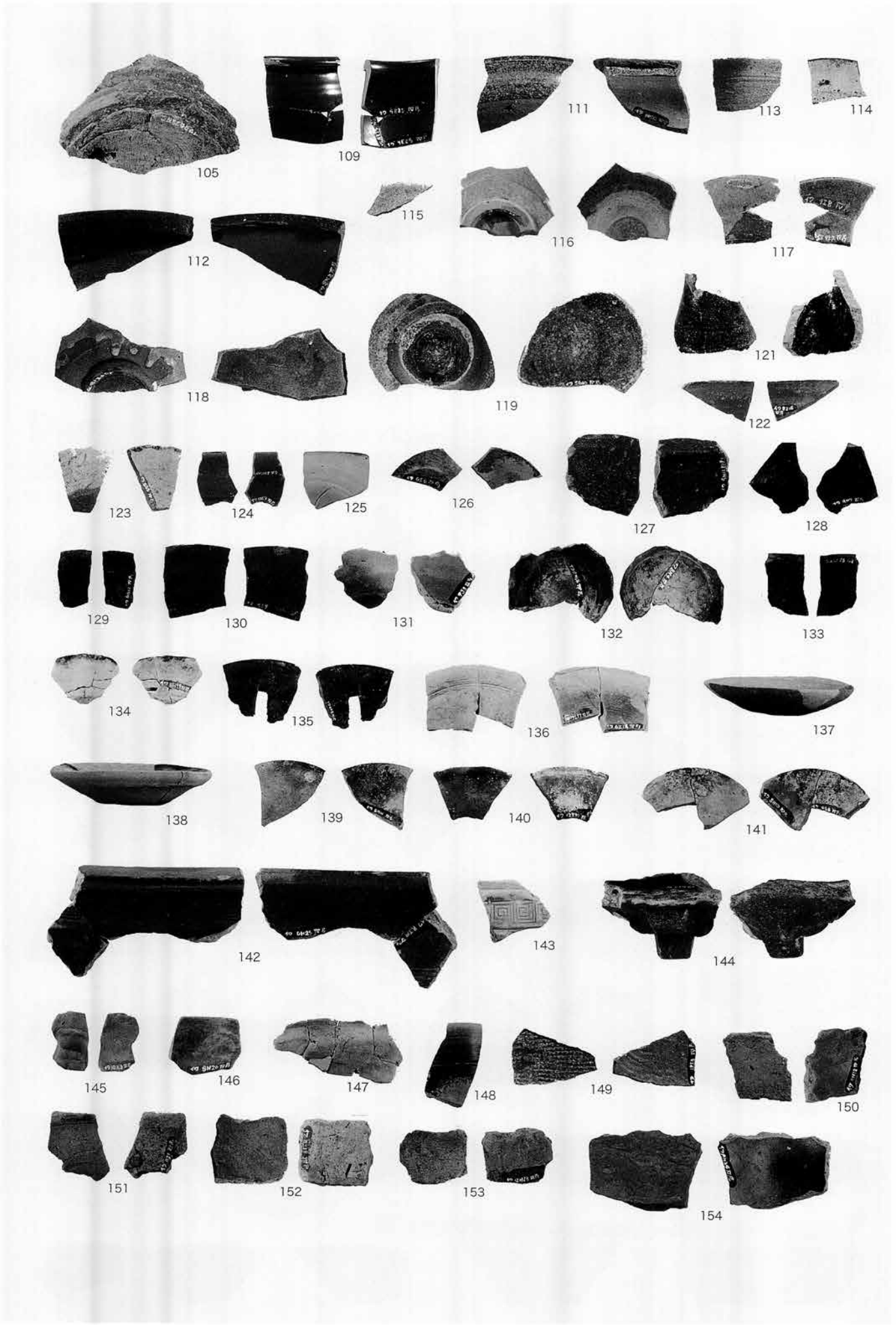
P 52 断面

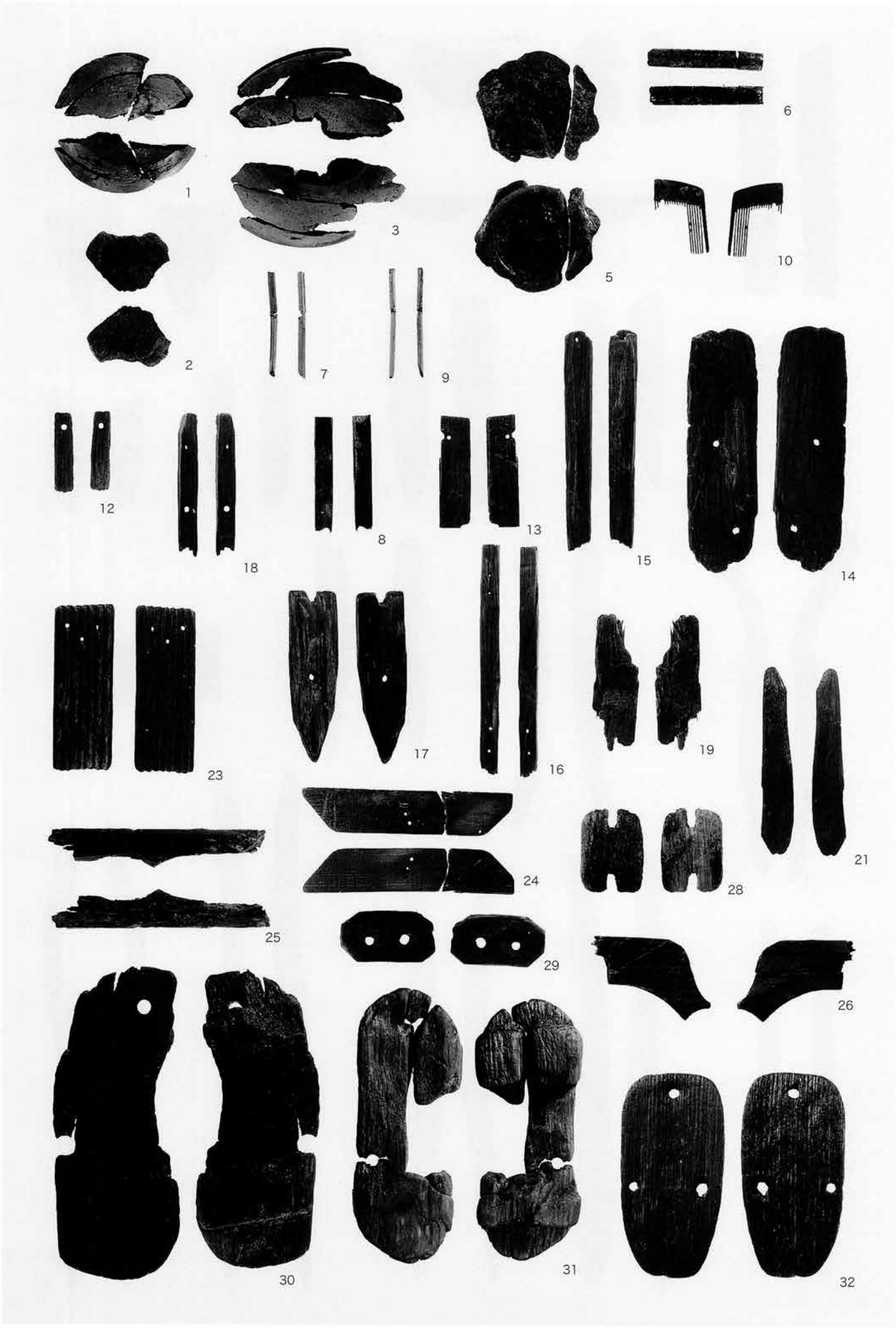


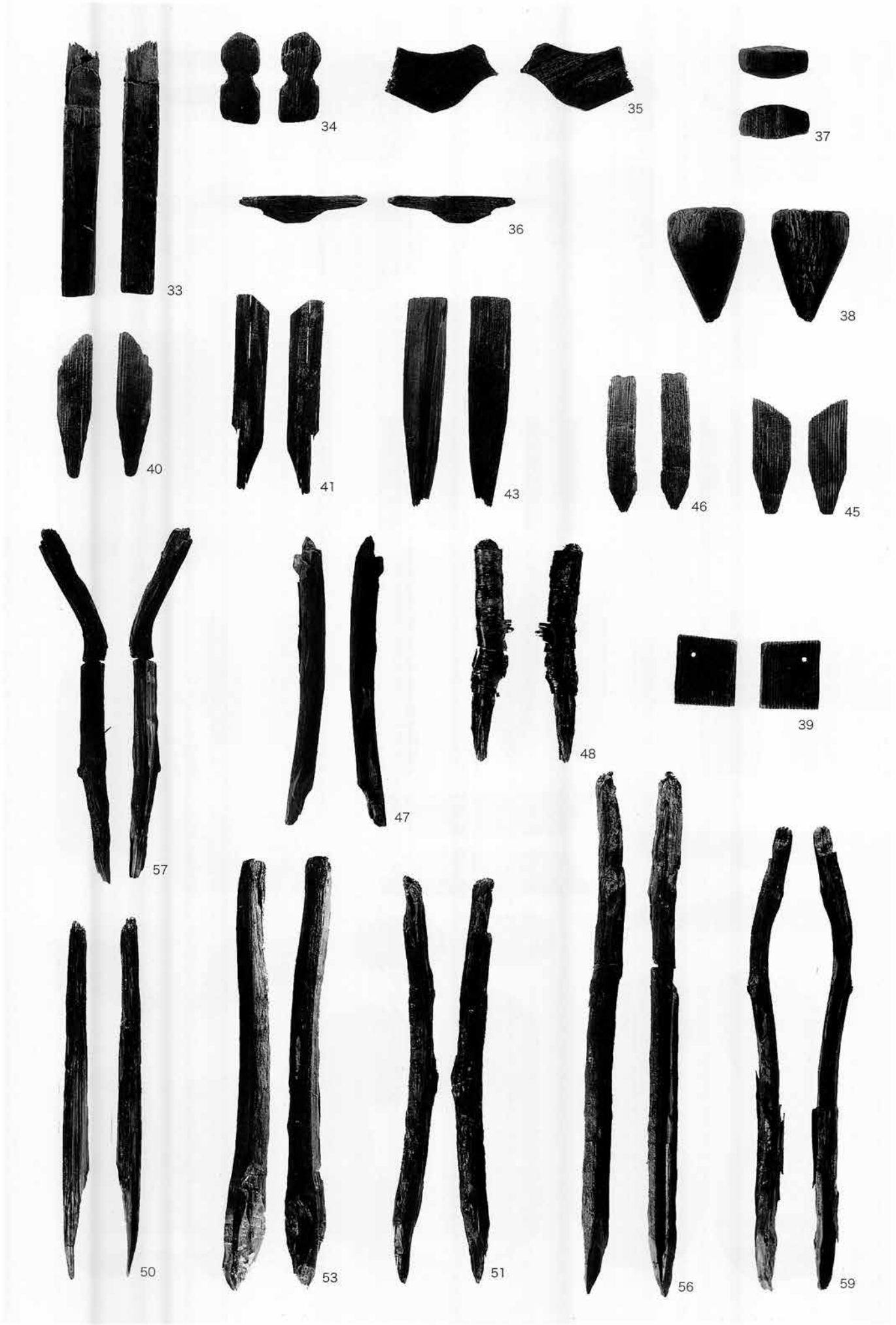
P 52 完堀

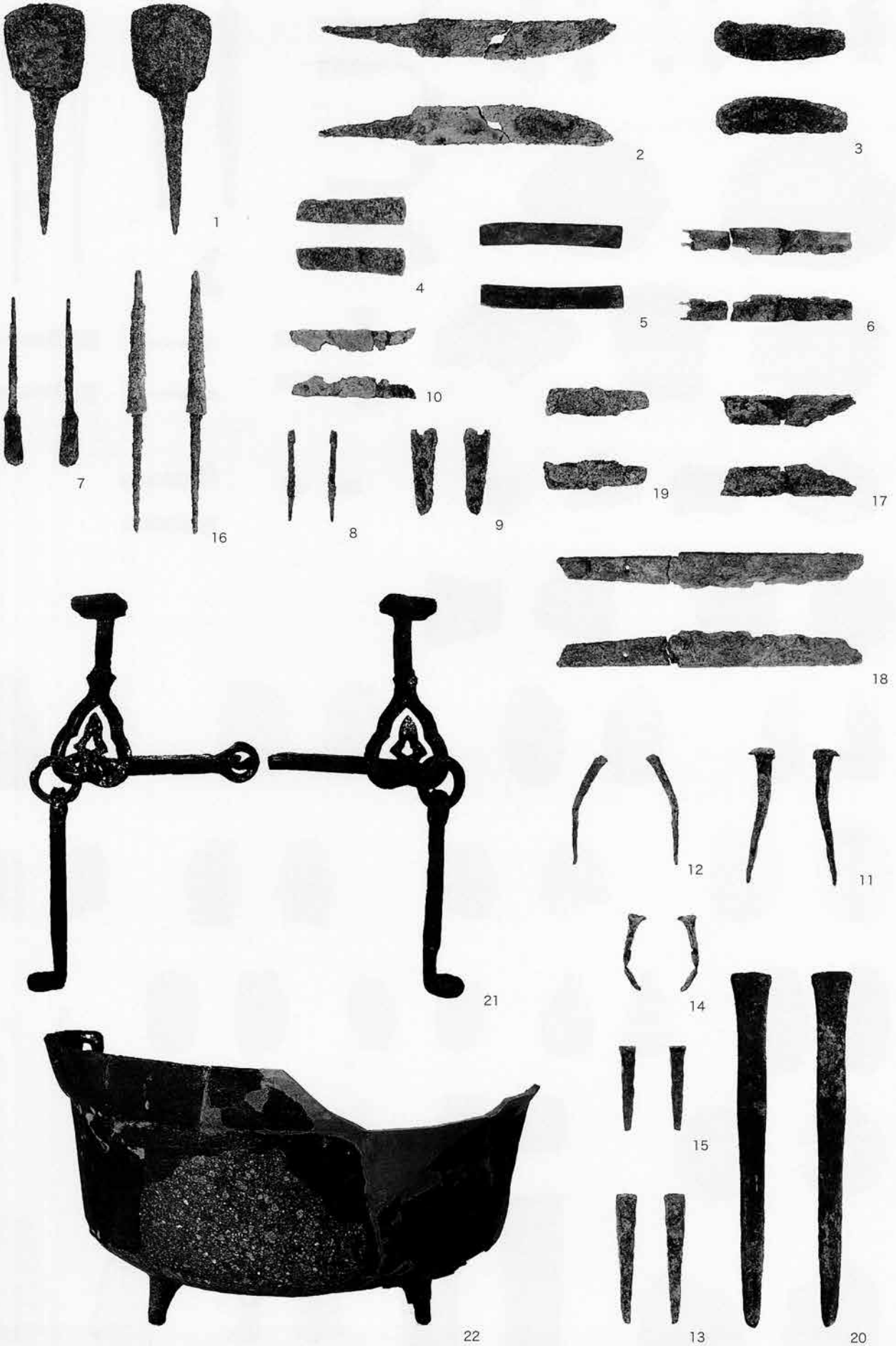

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
17
13
14
15
16
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
33
34
35
36
37
38
39
32
40
41
42
43
44
45
47
48
50
51
53
46
49
52
54
55

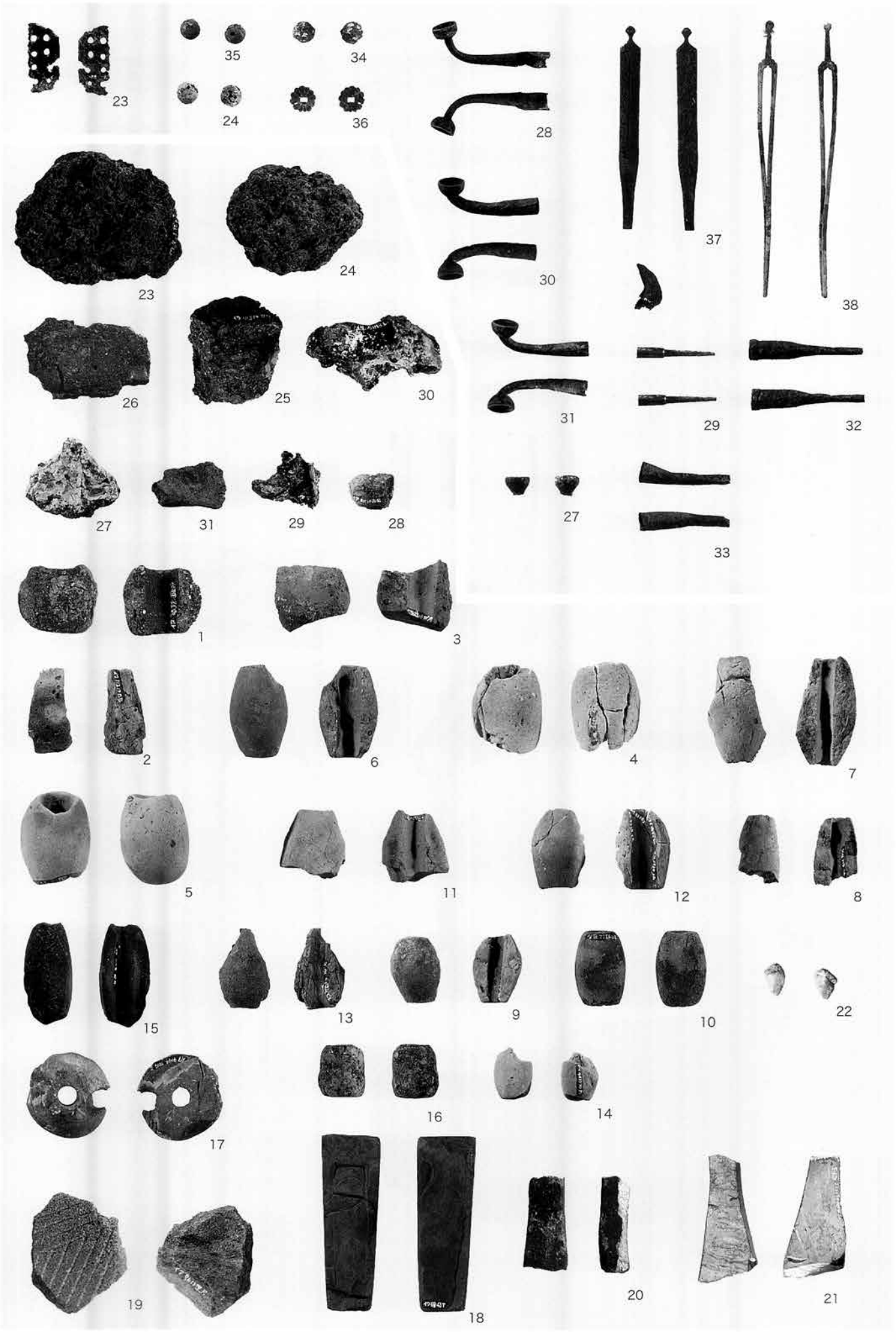

56
57
58
59
60
61
62
63
64
66
67
68
65
69
70
72
73
74
76
77
78
79
80
81
82
84
87
85
88
91
92
93
94
96
97
98
99
108
100
101
103
102
104
107
110

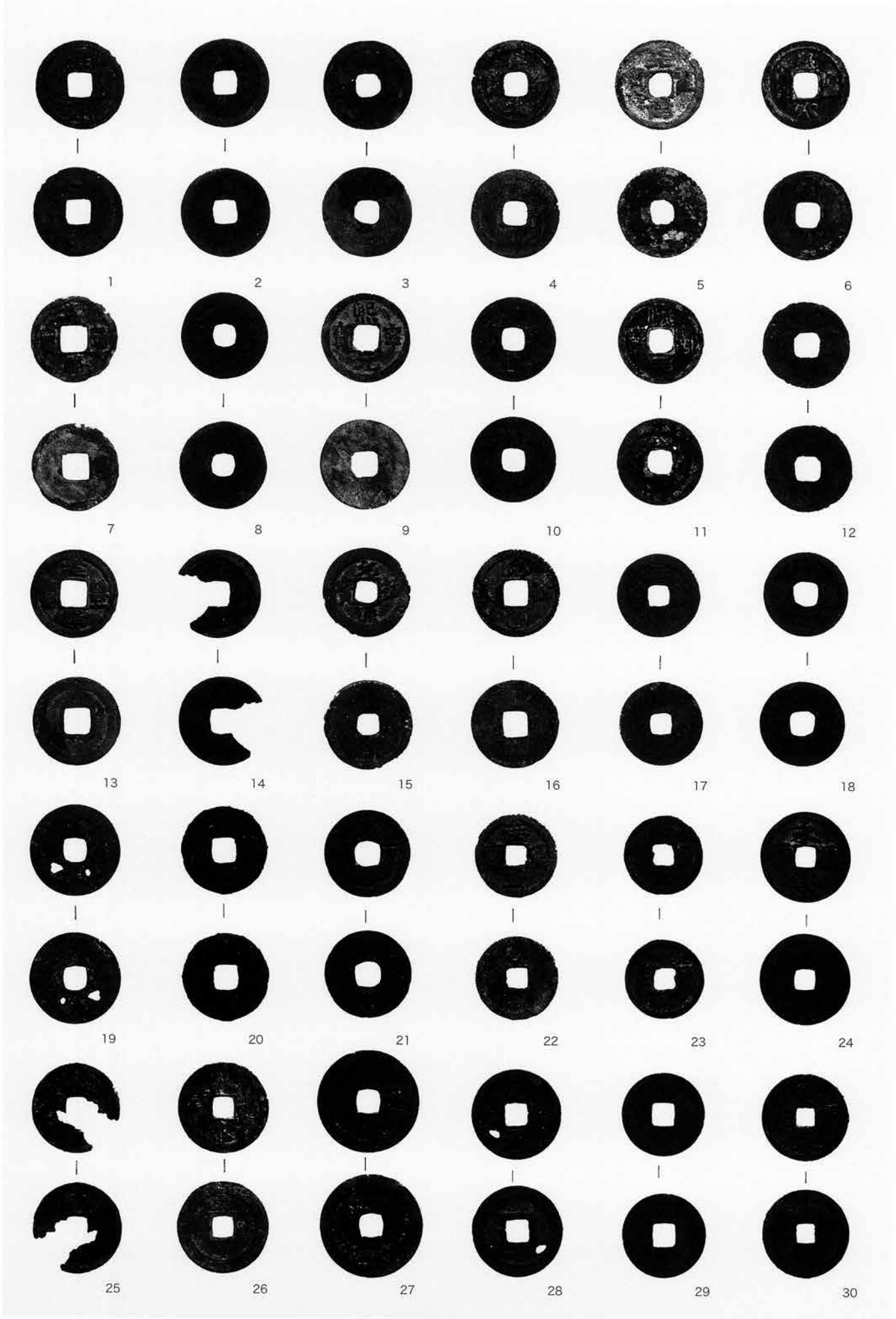

105
109
111
113
114
115
116
117
112
118
119
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154


1
3
5
6
2
7
9
10
12
18
8
13
15
14
23
17
16
19
21
24
28
25
29
26
30
31
32


33
34
35
36
37
38
40
41
43
46
45
57
47
48
39
50
53
51
56
59


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22


23
35
34
24
36
28
37
38
23
24
30
26
25
30
31
29
32
27
31
29
28
27
33
1
3
2
6
4
7
5
11
12
8
15
13
9
10
22
16
14
17
19
18
20
21


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわくら
書名	岩倉遺跡
副書名	一般国道８号糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第114集
編・著者名	山本肇　小野塚徹夫　本間克成　高橋保
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845新潟県新津市大字金津93番地1　TEL0250（25）3981
発行年月日	2003（平成15）年３月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩倉遺跡	新潟県糸魚川市大字田伏字岩倉403番地ほか	15-015	149	37度３分12秒（旧座標）	137度54分45秒（旧座標）	20010419～20010927	4,700㎡	道路（糸魚川東バイパス）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩倉遺跡	遺物包蔵地	中世（室町時代） 近世（江戸時代）	方形区画遺構（水田跡） 礎石建物	中近世の土器・陶磁器（土師器、珠洲焼、青・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、肥前系陶磁器等）中近世の木製品（木簡、碗、皿、下駄、箸等） 中近世の石器・石製品（石臼、硯等）中近世の金属製品（轡、鉄鍋、小刀、鑿等）	

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第114集

一般国道８号　糸魚川東バイパス関係発掘調査報告書

岩　倉　遺　跡

平成15年３月25日印刷
平成15年３月31日発行

発行・編集　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地１
電　話　025（285）5511
財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地１
電　話　0250（25）3981
ＦＡＸ　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社　第一印刷所
〒950-8724　新潟市和合町２丁目４番18
電　話　025（285）7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第114集『岩倉遺跡』正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	市町村コード	１５－０１５	１５２１６